

君と半井ぬしとの交際断給ふ譯にはいかすやいかにといひて、我おもてつとまもらるいぶかしふもの給ふ哉、いつぞやも我いひつる様にかの人年若く面て清らになどあれば、我が参り行ふこと世のはかり無きにしも非ず、百度も千度も交際や断まじと思ひつること無きならねど、受し恩義の重きに引かれて心清くはえも去あへず、今も猶かくて有なり、されど神かけて我心に濁りなく、我が行ひにけがれなきは知り給はぬ君にも非らじ、さるをなどこと更にかうはの給ふぞ、打恨めば、そは道理なり、さりながら我がかゝることいひ出づるには故なきにしもあらず、されど今日は便わろかり、又の日其譯申さん、其上にも猶交際断がたしとの給んに、我すらうたがはんや知れ侍らすとていたく打敷き給ふ、いぶかしともいぶかし、かゝるほどに人々集り來ていとらうがはしく成ぬれば、立別れにけり、何事とも覺えねど胸の中にもものたゝまりたる様にて心安からず、人々歸りて後この事斗思ひぬ。

十三日 長齡子ぬしのもとに順會のかすよみなり、午前より行、來會者廣子、つや子、夏子、みの子、おのれの五人成き、數々み題三十七詠止んで、雜話種々、田中ぬしなども折にふれて言ひ出らるゝことあやしう我に故ありげ也、夜に入りて一同歸宅す。

十四日 終日倉子ぬしと物語りす。是も又我を底にやうたがふ覽、折々に詫めかしき詞ども聞ゆ、いと不審、今日は此人も歸られぬ、夜に入りて只西村の鶴どの、加藤の後家さては家内のはしため達の外、師の君と我を置て人もなし、ものに寄り集ひて世の中の物がたり共す、あやしくにされる世のならひとて聞え出るとく、にけがらしからぬもなし、いづこの誰にはかゝる醜行あり、この誰には何の汚行聞ゆとか、常に見聞く友などの上につきてもにこりにしまぬ人少なげにいひはやす、聞と聞まゝ、に人の上のみならず我がよ所の聞えも覺束なく成て席のはしに耳かたぶけ居し我不圖師の君の前にいざり出ぬ、師は物語りやんで臥床に入らばやし身を起す時なり、師の君しばし待たせ給へや、我少し問ひ参らせ度こと聞参らせ度ことどもあり、今宵聞て給はるべき哉はた明日になすべきにやといふに、師の君やを座を定めて何事の問ぞ今宵聞んとの給ふ、半井うしのことばかねて師にも聞かせまつりて、其人となりも身の行ひもいとよく知り給ふ上にて、我が行かひも止め給はざりしなれば、我心に憚かる處いさゝかもあらず、先かく、しかく、に人の申なむ何の事と知らねど、或ひは半

井のことに依りてにや侍らん、もとより知らせ給ふ様に我より願ひての交際にも非ず家の爲身のすぎむひの爲取る筆の力にとこそたのめ外に何のこゝとあるならず、さるをか様に人ごとなどのしげく成るなんいと心ぐるし、哀師の君の御考案はいかにぞや、もしみ心にもこは交際せぬ方宜しかるべしなど覺すことあらばあきらかに仰せ聞けられてよ、我は我心を信するまゝに男女の別をも思はず、世の人間をも知す、一向にしたりうせしものからかへり見ればいと心安からず、いかさまにしていかさまにすべきにか御教へ給らまほしといふ、師の君不審氣に我をまもりて、扱は其半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ、こは何事を行末の約はさて置て我いさゝかもさる心あるならず、師の君までまなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨めば、夫は實かく、眞實約束もなにもあらぬかと問ひ極め給ふも悲しく我七年のとし月傍近ありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふぞ恨めしく、人目なくば聲立ても泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公に妻也といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ、おのづから縁しありて足下にも此事ゆるしたるならば他人のいさめを入るべきにも非ず、も

し全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに、我一度はあきれもしつ一度は驚きもしつ、ひたすら彼の人にくゝつらく、哀潔白の身に無き名おほせて世にしたり顔するなんにくしともにくし、成らばうたがひを受けしこゝらの人の見る目の前にて其しゝむらさき膽を盡くして、さて我心の清らけきをあらはし度しとまで我は思へり、猶よく聞參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて我が爲いとをしがられしとか、さるは世の聞えもよろしからず才の際なども高しともなき人なるに夏子ぬしが行末よいと氣のどくなるものなれなどいひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ断りの手段に及ぶべしなど、師君にも語る、臥床に入れどなどは寝られん。

十五日 午後より半井君のもとへ至る、梅雨降つゞく頃はいと詫し、うしがもとにはいと子君伯母君二處居たり、君は次の間の書室めきたる處に打ふし居給へり、雨のいたく降こめばにや雨戸残りなくさしこめていと聞し、いと子の君伯母なる人に向ひて御覽せよ樋口様のお髪のよきこと、鳥田は實によく似合給へりといへば、伯母君も

井のことに依りてにや侍らん、もとより知らせ給ふ様に我より願ひての交際にも非ず家の爲身のすぎむひの爲取る筆の力にとこそたのめ外に何のことあるならず、さるをか様に入ごとなどのしげく成るなれど心ぐるし、哀師の君の御考案はいかにぞや、もしみ心にもこは交際せぬ方宜しかるべしなど覺すことあらばあきらかに仰せ聞けられてよ、我は我心を信するまゝに男女の別をも思はず、世の人間をも知す、一向にしたらうせしものからかへり見ればいと心安からず、いかさまにしていかさまにすべきにか御教へ給らまほしといふ、師の君不番氣に我をまもりて、扱は其半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ、こは何事を行末の約はさて置て我いさゝかもさる心あるならず、師の君までまさなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨めば、夫は實かく、眞實約束もなにもあらぬかと問ひ極め給ふも悲しく我七年のとし月傍近ありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふぞ恨めしく、人目なくば聲立ても泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公に妻也といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ、おのづから縁ありて足下にも此事ゆるしたるならば他人のいさめを入るべきにも非ず、も

し全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに、我一度はあきれもしつ一度は驚きもしつ、ひたすら彼の人にくゝつらく、哀潔白の身に無き名おほせて世にしたり顔するなんにくしともにくし、成らばうたがひを受けしこゝらの人の見る目の前にて其しゝむらさき膽を盡くして、さて我心の清らけきをあらはし度しとまで我は思へり、猶よく聞參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて我が爲いとをしがられしとか、さるは世の聞えもよろしからず才の際なども高しともなき人なるに夏子ぬしが行末よいと氣のどくなるものなれなどいひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ断りの手段に及ぶべしなど、師君にも語る、臥床に入れどなどは寝られん。十五日 午後より半井君のもとへ至る、梅雨降つゝ頃はいと詫し、うしがもとにはいと子君伯母君二處居たり、君は次の間の書室めきたる處に打ふし居給へり、雨のいたく降こめばにや雨戸残りなくさしこめていと閑し、いと子の君伯母なる人に向ひて御覽せよ樋口様のお髪のよきこと、島田は實によく似合給へりといへば、伯母君も

實に左なりく、うしろ向きて見せ給へ、まことに昔しの御殿風と見えて品のよき齒の形哉、我は今様の根の下りたるはきらひ也などいひ給ふ、半井君つと立て、いざや美しく成り給ひし御姿みるに餘りもさし込たる事よとて、兩戸二三枚引あく、口の悪き男かなとて人々笑ふ、我もほ、笑むものから、あの口より世に無き事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我知らずならまへもしつべし、我師の君より教へられたる様にことつくりひても語りす、師の君のもとに家の内取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて、いとせめて頼まれぬ、さるを無下にはなど断はらるべき、とし月の恩といふ義理はくろがねの刃も立す、今しばらくは手傳ひ居らんとす、さすればいつぞや仰給はりし紅葉君のことも何も先え寄りの事ならずば折角御目通りしてからが筆も取りがたくば其かひあるまじく、お前様へ不義理にも成り申すべし、この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて参りつるなりといふ、それを困りたるもの也、尾崎の方も萬々話しとゝのひていつにてもあれ御目にかゝらんといふとか、明日にも手紙にて君に其通知せんと思ひしを今に成て断りもいひ難し、いかにぞや筆とることはとまれ一度對面丈なし置給はずやといふ、さりながら御目通りせし上

にて筆取りがたしといは、何の甲斐もあるまじ、我も色々心にかゝる事ありて物かたりにては盡し難けれどこゝにかしこにいとものうるさく身を責る頃なればといふ、さらば先兎角師の君に打明し給へよ、いつまで包み給ふともかくしおほせらるゝにもあらじ、其上にてよき考案つけらるゝぞよき、こゝにかしこに義理だて斗し給ふとも家計のことなどもあり、心を勞し給ふほど人は察し申間敷になどかたたる。常ならましかばいか斗嬉しと聞く言の葉ならむ今日は何となく上の空なり、種々ものがたりの内に我が心なぐさめんとにや高島炭礦のものがたりなどして笑はせんとす、何事ぞ聞きも入られず暇を乞ふて立つ、宅用少し有て菊坂へかへり、少時にて小石河に歸りぬ、今日のあるまじもの語りなどして 師の君よりさし圖うけて半井君のもとへ文を出す。

十六日 田邊君参り合て種々もの語りす、半井君の事をいふ、此方の縁を断ちて更に都の花などにも筆を取らんといふ相談也、久しう遊びて歸らる。

十七日 田中君参る、これにも半井君のものがたりす、打笑みながら聞居て半疑の姿いとよく見えぬ、終日かたりて歸る、文したゝめて伊東君送りもらひ度よし托す。

十八日 伊東君参られたり、百年の知己は何のかくすべき事もなくて思ふまゝにか

たり思ふまゝ、に無實を訴えて、君のみは實にや受給ると嬉し、猶この末いと多かれどあわたしき折にて書きも盡さず。

廿二日 家に歸る、こゝにもさまざまに相談してきて半井うしのもとに返すべき書物もて行、折から午前成しかば君はまだ蚊屋の内にもうまいし居給へり、ゆり起さんもさすがにてしばしたためらふほどにひる近く成ぬ、ふと目覺してこは夏子どのか淺ましき姿や御覽じけん、など起しては給はらざりしぞといひつゝ、あわたししく起出給ひぬ火桶の左古に座をしめつゝ、ものがたりしめやかにす、情にもろきは我質なればにや是を限りに今よりは參らじと思ふに何ごととなく悲しくさへ成りぬ、伊東の夏子ぬしさては我母君妹などのいへるにも、書たえたる様にするはいとあしきこと也、其故よし審らかに語りて得心の上、に交際を斷ぞよきといへるに、我もしかせし方宜かるべしと思へば、今日しも人氣なくつゝまじきこといふにはいとよき折からなり、我しばしはいひも出さうつぶきが成しが、さりともしはではつべきならじと、いとせめてものがたり出づ、例しらぬにしもあらぬにあたら御朝ねの夢おどろかし奉る罪ふかけれど、申さで叶はぬ事ありてかくは參り來つる也といふ、君何事ぞくと問ひ給ふ、い

でや我が上の事のみならず君様の御名もいとをしくてなん、實は我がかく常に參り通ふこといかにして世にもれけん、親しき友などいへば更に師の耳にもいつしかいりて疑はるゝ處かは、君様と我れまさしく事ありと誰もく信ずめる、いひとかんとすればいとしくまつはりて此無實の名晴るべき時もあり、我身だに清からは世の聞えはゝかるべきにも非ずとおもへど、誰は置きて師の手前是によりてうとまれなどせられなば一生のかきんに成べきぞれ愁はしうと様かうさまに案じつれど、我君のもとに參り通ふ限りは人の口ふさぐこと難かるべし、依りて今しばしのはどは御目にもかゝらじ御聲も聞じとぞおもふ、其こと申さんとて也、しかはあれど我は愚直の性かならずく受參らせたる恩わするものには候はず、かゝること申出る心くるしさ推し給へといふ、大人も打あふぎてさる事成しかさると成しか、我は又勘違ひをなし居たりお前様余の男子に逢ふはいや也とつねく仰せられしかば紅葉に對面うるさしとて夫故の御と絶か、さらすば此日頃中島様御中立などにてしかるべき御縁や定まりたるなんど、川村の老人とも語り居しなり、何はとまれ夫は御迷惑の事出到したるもの哉、我は男の何ともなければお前様無かし御困りお察し申也、さりながら我は今更に驚きは

せず、かゝる事いわれんとはかねて覺悟なり、先我を人にしていわせても見給へよ種口様は此頃半井といふ人のもとへ時々に通ひ給ふよし、其男もまだ老朽たる人にも非ずとかかつは一人住みにあんなると聞え、とし若き乙女の故なきにしもあらじと此うたがひ立つは無理ならずして、何事なき我々二人が無理なるぞかして事もなげに笑ふ、さりながら何方の口より世にもりけん、我が友などにもお前様のこと物がたりたる人もなきにかくすにあらはるゝが常なればにや人は我がしらぬ事までしる物なり、されど猶よくおもへば必竟は我罪かもしれず、先頃野々宮ぬしに物がたりの時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみかねてお前様の事しきりにたゝえつ、何と嫁に行き給ふこと能はぬ御身分か、さらばよき聲君のお世話したし、我れ何ともして我家を出ることあたふ身ならばお嫌かしらすしるても貰ひていたゞき度々のよなど我れ實はいひたり、夫や是や取あつめて世にさまゝくにいひふらすなるべし、今仰せられし様に恩の義理のとけがにもの給ふな、我は御前様よかれとてこそ身をも盡すなれ、御一身の御都合よき様が我にも本望なり、今よりはか來我家にお出あるな、さりとして丸でかけ絶給ふも少し人目をかしからんに折ふしは音づれ給へ、とかくは御一人住みが悪

るき也、我いつも申様に御身を定め給ひしかた宜かるなり、今のうき名しばし消るとも我も君も生涯一人にて世を盡さんに、口清うこそいへ何とも知れた物ならずなど尾ひれ添へられんかするべからず、お前様嫁入し給ひしの際、我一人にてあらんとも、哀不びんや女はちかひをも破りたらめど男は操を守りて生涯かくてあるよなどはよもいふ人も候はじとてはとと打笑ふ、さまゝくの物がたりしていざや歸らんといへば先今しばし宜かるべし、今日は御せん別ぞかし、又いつの日諸共に粗茶すゝり合ふこと有やなしや期し難きに今しばししはしとてもの語る、此人の心かねてより知らぬにもあらねばか様の事引出しつるにくさ限りなけれど、又世にさまゝくにいひふらしたる友の心もいかにぞや、信義なき人々とはいへ誠そら言斗り難きに夫をしも信じ難し、あれと是とを比べて見るに其偽りに曲てなけれど猶目の前に心は引かれて、此人のいふこととくに哀に悲しく涙さへこぼれぬ、我ながら心よはしや、かゝるほどに國子迎ひに来る、家にもいさゝかはうたがひなどするにやあらむ、打つれて歸る。

や車 雨天の時をば川原にすを結び立て魚をとる也。
地引あみ。

豊トヨ

羝羊トシヨウ

紬トウ

しのぶぐさ (六月)

廿四日 半井ぬしの依頼にまかせて、畑島君に見すべき爲の尾崎紅葉紹介断りの文を出す。

廿六日 夕歸宅す。國子の物がたりに聞けば廿三日に半井ぬし宅前まで参られし由折ふし來客ありしかば憚りてにや立寄もせで行かれたるとなり、今宵は家にとまる。

廿七日 今日亡兄の命日也、西村君來訪されたるに茶菓をもてなして談話數刻、おのれは直に小石川へゆく。

七月一日 俄に師君思ひ立て鎌倉に趣かれんとす、同伴は田中君なり、小笠原伊東の兩君をも誘はれたるものからいづれも障りあるよし、午前十時家を出らる、留守居には西村の鶴どのおのれなり、下婢二人と池田屋の妻が大方家の内取まかなへば鶴どのは取あつめて針し事などなし置かんとす、おのれは來客の應接の外は他事もなきに一意著作に従事せんとす、今日は終日師君が路ちのほといひ暮して夜にも入りぬ、戸ざし早うしてみなく一處に寄りつどひても語りどもなす。

二日 師君のもとより安着の状来る、宿は長谷の三橋なり。

三日 田邊君より我に文来る、さまざまあり、歌も有りけり。

四日 師君より又状来る、下宿がへをされたるよし、八幡前の三ツ橋支店へなり、中三日ほどにて歸らむなどの給ひしが明日ならんか、明後日かと指をる。

五日 午後二時といふに歸宅されたり、やがて大雷雨、其夕べ暇を乞て我は家に歸る。

六日 小石川へ歸宅、歸路河村の女中に逢ふ、半井君の安否をとふに河村の主人病歿したるよし、うし一人にて萬の取まかなひに奔走いそがはしとかきく、此日伊東君に手紙を出す。

九日 鍋島邸に行幸あり、師君參邸、午後十時頃歸宅、此日半井ぬしのもとに文を出す。

十日 同じく行啓あり、師君參邸せられんとす、おのれは明日宅に事ありて夫にもうけ盡さんとて暇を乞ふ、西村の禮どの參る、是に諸事をゆづりて歸宅直に伊東君を訪ふ、金子借用せしなり。

十一日 亡父君祥月命日たい夜也、菊地の内君及び上野の伯父君、久保木の姉君を呼びて茶飯を供す、芝兄君は參られず、日没一同歸宅。

十二日 早朝築地に趣く、國子と我と也、墓參終りて師君頼まれの伊東しき子とじをとふ、午前歸宅直に中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る。午後より大雷雨、思ひ立ことありて田邊君を訪ふ、三時より家を出で行く、途上の往來ふつに絶て盆を覆へす様にふる雨いとすまじ、女史がもとに至りつきてよりことにはげし、談話數刻晩さんの馳走を受く、太一君にも逢ふ、日くれてより歸宅。

十四日 師君を訪ふ、直に歸宅。

十六日 小石川へ行く。

廿一日 二日と圖書館に通ふ、陶器のこと取しらべんとて也。

廿三日 稽古日なり、一同歸宅の後、頭痛はげしく暇を乞て灸治に行んとす、途中大雷雨、しばし表町の西村君のもとにしのぐ、こゝより一時家に歸る方よかるべしと定めて灸はやめになす、師君のもとにはがきを出す、是より歸宅、何事もなく日没に成りぬ。

廿四日 雨天。

廿五日 おなじく。

廿六日 曇天。圖書館に行んとて支度するほど吉川君の内子参らる、談話正午に成る、同人歸宅後時間も少なければ圖書館行やめになす。

廿七日 圖書館に行く、中島師君のもとより病氣見舞として女中を使はさる、明日鳥尾君のもとに數よみ順會あるべきなれど、腦痛せん方なければ断りの文を出す。

廿八日 ことなし、山梨縣に水害ありしと聞に、甲府伊庭郎君のもとより書狀もありしかば、是が返事並に親戚四五軒に書狀を出す。

廿九日 晴天。今日は暑氣はげしく頭痛たえ難ければ午後より暫時ねむる、久保木兄君昨日あみに趣きしとて川魚少し送らる。

卅日 晴天。早朝安達に書畫骨董類受とりに行、盛貞君と談話數刻、午前歸宅むし干をなす、日没より師君を訪ふ、歸路雨ふる、西村君に立寄て傘をかりる、常洲北條穴澤の老人刺客の爲に斬られし物語、及び常どの病氣よろしからず榎村醫院に入院なしたる物がたり等あり、八時歸宅。此日の新紙上河野大隈の兩君にはく裂彈を送りた

るものある由しなり。

卅一日 雨。午前より野々宮君來る、終日歌詠す、半井君の事種々ものがたる。

八月一日 曇天。午前田中君來訪、我が病氣見舞として來られしなり、入谷に來め給ひし朝がほ一鉢送らる、甲州貞治より書狀來る。

二日 山崎正助君來訪、芝兄君并に奥田老人よりはがき來る、伊東夏子ぬしより手紙來る、此日むさし野三編を買ふ。

三日 甲洲後屋敷より書狀來る、圖書館へ趣く、母君山崎へ金かりに行く、調達なる、奥田老人へ持参し送る。此日淺草に大旋風あり。

四日 晴天。田邊君に書狀を出す、此夕返事來る。

五日
六日 小石河稽古なり、不快をおして趣く、不平いふべからず、此日半井君より重太君を使者として茶一筒おくらる。

七日 野々宮君來訪、終日歌をよむ、半井君を訪給ひしよし我事に付ての談話ありしやに聞く、此夜満月に當れば國子共にお茶の水に月をみる。

我かくかたらふ但し心の中なり、
吹風のたよりはきかじ萩の葉の

みだれて物をおもひもぞする

八日 晴天。早朝歌をよむ、六首、うつぼつたる心中まれに日月を得し心地す、快
いふべからず、此日新聞號外來る 内閣總辭職、伊藤君總理大臣に成しよし、各新任
大臣の名を出したり、夜に入てよりわれに源吉氏より書狀到來す。

九日 晴天。新聞を早朝に見る、内閣總理伊藤博文君、内務大臣井上君、外務大臣
陸奥君、司法は山縣、逓信の黒田、陸軍大山、海軍仁禮、農商務は後藤君にして、文
部を河野、大藏を渡邊君といふ役割定まりぬ、松方君はじや香の間祇候として特に大
臣待遇をもつてせらるゝ由なり。

十日 晴天。朝のほど風祭甚三君より東京府士族授産金一條丸田正盛君にかゝる訴
訟等の爲委任狀に調印申こまる、但し代言は磯部四郎、宮城浩藏、鳩山和夫、黒岩鐵
之助及び今一人なり、半井君より長文の手紙來る、返事したむ。ひる後小説に従事
奥田より夜に入てはがき來る。此夜することいと多くて、十二時過る頃床にいる。

十一日 夜來の雨全く晴て初秋の空いとよくすめり。何事なし。

十二日 晴天。前島むつ子君のもとにかすよみす、題三十題。

十三日 小石川稽古日なり、此日龍子君も參られたり、談話種々、我舎のことに付
て世に浮評かまびすしき由、前島君も席にものがたり出らる、諸君歸宅後田中君と我
残りて種々ものがたる、我斗は日没近くまで居て師君に相談をうくる。

十四日 晴天。野々宮氏來訪、終日歌を詠す。

十五日 晴天。午前三枝の君來訪、庭のくだ物持參、ひる飯馳走して歸す、暑氣甚
だし。母君日没後奥田へ病氣見舞に行給ふ、山下直一君熊谷より歸京したりとて來訪
九時頃まで遊びて歸る。

十六日 晴天。暑氣いと甚だし、華氏寒暖計九十七度にのぼりぬ、一時頃よりひ
る寢暫時なす、寢ざめて後師君のもとより郵書來る、此事につきて田中ぬしを訪はん
とす、明日の方よかるべしといふ。

十六日 早朝に田中氏を訪ふ、師の君より依頼を受たる事に付てなり、師の君は今
度の浮説の出所に付ていたく田中君をうたがひ給ふと覺しく、同家に入入する書生の

事我に問はせんとなり、我も此人を正當の人は更に思はず、花柳社會にたちたる人のならひ浮たる行ひありなどの風説は誠なるべしと聞けり、されども此度のことにて付てこゝより出たらんなどは流石に思ひもかけねど、猶様子も見まほしく其上にて取計ふべき旨もあるべしと覺悟す、談話種々、今日は一日此處にて遊び給へてひる飯振舞る、表面には情づくりて見ゆるものから猶したには師の君などをいかに思へるにや折々に不平の詞聞えて、ともすれば小出君のこのみ引出すは怪しからぬ事なきにもあらじと思ふ、一日物がたりして歸路師の君のもとに寄る、師の君には中々にさまざまの事聞かせ奉ん又むつかしき中立にもやとはいかりて唯書生の新聞社に出入せざる事のみ談す、師の君は例の物うたがひ深き質としてひたすら田中君をのみ仇になす、されどもあらはには名をもさゝねどおのづから此人こそ利欲の爲にかゝること作り出して我舎を乗とらんとする計略なれ、夫には軍師あり手下あり、使はるゝ人の中には水原みさ子なども交るらんなどたしかに定めたる想像をたて給へり、明日は田邊君に参りて秘密にこの相談とげて貰ひ度し、この事相談すべき人君と田邊君、天野君の外にあらず、伊東君にも爲せばなすべきなれどおのづからもる處もあらんと

給ふは田中君への事なめり、夜一夜はなし明す、我れ種々に思ひなせど田中君の所爲ともきこえず、さりとして島田君、首藤君の出来したるにもあるべからず、大方は師の君の身につきて宜からぬ行ひなどの有るがいつとなく世にもりてさるが上に田中君、島田氏杯の不品行の人を愛し給ひしかばいと實説になりしなるべしと思ふ、流石にかくともいひ難きもの故いと思ひ煩ふこと多かり。

十七日 晴天。九時頃より田邊君を訪ふ、此事につきてのもの語り種々、同氏も田中君をとは思はず、大方は世におのづから傳たるなめりといふ、岩本君、植村君など様に人の信深き人々のいかにしてかいひ出たることゝて中々に此ふせぎは難かり、されども其源といふ處を探らば遂にはしれぬ事もあるまじ、もとを知らば枝葉は何とも成るべしなどかたる、とに角今日は此處に遊て歸路天野君にも諸共に行て此事かたらんはいかにといふ、さらば仰せにまかせんとてひる飯もたべぬ、小説家の事に付て種々はなす、交際ひろき人と おもしろきことをかしき事多し、さかのやおむろぬし及び梅花道人の發狂したりといふものがたりあり、内田不知庵君及び櫻井方寸子などの事、明治女學校の教育方針など、或は高等女學校の浮説の世に流れたる源因、又田

邊君朋友の人々の種々なるものがたり等一つにしてたらず、暑き日一日かたり暮す、夕かけてより天野君を土手三番町に訪ふ、家は土手のいと近き處にて詩人のすみ家覺ゆる様なる木立いとしげき處に三曲合奏の囀院として聞え出たるが夫なり、山登何某の出稽古に來たり居しなりとか、暫時西洋間の方にて待つ、やがて其三曲の間を取片付て其處にてしばしもの語りす、日没少前暇乞して出ぬ、市谷見付にて田邊君と袂を分ちてこゝより車にて師のもとまで來る、灸治に趣き給ひし留守なりし少時待つ、但し今一泊なしくれたしと申置たるよしゆる我宅へは一書さし出す、晚景小出君來訪しばらく我とかたる、其中に師も歸り給へり、小出君歸宅後しばしものがたりありたり、田中君のこと高田君のこと首藤氏の娘のことなど其中にも重なり。

十九日 早朝歸宅せんとせしかど事多くて九時に成ぬ、いざとて歸宅がけに鈴木しげね君來訪我は直に家に歸る、母君西村へ趣き給ひし留守成き、久保木來る、二時に歸宅、今日は各評の歌並びに小説の著作少しなす、夜る早くふしけむ。

廿日 早朝。小石川に行く、稽古日也、題二つ、今日は伊東君とおのれと十點一つもあらざりし、湖月抄の講義も有り、田邊君昨日田中君を來訪されしよし、我が同

君のもとに行たること並に天野君を訪ひたるなど残りなく知られたり、あやしう秘密といふものを何故にはなし給ひけんとかたぶかれぬ、中村君のもとに明日かず讀の催しありしが障る事ありて廿四日によす、田邊君、天野君、片山君などの催しにて難陳あらんとす、大造、東の兩君をも中間に加へんといふ、師君又灸治に行給ふとなればおのれらは午後早々に歸る。歸宅後小説に従事。

廿一日 晴天。午前より野々宮君來る、歌の添削をなす、頗る佳絶のもの有り、點取り二つ詠す、終りて後種々談話、同君が朋友の一女生本年四月人に嫁したるが其後便りのあらざりしかば此方より郵書さし出さんとて宿處を問合せて其里方へ趣きたる處、其人不計も居りたり、嬉しくて如何にして當所にはと問へば涙を一目うけてもの語りたる事よ哀さ堪がたしとて野々宮氏涙ぐまれぬ、我も心にかゝりて其人いかにせしにやととへば此頃の新聞などにも見えたる澤木何某が妻なるよし、夫は有爲の若人なるに事素志と同じからず鬱憂のあまり神經の變動を來たし終に自殺を志さしとなりとか、疵もいと深ければ多分は一命も六つかしかるべしといふ、其兄弟なる無頼漢のこゝと、親友なる柳何某とか時事新報の記者のこと、取集めて談し多し、半井君へ妻君に

野口といふ人周旋せばやとせし中に立人をかしく引しろひて今一人の人を是非といふ、我は餘り心も進まねど頼れ故止を得ず寫眞あづかりて來たりとて見する、さまでには見にくくも非ず、其人のことに付て小説の事種々かたる、こゝ吹風といふ痴史が作をいたく愛て夫より行たしなどの念に成たるなめりといふ、怪しう世にはさまくの人も有ものなりけり、同君歸路半井君を訪はんとて四時頃歸らる、同君よりかり受たる繪畫の手本今日よりならひはじむ、日没後國子と共に散歩す、三崎町もよりより九段下まで行、半井君の寓居もよそながら見たり、宅に歸しは八時なりし、これより小説に従事。

廿二日 晴天。菊池の老君遊びに參らる、終日談話、久保木及び藤田屋の息子來る夜に入りてより突然澁谷君來訪、暑中休暇にて歸郷したるなりとか種々ものがたりす我小説ものする事三枝君より傳へ聞たりとて其よしあしなどいふ、猶つとめ給へ潔白正直は人間の至寶なり、是をだに守らば何時かは好時に逢はずやある、我其かみの考へには君の家かくまでには思はず、富有と斗思ひしかば無理をいひたる事も有し、今はた思へばいと氣のどくに心ぐるしさたえ難し、もし相談したしと思ふことあら

ば遠慮なくいひ給へ、小説出版などの爲に費用あらば我たてかへ申べし、又春のやなり高田なりに紹介頼みたしとならば我明日にも其勞は取らんなどかたる、半井ぬしのことかくくと我もいへば夫は勉めてさけ給へ、いづれ恩も有べし義理も有らんが夫につながら、末いとあやふし、正當の結婚なさんとならば止むる處なけれど浮評といふものはあしき事なり潔白の身にもしみつかば又取かへしなかるべくや、兎角君は戸主の身振かたも六つかしからんが、國殿は他へ嫁し給ふ身あたら妙齡を空しく過し給ふな、我もむかしは書生上りの見る處少なく思ひ廣くして小説にいふ空像にのみ走りたれど今は流石によの風しみこみて老人めきたる考へにも成たりなどかたる、此新年の状は君や書給ひしうまきものなり、我々も人ごとに見せてほこりぬ、何ぞ書きたるものあらば得させてよかたみにせん又持行てほこりたければと例のうまき事いふと知りながら流石につよくはいろいかねて短冊一ひら送る、我が目の近くて澁谷ぬしのお顔さへよくも見えずと語れば困りしもの哉何と加して直し度ものなり、明後日我は歸郷せんと思ふにあすまた訪はん諸共に醫師へ伴んかいかになどかたる、都の花にもし投書なさは一本を送り給へなんと夜ふくるまで語る、又何時來べきかしらす寫眞あら

ば給はるまじきか、我も送らん、とかくは潔白の世を過し給へ、今御覽せよ必らず善事は来るべし、此事のみは我保証するなりといふに、我れも世の浮説は何といふやしらす、天地神明に斗は恥ぢざるつもりなり、もしも世に入れられずば身を泪羅に没するともよし決してにごりにはしまじと思ふなり、澁谷様此次参りたまふ頃には枝豆うらんか、新聞の配達なさんか知れ侍らす、其時立寄りせ給ふやといへば、必く立寄ん、もしも不義の榮利にはこり給ふに逢なば断じて顧みはせざるべし、嗚呼則義どの在世ならばかゝる事にも立到らざらまじと氣のどくの事なり、父君の愛し給ひし道具などはいかになしたる、もし迫り給ふことありともうしなひ給ふな、其場合には我もとへ告こし給へ、夫斗はうしなはせ申まじ、衣類などはことにも非らず、こしらへんとすれば何時にても出来るべし、重代のものは大事ぞかしなど入立てかたる、いざ歸らんと立しは十一時成し、又立歸りて夏子ぬしの目は困りしもの哉、いかなる質なるにかと氣遣しげに問はるゝに、我とこしらへたる近眼なりと笑ひていへば、さらば先よし、海岸などの見渡し廣き處に居てしばしやしなはゞ直ちになほるべしなどいひて出る、車待せて置たるなり、身形などはよくもあらねど金時計も出来たり、髭もは

やしぬ、去年判事補に任官して一年半とたゝぬほどに檢事に昇進して月俸五十圓なりといふ、我十四の時この人十九成けん、松永のもとにてはじめて逢ひし時は何のすぐれたる景見もなく學などもいと淺かりけん、思へば世は有爲轉變なりけり、其時の我と今の我と進歩の姿處かはむしる退歩といふ方ならんを、此人のかく成りのぼりたるなんことに淺からぬ感情有けり、此夜何もなさずして床に入る。

廿三日 晴天。西村君來訪、師君のもとへ明日のかすよみ断りのはがきを出す、澁谷君又來訪、土産に菓子を送らる、西村君直に歸る、談話種々おこる、夕べむさし野かはんとて繪草紙やた、き起して買たるはよけれど、間違て吾妻にしきといふものにてあり、是より行て取かへてこんななど笑ふ、大隈、前島、鳩山をけさ訪しかば、路故佐藤の梅吉をも訪ひぬ、これより山崎君訪はゞやなどいふほどひるも近づきぬ、ひる飯いかになどいへど、否喰はじと斗いふに、さらばとて車夫に斗出す。書帖見度しといふがまゝに出して見する高まんのことも極りなし、いざ三人にて寫眞うつしに行かんいざととそのかせど、先々として我よりやめじ。越後へつかば直に手紙を参らすべし君も給へよなどいそぐ歸路につく、近世偉人傳のこと依頼せらる、晩松翁

の履歴かき給ふ御處存なきやといへば、書たけれどいまだ其暇に至らず、何とぞ君にも心かけて御聞こみの事あらば記をくに止め給ひてよなどいこと多かり、手紙を約して歸る。今日はいと涼しき日なり、午後よりは來る人なくいと間暇、小説に一意從事、めづらしく手習をなす、夜に入てより母君の肩をひねる、少し暑氣あたりとみえたり、夫より繪畫植物の一圖ひけり。

なみ風のありもあらずも何かせん

一葉のふねのうきよ也けり

日記 (二十五年八月)

廿四日 晴天ながら折々に鳴神の音するはやがてこゝにも降らんとすらんなどいひ合へり、きぬ三つ四つ洗ひて後机につく、西村君參らる、昨日細君の世話せんとて俵初音ぬしのこと物がたりしかば其事猶よく聞かんととなり、午前に歸宅。母君一昨日より時候あたりにて心地すぐれず、今日は臥がちにおはしき、終日机邊にありて、日没後母君の肩を國子と共にひねりて臥させ奉る。おのれも今宵はかしらいといたくなやめば早く臥たり。

廿五日 晴天。母君まだ快からず、家内の掃除勝手もとのことなど九時頃までなし、机につく、斗らぬことより種々の事案じ出して身をかへりみる心切に成ぬ、あみ初し小説の趣向もいたくかへんとす。

廿六日 今曉三時傳通院内たく藏稻荷焼失、此いなり近邊に失火ある時は告あるき給ふとか聞しを、其社の焼しといふをかし。

廿七日 小石川稽古日に趣く、稽古後師君と少しものがたりす、傳通院内淑徳女學

校とかやに我を周旋せられんとかゝる物語あり、我も思ふ處のべなどして歸る、母君にこの事を聞かせ奉るに喜限りなし。今宵はいたく勉強したり。

廿八日 晴天。野々宮來る、半井ぬしを訪ひ給ひしに鎌倉に趣き給ひしまゝいまだ歸宅されざる由、我が繪畫用の筆買ひて給はりぬ、歌二題詠す、初音君父姉の歌添刪頼み度しと持ち參られたり、終りて後種々談話、同君は宗教家の事と有神論を主張し給ふ、我れは有神無神もと一物論をとなふ、談佳境に及て中々に盡す、右京山に月のぼるまではなし暮す、いざとて歸宅されんとするに同君所持の洋傘及び我家の合せて三本ほどいつのまにかうばはれたるもいとをかし、後に母君くに子などの残念がれば何悔む事かは我家のものこそうしたひたれ天下のものゝうせたるならず、誰人の手に渡り誰れ人の處持になるとも用は一つのみ、洋傘は洋傘なる効用のかはるものならず、有たればこそうしなひたるなれなくなりたれば又うる事あらんとて笑ふ、我家貧困只せまりに迫りたる頃とて母君いといたく歎き給ふ、此月の卅日かぎり山崎君に金十圓返却すべき等なるを我が著作いまだ成らず、一錢を得るの目あてあらず、人に信をかくこと口惜しとてなり、種々談合、おのれ國子ある限りの衣類質入して一時の

急をまぬかればやといふ、母君の愁傷これのみとわびし、甲府野尻より書狀來る。此日野々宮君より國民新聞かりる。

廿九日 晴天時々雷鳴す、頭痛いとはげしければ暫時ひる寝、午後より小説勉強す野々宮氏來訪、婦女雜誌持參にて物がたりす、洋傘を人より二本もらひたればとて一本を我家に送らる、昨日いひしに違はぬもをかし、又いつうしなふべきにや、少時にて歸宅。此夜國子に習字ををしふ。

卅日 晴天。母君しきりに質入れのことを可ならずとして安達に一度金策たのまんと早朝趣き給ふ、我つとめて止めたれど甲斐なし、同家不承諾のよしにて午前歸宅思ひしことなりとて一同笑ふ。午後よりことに勉強、日没後國子と共に右京山に月待とりて虫を聞く、歸宅後山下直一君來訪。

卅一日 晴天。今日は二十十日の厄日なりとか聞くを空のどかにして風もなし、終日來客なく、日没後母君西村君を訪はんとて出給ふに引違へて同氏來訪、しばらくにして歸宅、山崎君金子の事に付て參る。此夜更けて久保木に出産の模様ありとて母君迎ひに來る、先は其こと無く今宵も過ぎぬ。

九月一日 早朝國子姉君を見舞ふ。さしたることなし。母君は鍛冶町に金子からんとて趣き給ふ、我腦痛いとほげし水にてかしたらあらひはら巻などなす、筆とることいとものうきに文章軌範少時通讀、韓非子が説難むねに徹しぬ、午後母君歸宅、鍛冶町より金十五圓かり來る。午後直に山崎君に金十圓返金に趣き給ふ、同氏澁谷三郎君を我家の躰に周旋せばや、もして嫁に行給ひてはいかやなどしきりにいひしを母君斷りて來給ひし由、世はさまざまなりとて一同笑ふ。澁谷君が今日も何事の感じありしにや我もとにての物がたり怪しう其筋を引かけつ、私よりいひ出んを待つものゝ様に見えし、はじめ我父かの人に望を屬して我が躰にといひ出られし頃、其答へあざやかに、はななで何となく行通ひ。我とも隔てずものかたらひ、國子と三人して寄席に遊びし事なども有けり、さるほどに我が父この事を心にかけて、半は事とゝのひし様に思ひて俄にうせぬ、しばしありふるほどにかの人もいまだ年若く思慮定まらざりけんしらす、ある時母より其事懇にいひ出して定まりたる答へ聞まほしといひしに、我自身はいささか違背もあらず承諾なしぬといへり、母君悦びてさらば三枝に表立ての中立は頼まんといひしに、先しばし待給へ猶よく父兄とも談じてとてその日は歸りに

き、事いかなるにか有けん其後佐藤梅吉して怪しく利欲にかはりたることいひて來れるに、母君いたく立腹して其請求を斷り給ひしに、さらば此縁成りがたしとて破談に成ぬ、我もとより是れに心の引かるるにも非ず、さりとして憎きにもあらねば、母君のさまざまに怒り給ふをひたすらに取しづめて其まゝに年月過ぎにき、されども彼方よりも往復更にそのかみに替らず、父君が一週忌の折心かけて訪よりたる、新年の禮かゝさぬ事、任官して越後へ出立せんといふ時まで我家にかならず立よりなどするからに是れよりもうとみあへず、彼より文來たればこなたよりも返し出しなど親しくはしたり、さるに此度びの上京いかに心を動かしけん更に昔しの契りにかへりて此事まとめんとするけしき彼方にみえたり、我家やうく運かたぶきて其昔のかげも止めず借財山の如くにしてしかも得る處は我れ筆先の少しを持って引まどの畑たてんとする境界、人にはあなづられ世にかろしめられ耻辱困難一つに非ず、さるを今かの人には雲なき空にのぼる旭の如く實家は聞ゆる富豪のいよ、盛大に成らんとするけしき、實姉は何某生糸商の妻に成て此家父三百圓の利潤ある頃といへり、身は新潟の檢事として正八位に叙せられ月俸五十圓の榮職にあるあり、今この人に我依らんか、母君をはじ

め妹も兄も亡き親の名まで辱かしめず、家も美事に成立つべきながら、そは一時の榮もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん、母君に寧處を得せしめ妹に良配を與へて我れはやいなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん、今にして此人に靡きたがはん事なさじとぞ思ふ、そは此人の憎くきならず、はた我れ我まんの意地にも非らず、世の中のおだなる富貴榮譽うれはしく捐て、小町の未我やりて見たく、此心またいつ替るべきにや知らねど、今日の心はかくぞある、又おのづからにへだつる時ありやとてかくは記るしつ。今日はいともうくて何事もなさに日を暮しぬ。

二日 晴天。伊東夏子君及び師君に手紙を出す、終日何もなさず、沈思に終る、此夕は久保木姉君家出の騒動あり、母君大心配、但し此夜歸宅したるよし。雲いとさわがし雨にやなどいふ。

三日 晴天に成りぬ。早朝に洗濯もの三四枚なす、此頃柔然に馴れたる身の苦しさ堪がたきに、是よりはつとめて力わざせばやなどかたる、

久保木來訪、姉君家出のてん木ものがたる、投身などの覺悟にや、水道橋の袂にて

取押へたるよし聞く心堪がたし、久保木歸る、直に母君奥田へ例月の利子もて行給ふ伊東君より書狀來る、昨日の返事なり。母君奥田にてひるめし馳走に預り給ふ、歸宅は午後。

朝ごとに南のうねにたがやしててる日にむかひて牛をおひ又馬おひてシイドウハし
ることきくや可愛くもありのまゝなる野のたのしみはほんに王様もなるまい事よ成る
ことならばよい妻持つて歌がたりを手枕にサア手枕に。

長州赤間いなり町遊女から綾

すれくの中にとくさや露のたま

三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別

千代女

千なりもつる一と筋のころから

そ女

誰れかみんたれかするべきあるに非らず

なきにもあらぬのりのもし火

いろなしとなにかいひけん吹くまゝに

みにしむものを秋の夕かせ

むねのうら書

伯父なる人のようといふ腫物になやみて切斷などしたるなごりもいと俄かには治し
がたき景色なりときくにも哀にて一日訪たる、六疊斗なる坐敷に打ふし居たる、
石炭酸の香りの高やかなるにほひくるまゝにふと思ひ出るはかの人の病ひにふしたる
時のことなり、かく廣やかなる處にはあらでものむづかしく狭やかなる部屋に夜具ふ
とん斗は此處のよりも立派にして枕もとに筆硯を放たず、いかに病ひはげしき時とい
へど日々の新聞に一回も缺きたる事なく、おのれ筆とり難き時は口述してやがて人に
書かすめり、數千の借財に身をおそはれて行方もなき頃成しかば、いとくかすかな
る蓬生に這ひかくれて親兄弟なども身ちかき處にあらざりしかば、いとこなる女に萬
世話をうけ居たりしものたらずがちの景色もかなしく、枕もとに我を招きて一ひらの
寫真とり出しつ、是れはこのほど病ひの發せんとする一日前にうつせしなりよくうつ

りしか見て給はれ、我れはいつも生やさしくひななくとうつりていや成りしに是れは人ごろしにてもなさんとする人の様に見ゆるこれが正物なるべしとて心よげに笑ふ、われ日毎のやうに見舞て様子をへば嬉しげに物がたりすることもあり、厭はしげの時もあり、嬉しげなれば又明日も訪はましと思ひ、厭はしげなれば何事の氣に障りしにや機嫌取らんと又あすも訪ふ、ある日いとこやかにて、樋口さまは我がせがれに逢ひ給ひし事ありやと問ふ、鶴田君がはらにと聞く其子の事かとかつは心可笑しく、いなまだと言へばさらばお目にかけてやをら起出で抱出し給ふは一尺斗の人形なり、娘子供の愛らん様にうつくしき衣きせてかしづくと思しきは三十男のしかも今の世の才たけたる人に似合しからぬ事とをかし、我れ抱き取りて頬すりなどすれば、徒姉妹なる人の、君も人形は愛し給ふやこの顔つきよく見て給はれ何とよく似ては居侍らずや、此額ぎはの青筋はりて肝癩らしき處と笑ひつゝ半井ぬしを指さす、何處が似たりや我れには知れねど、此人形もうつくしくかの人も美しくければ似たりといはば似ても居るべし、彼人少し笑ひて、我れ一小説を著作し終る毎にかならず其中の立物を人形にかた取りて一ツづゝ買ふが常なり、すでに十斗は買ひ溜たりといふ、さら

ば是れは誰れかと問ふに林正元なり、此子には羽織袴きせずば似合はず、兎に角に容貌うるはしきが上に品位備はりて天晴の子がらなり、かゝる子供一人あらば外に何をか願はんとして大笑す、來年よりは三月五月の兩節句に男女の人形共が祝ひしてお客様せん、其時はかならずお正客に招かんなどかたる、この人形かふ時もすでに祭のしたかりしかば職りなど調へんとして伯母なる人にいたくしかられたり、此人形もいたく止められしを三夜十軒店にたち盡してやう／＼に玉に入たりと子供めきたる物語りにしばしまぎらはすも中々になやましき處あれば成りけん、其時の我心には二十斗數にも非ず、我身一生行來して何事まれ物語り合せんの心成しを、かく喰違ひて引はなれたる、彼方にはすで／＼我名をも忘れ給ひけん、さりとも小説などの事の折ふしには思ひ出し給ふ事もなからずやなど問ひしにかなし、此伯父の常にはことなりてなつかしげに物語りし、はれたる手をさし出して我手の上に重ねなどしてさめ／＼と涙落したる悲しともかなし、かゝる時の折ふしにも猶かの人の忘れ難きはなぞや。

泉州境真言宗僧 辭世

よの中はしやのくころもつてんくで
來る坊主にのころ松風

東叡山青龍院のちご喜平

朝がはのもろき命をもろ共に

あはれと思へ露の身の上

岐阜縣下美濃國惠那郡茄子川村成瀬誠志方

樋口虎之助

に つ 記 (二十五年九月)

四日 曇天。今日は日曜なれば野々宮君來訪さるべしとて支度し居たるに、西村君上野の房藏氏來らる、談話少し、やがて野々宮君參らる、前よりの人々は歸る、歌二題よます、宗教上のもの語種々あり、午後より雨降り出づ、しばしの晴間に同君歸宅今宵は待宵なれど月なし。

五日 曇天。芝より兄君來る、薩摩陶器の土瓶かひてあらば賣りたしとして五箇ほど持參、我家にても一つあがなひ度しなどいふ、日没まで遊びて、歸路諸共に萬世橋まで行く、兄君はこれより馬車、おのれと國子は小川町に廻りて焼あとの新築を見、東明館に墨をかふ、今宵舊七月の十五夜なり、夕方より一點の雲なく成りて明月の光り何ともいへず、お茶の水橋に虫聲きながら暫時たゝすむ、歸路にはがきをかひて田中君に各評出詠斷りを出し、小笠原君に數よみ出席斷りをいふ。家に歸りても月の光見捨がたく、板敷のもとに更るまで一人起居たり。

六日 大雨車軸をながす様なり、前の小河に水あふれてさながら瀧つせのひびきを

なす、母君は久保木に出産あるけしきなりとて午前の内丈かしこにあり、我今日は筆ことの外動きて一回分書き終へたり、日没頃より久保木の様子ことに悪敷、國子と母君替り／＼に趣き給ふ。

七日 晴天。午前の内つとめて小説に従事す、動坂より師君手紙を賜ふ、小笠原家の數よみなるに我れ断りて行かざりしかばなり、今日は田中も伊東も不参にていしく清書にもことかけば是非参り給へとなり、やがて支度して趣く、人々すでに詠じ終りたるのち成りし、清書しながら四題詠す、師君用事ありとて直に歸宅、残りて點數のしらべをなすに長齡子ぬし高點成けり、是よりいとまを乞して歸る、日没少し前成し。今宵の月ことに清かり。

八日 晴天。澁谷君より書狀來る。小笠原君にはがきを寄す。
九日 晴天。兄君訪問、日没まで遊び、歸宅後大雨車軸を流す、山崎君よりはがき來る。

十日 大雨。早朝に田中君車を馳せて今日の稽古に出席のことを頼み來る、さればとて直に小石川に趣く、稽古なくして師君出がけの處成し、暫時残りて加藤の妻とも

のがたりす、師君の行爲聞くまゝに胸いたく成ぬ、みの子君も参らる、少時談話、正午頃歸宅、午後久保木に出産あり、小兒は死したる由日没頃見舞にゆく、此夜石井よりはがき來る、野々宮君に明日の稽古断りのはがき出す。

十一日 晴天。

十二日

十三日

十四日 此處三四日日記處でなく、大いそがしなり、但し格別かく事もなかりき。

十五日 小説うもれ木出來上る、田邊君に持参、途中より雨に成りぬ、車にて到る同君何方へか結婚の約整のひて是よりは筆とり難き身と成らんとすとて物がたたらる、我が小説雑誌に掲載せんよりは小冊の本になしたる方後來の爲よかるべしと物がたらる、我れ一人舞臺は心細きに君も何か書て給はらば驥尾の青蠅僥倖なるべしといふに、否々夫處ではなし却て蛇の足ならんが、何か四五枚の物かくべしとうけがはる、半紙判ニツ折の小形製にしてうるはしき表装にせばなどいふ、明日直に金港堂に持たして遣らん、但し十日位間はあるべしとはべる。

十六日 晴天。圖書館へたねさがしに行く、春雨ものがたり丈山夜譚及び哲學會雜誌などを見る、歸路荻野君偶居を訪ふ、妻君に逢て新聞をかりる、歸宅は日没少し前成し、今宵朝日新聞通讀、野尻君に一書さし出す、石井へも同じく。

十七日 晴天。今日は田中君會日なり、されどおのれは行かず圖書館に行く、奇々物がたり、くせ物語、昔々ものがたり、各國周遊記、雨中問答、乗合ばなし等かりる四時頃館を出る、此夜は何事をもなさず、はやく臥したり、但しこの夜山下直一君來訪。

十八日 晴天。野々宮稽古に參らる、今日是用事ありとて正午歸宅、午後より諸宗教文少し見る、習字二通り斗りして夫より萬葉集を見る、夕暮より國子と共に散歩をなす、右京山に虫を聞て夫より田町通り本郷の臺にのぼりて大學前あたりを遊びて歸る、二人にて母君のみみ療治をなす、臥させ奉りてより近松の淨瑠璃集をよむ。

十九日 起出でゝみるに雨成りけり、まだ明けの庭のおもに草むらがくれこうろぎの鳴ける又なく哀なり、はき清めなどして机に向ふに、雨だれの音軒はのらんの葉にはとくととして、吹風のそゝる寒きなど、氣候のうつり行さまいとしるし。

二十日 雨天。

廿一日 雨天。山梨より甲陽新報來る。伊東夏子君より書狀到着す。

廿三日 雨猶やまず。早朝野尻君より書狀來る、甲陽新報へ載すべき小説著作しくれ度しとなり、前田家より使ひ來る、各評の巻送りこしたるなり。午後小石河師君よりはがき來る、此月に入りてより思ふことありて何方の歌會へも一度の出席もなさざれば夫をあやしみてなるべし、兎角明日の會には出席せばやと思ふ。日没少し前より大雨盆をかへす様なり、母君明日は不參の方よかるべしとの給ふに、さらばとて師君のもとにぞ手紙を出す。

廿四日 晴天に成りぬ。終日著作に従事。夜一夜雨ふる。

廿五日 晴天。野々宮君來る、和歌三題詠す、四時半までもものがたりす。日没後國子と共に糊工場を一二ヶ所縦覽。はやく寝たり。

廿六日 晴天。早朝師君のもとを訪ふ、大宮公園に秋草を見物と誘はれて直に十一時の汽車にて行く、三時の車にて歸る。

廿七日 晴天。日没少し前師君のもとに平家もの語持參。

廿八日 田邊君よりはがき来る。

廿九日 ことなし、兄君美濃へ出立。

卅日 同じく。

十月一日 晴天。小石川稽古に行く、別にことなし。

二日 田邊君よりはがき来る、うもれ木一ト先都の花にのせ度よし金港堂より申來たりたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、遺存ありや否やとなり、直に承知の返事を出す、母君此はがきを持參して三枝君のもとに此月の費用かりに行く、心よく諾されて六圓かり来る、そはうもれ木の原稿料十圓斗とれるを目的になり、此夜國子と共に下谷ステーションより池のはた近傍を散歩す。

三日 晴天。

これよりしばらくことなし。

連日の雨や机と御親類

十一日 少し雨のひまみえたり、野々宮君來訪、岩手縣に新高等女學校開校されんとするに招かれて主坐の任を帯て十四日出立せんとするなり、付きて教科書の不審の

處問ひきゞ度しとて我れを訪ふ、和文讀本四冊を相談す、同人より駒下駄一足貰ふ、此方より花むけとでもなければ有合せの半るり一かけ送る、夜に入るまでものがたりして歸る。

十四日 連日の雨はれ渡りぬ。野々宮ぬしの出立午前になりしと聞くに早朝より家を出づ、國子と共に先づ途すがら安達君の病氣を訪ふ、ようといふ腫物にて切斷せられしなり、老たる人の心細ければにや涙ほろくくとこぼして物がたりせる。こゝを出でステーションに行きしは十一時ちかゝりき、野々宮ぬしに逢ふ、送る人も十人斗あり、毛利すま子とて大島みどりぬしが知人もありけり、初對面の禮をなす、車の動き出るほど何とはなしに心細し、これより根岸邊を少し見物す、道路雨あがりにていと六ツかしかりき、歸路は國子よわりによわりて大學のうら門あたりまで來し時はあしも上がらぬ景色なりし、からくして歸る。

十五日 晴天。小石川稽古に久し振にてゆく、榊原家の令姫今日より通學し給ふ。

十六日 晴天。田邊君のもとを訪ふ。

十七日 雨天。上野房藏君來訪。

十八日 おなじく。野々宮君より安着の報来る。

十九日 好天氣なり。西村君來訪。母君小林君及菊地君を訪ふ。都の花に載すべき筈にて金港堂へ廻し置たる小説もはや一ヶ月斗にも成れるをいまだ其價は我が手に入らず、さりとて催促すべき處もなければ、日々首をのばして便を待ばかり、母君よりは手元の苦しさをしばく訴へ給ふ。それも道理なり、此月中には是非入金の道なくばと頭を悩ます、甲陽新報へも六回斗の物差出し置きし夫さへ何の便りもなく、日々を送り越す新聞さへ此兩三日は如何にしけん發送もなし、彼れ是れと煩はしくて夜に入れどねむり難く、書見に二時すぐるまで更したり。

廿日 好天氣。よべ夜更しをなしたるに少し朝寢をしたりし枕もとに早くも郵便にて甲陽新報つき居たり、邦子いちはやくり廣げてあゝ今朝より經つくる出たりとさけぶ、我れもあわたしく起出でみれば實にぞしかなりき、此月の六日斗にさし出し置しのなりけん、此分にては更に著作し送るとも没書にも成るまじと安心す、おもへば我ながら恥かしき心なり、智識たらず學事とのはずとは萬も二萬も承知なしながら、文學中ことに六つかしと聞く小説をかきて一家三人の衣食をなさんなど大たん

といはんか身知らずと云はんか、人知らぬよ半の寐覺に背に汗のいと心くるし。

廿一日 圖書館に行く、此留守に金港堂編輯人藤本藤陰來る、うもれ木原稿料十一圓七十五錢送る、猶たのみ度ことあるよし言置たりと聞くに、さらば明日早朝に同人方を訪はんとおもふ。

廿二日 小石川稽古なれど藤本に約したることあれば早朝車を猿樂町に寄す、初めて對面す、種々ものがたる、都の花明年の初すり附録に松竹梅の三幅對を田邊君及び我と外一人の婦人に著作し貰ひ度し、依てこのことを花圃女史にも依頼なして何れ考へてとのことなりしが、何とぞ相談の上に兩君にて一つづ、題を定め給り度し、其残りたるを佐々木竹柏園にか坪井秋香にか廻すべければと成けり、少時にて歸宅直に小石川へ行く、大雨成しが歸宅後には止みたり。

廿三日 母君三枝へ參り給ふ、都の花より受とりたる金のうち六圓を同君に返へさんとてなり、同君もいたく喜ばれたるよし。

廿四日 大雨。午後より田邊君を番町に訪ふ、留守にて母君としばし談る、歸路半井君下婢に逢ふ、同氏の近狀を聞く、萬感萬歎この夜睡ることかたし。

廿五日 晴天。母君田部井を訪ふ。西村常女來る、家にはりもの板なければ我家にて張り度しとなり。

道しばのつゆ

(二十五年十一月)

九日は萩のやの納會なり。二日三日前より時のけにやいたくなやみてかしらもあがらず、出席むづかしかるべしと思ひしも。今朝より俄に心すがくしく此ほどならばと行、髪などもはかく敷はとりあげず手あしなどもあかつきたるまゝ成し。田中、鳥尾、中村などの人々は我より先成けり、さはいへと常の様にもあらねば歌もえよますものうげなるを人々みあつかひてさまざまに介抱さるゝいと嬉し、來會者は三十人にあまりぬ、龍子の君の田中ぬしにことづけて我と伊東君に文あり、この廿日までに嫁入り給ふべきよし、今日の會をおもひやりて歌あり、

むれ遊ぶ澤邊のさまをおもひやりて

心そらにもたづぞ鳴なる

なくねもしどろなるみだり心地をゆるさせ給ひてよなど例のうるはしうみだれ書給へるうつくしくさゝやかなる紙に遠山のかたかすかにかすませて田鶴鳴渡る松ばらのけしき繪もをかしかりし、我には又別に十五日前にいま一度おどろかし給てよ、あ

たらしき家居には誰も居ごちよからぬものにて今よりのちしばらくはゆる／＼御ものがたりもかたかるべくいかで／＼などありけり、これがかへしはと人々いふものからさわがしさにまぎれてやみぬ、夕すぐるほどかしら俄になやましう成りしを人めにもしかみえけん、まだ残る人いと多かりしかど、我はくるまたまはりて家に歸りぬ。

十一日 雲のあしきだまらず雨にやなどいへど、龍子ぬしよりの文もあり、今一度はいかでと思へば、今日をすぎて又よき日あらざりけり、さるはかの三崎町のうしにありのちの物語も聞こえ、今の身のありさまももの隔てすつげまほしきをふりはへてはいかゞ人めの關のわづらはしきはさてものがるべし、母君妹などもゆるしなうの給なすをしのぶの山のしたの通路もとめんには何ごとのうきかあるべき、たゞ誠のゆるしを得てとおもふほどに、折もよし此廿日よりはみやこの花にわが名かゞげられんとす、むさしのゆかりあるかの大人にこの事つげすばいかゞなど母君はまづの給ひ出にける、さらば龍子ぬしがり参らせ給ふ道すがらこそよけれと妹もいふ、ありし文には、

十一日か十三日おどろかしたまへとなるに、十三日は日曜なり、大人のもとにも友など多くつどひ居らん中々にもものうるさしとて、今日は龍子ぬしも訪ふ成けり、祝ひのものどももてゆく道にて三崎町への文は出しぬ、君は何ごとの心がまへもなきやうに例のあされ居給へり、何某新聞の評したらんやうに大雅堂の夫妻おぼゆるんかし三宅雄次郎といへば世にはたゞ木のはしなどのやうにおもひて仙人とさへいふゆり、さるをこの君のよにめづらしきまで才たかきをむかへたまふなる、猶たゞ人にはあらずとて目をおどろかす人々多し、みやこの花の松竹梅のこといかに成りし哉、われもいよ／＼十九日には鬼界がしまに移らんとするを中々いとまなきしも心のどかなればにや短編のものかゞばやの心ぐみあり、さるはほんやくといふほどならねど意やくなどいはいふべし、伊太利の小説を英にやくせしその物語を父より聞たるなり、是れを今金港堂に出さば大方は松竹梅に加へんとやする、新年の附ろくといふさへ花々しきを女斗三人などいさゝか目だつふしなきにもあらず、かしこにもさるげざやかなること好まぬほんしようなるに、とつぎてほどもなくいかにぞや、それも君とわれと坪井の秋香ぬしなどならばまだ少しはよし、坪井の家は三宅とはいさゝか縁しのなき

にもあらず、此十三日に小石川の植物園にて披露をなすべき筈なれば夫よりは追々に
 したしみを重ぬる道理なればなり、聞くところにては竹柏園や選みに當りけんそれに
 ては少し不都合なればとて笑ふ、おなじうは君のと共にして一冊のものよに出さばや
 金港堂ならで春陽堂にてもよし、何かお作はなくやと問はる、我れ例の遅筆なれば是
 れぞとおもふものもあらず、されどもかねてものしかけしがしばしにてまよらんと
 するをあはれ諸ともにせさせ給はゞ嬉しなど語り合ふ、ひる飯たまはりてしばし
 て出ぬ、二時にも成けん、番町より車にて三崎町にいそぐ、北風いとつよく身をさす
 様也、日月隔てゝものくるほしきまでおもひみだれたるを君はさしもおぼさじかし、心
 にもあらぬやうなる別れのその折はさまぐいひさわがれたる人ごとのつらさに何ご
 とをおもひ分くるいとまもなかりしを今さらにとりかへさまほしうおぼゆるぞかひな
 き、はじめよりにくからざりし人のしかも情ふかうおもひやりのなみ成らざりしなど
 おもひ出るまゝに、何故にかく成けん、身はよしやさは大かたのよにつまはじきされ
 なんと朝夕なれ聞こえなましかば中々にいけるよのかひなるべきをなど取あつむれ
 ば、人も我もよの中さへもいとにくしかし、まづ何ごとをいはや、かの君がみ心も

しらすうちつけならんやうに月日の隔てをかこたんもいかゞ、さりとして都の花のこと
 よりせんもいとわびしかなと思ひつゝくる間に車は大人が店につきたり、いま更に
 心おくるれば音なうもしばしたゆたはれぬ、此處は新開の町のはなく敷にいと
 みがきそへたる茶だなにしあれば出入の人行來の人見おはすらん目ざし心がらにやい
 とつゝましくおぼゆ、こゝには早く文のときて大人やしかの給ひおきけん、かしこ
 げなるものゝいそぎはしり迎へてこなたへといふ、店と奥の暖簾口にたちてしま
 ねくは見しれるはしたなり、ものつゝまじういざり入れば六疊敷斗の處に机おきて
 ゆたかに大人は寄りかゝり居たまへり、ふとあふげばものいはす打笑み給へる嬉しな
 どはよのつねた、胸のみおどりぬ、といはん角いはんなどおもひつゞけしことは何か
 にかはかくしけん、さらにいはるべくもあらず、からうじて月日いかゞすぐし給
 ひけん心には忘るゝ間もなきをおもひよらすもの隔てゝのみなんありし、御なやみ
 の後はさしも御なごりなうとこそおもへりしに、此ほど御めしつかひよりそこはかと
 なくよわげになど承りしは誠にやなどほのかなるものがたりに景色心みれば、たゞに
 こやかに打笑みてこと少なうなるしも底に物ありげにていとくるし、都の花のことか

たるに、そはいとよき事成かし、何方にまれ筆とりておはしまさばよろこばしき事ぞかし、我がしれる友などもみな惜しみ合ひてありしものをなどかたたる。さる頃明治女學校の教師なる何某といふ人我がむさし野へ君のこと頼みに來たり、女學雜誌に執筆あり度しといひたれど、さしつかへおはします頃にてしばし筆とり給ふことあたふまじと斷りたるは我が潜越の所爲成けん、もしこれに出したしなどのぞみ給はいつにもあれ申給へ、我れ其人に紹介し參らせんにすこしも君が名のけがれには成るべくも非らずなどいふ、我も言はまほしきこといと多かれど人めあれば打もいであへず、君もの給ふことありげなれど口つぐみ給へり、畑島の老母一昨日俄かにうせしかばこの一日二日常に通ひて世話をなし居たりといふ、さるは我が郵便のとゞきたるより歸りおはしたる成るべし、氣の毒なることをとおもふ、商ひのいといそがはしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立はたらきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐる様成し人の細々と成ぬるに、出入につけてものはかなきみづしめ様のものにさへ客といへばかしら下げ給ふことのいたましきこれをなりわひとすれば身にはつらしとも覺さざるを見る目はいと佗しかし、今日

は例に似ずいと商ひの多きは君のおはしたるに依りてなるべし、かゝる福ひの神おはしたるに何かおもてなしせずはあらじとて、みづしめ呼びて菓子などかひにやる、かく隔てなげにもし給ふものから何故とはしらすありしに替りし心地してたゞひたすらに心ぼそし、新開町のならひ何品といへどよきものうる家なく菓子も何もかゝるもののみなれどゆるし給へかし、かゝる中なれば人は我がみせをもこのたぐひと見てさしも珍重には思はざるを、もしもこゝに來て一度かふ人あればおもひがけずおどろきて、三崎町にもかゝる家ありと夫よりは常に買に來たるなん中々我家の繁昌はまさる成りとうち笑ひつゝ例のおどけ給ふに、夫れは道理ぞかし御店のみならず御あるじがら庭鳥のむれに鶴のうち交り給ふたぐひなればと僅にいへば、そは過賞ぞかして大笑し給ふ、人なきを見てつと御身ぢかくさし寄りつゝ何は置て御目にかゝることのいとほるかなるが口をしうこそ、何事もうき世に申合す人なき様にて心ほそさ堪がたしと言へば、何かは我などの御助けにも成る節あらんや、されどもしこゝに申ことありとも覺さば、此うら道のいとさびしく人めといふものふつにあらねば此處より立寄給はん誰かは見とがめ申へきとさゝやき給ふ、いでや其しのびたるたぐひを厭へばこ

そ、こゝにかく心くるしきをと言はまほしけれど申さず來りぬ、何もく残したる様にて別れぬる也。

十二月の七日 大人より文あり、朝日新聞にかねてのせたる小説こさふく風更に一本にまとめて世に出さんとするを、いかで御歌一首めぐませ給はらずや、御都合にてしらぬ人のつもりにてもよく、又は御匿名にてもよし、これは參上願ふべき筈ながら例のはいかりの關ある身中々御さわりにもやとて斯くはとあり、直にかへししためて、歌は一首、よからねども林正元をよめるの成けり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し。八日 ありし去歲をおもひ出るにまことに今日成けり、かの大人より俄かにいふべきことあり人前にてはいといひにくきを夜るなりとも參らせ給はらずや、御歸りは車にて送らすべしとありしに、母君中々にゆるし給ふべくもあらで、この早朝に平河町を訪ひにき、さしてのことにもあらで何かあやしきもの語りにほめかし給ひしことありきなど、ふとかぞふる折しも龍田君參り給へり、かの歌のはし書をもとめ給ふ成けり、少しものがたりす、菓子など參らせたるを心よく喰ふ、ゆかりある人とおもへ

ば何方かにかくかるべき、歸らんといふに母君菓子をつゝみて兄君のみやげにと出す、龍田君よりは我がよろこばしさ上もなかりき、かゝる折ふしのはかなごと中々にかひつけばやおもへど、猶いさゝかは心地まぎるゝ様にてなん、あはれはかなしかし。

南佐久間町二丁目一番地

青木 虎一

さる樂町二丁目二番地河合直方

山下 直一

07+

よもぎふにつ記 (二十五年十二月)

かけじとおもへど實に貧は諸道の妨成けり、すでに今年も師走の廿四日に成ぬ、
 こんとしのまうけ身のほどくにはいそがるゝを、此月の始三枝君よりかりたるかね
 の今ははや残り少なにて奥田の利金を拂は、誠手拂ひに成ぬべし、餅は何としてつ
 くべき、家賃は何とせん歳暮の進物は何とせん、曉月夜の原稿料もいまだ手に入らず
 外に一錢入金の當もなきを、今日は稽古納めとて小石川に福引の催しいと心ぐるし、
 朝より立まじりて引當しはまどの月の折つめ成けり、家に歸れば國子待つて、これ
 御覽せよ龍子様より此お文只今参りぬ喜び給とて見するははがきなり、來新年早々女
 學雜誌社より文學會といふ雜誌發兌に成らんとす、君に是非短編の小説かきて頂きた
 く彼社より頼まれて此御願と有けり、種々お物語もあれば御寸暇にて御入をと末にか
 られしかば直に返事書て、明後日参らんといふ、家にては斯く雜誌社などより頼まる
 様になりしはもはや一事業の非かたまりしにおなじとて喜こばる、此ごろの早稻田
 文學に文學と糊口といふ一欄ありしを思ひ出れば面てあからむ業なり。

廿六日 早ひるにて番町にゆく、三宅君には始めて参るなれば何か土産持たずばな
 どいひしがいざや虚飾は無きこそよけれ、是れをしかく谷め給は、哲學者の妻とは
 いはじと笑ひて行く、田邊君よりは一町斗手前にて女學雜誌社の通に少し引入りたる
 格子作りなり、向ひ合せに一二軒の隣あり、いは、裏屋めきたれど、座敷の敷は十間
 ほどありて家のうちもさまで見にくからぬはおもひしより異成けり、志賀重昂君一
 し先に有りて襖一重其方に三宅君と物がたる聲ありくと聞ゆ、此處にもしきりに金
 を言ひて、五百圓何とやら宮崎が今必死なり、君何ほどとやらを出さば其餘は我何と
 もすべし、我れに手もとの無きは無論なれど、夫こそ何と加して才覺すべしといふは
 志賀君の様なり、あるじは聲低からねど詞吃ればにや、よくも聞とれずと切れくのもの
 の語り、窮鬼は何方をもおそふものかとかし、龍子君は木綿の着初めを此處にな
 して憂しとせぬ顔内心ほこる處あれば成るべし、志賀君歸られて後、三宅ぬしも我が
 席に來給ふ、彼れにこと葉なしこれに詞なし、初対面は窮窶なるものにて、はては困
 じて次の間に入られぬ、雜誌は女學雜誌社の北村透谷、星野天知子兩人の創立にて、
 はじめ葛衣と名付けしを文學會と改ためぬ、夫にはいはれありとて龍子君が異見の用

ひられしを語る、我れに和歌の一欄を受持くれよとの頼み成りしかば、もとよりさる方も非らず且つは暇なきみの中々にうるさければ我一人ならば御免蒙り度し、今一人相役あらば兎も角もとして少し潜越成しが君の事をいひたるに、和歌は何方とも御心まかせ成るべく、一葉女史の事はしもかねて女學生に論じたる如くその妙想に感じ居れば是非小説の著作を依頼したく其方様より依頼して給はれと星野君より手紙來たりぬ、其女學生の評は見給ひしやと問はる、否しらすと言へば龍子君もまだ見ず見度ものなり、兎角は是非かきて給はれかし、一ツは御名譽にも成り此のちのお爲にも成るべければなどいはる、三十一日までにとの約束にて暇乞して出しが、さりとは覺束なきこと成けらし。歸宅直に机に向ひて硯をならせど趣向中々にうかばず、いたづらに今日も暮れぬ。

廿七日 亡兄清光院祥月の命日なり、茶めし焚きて久保木の姉君をまねく、芝の兄君も來臨の筈成しが如何しけん來らず、上野の房藏、奥田の老人など來たりしかば是れを振舞ふ。金港堂の音づれいまだに非らず、さりとも明日は廿八日なり、餅つかせずばとて二回斗あつらへぬ、是れは奥田に拂ふべき利金をしばし餅のかたに廻すべき

心ぐみ成しなれども今宵この老人の來しに待てよと言はんも苦るしとて手もとにあるほどを集めて二圓やる、さるはまだ二圓五十錢斗渡すべきながら夫れは利金ならずして元金の方なればしほしの猶豫を頼みて斯くはせしなり、扱も明日岡野より持こみし時何といはん、榛原へあつらへ置き醬油も酒も明日は來ん、其拂ひは何とせんとみ合す顔に吐息呑込むもつらし、奥田の老人いざとて歸らんとする時郵便とて届きしは何、あわたいしく見れば、藤陰隠士より曉月夜の原稿料明廿八日兩替町の編輯處にて御渡し申さん午前の内に參らせ給へとなり、自然は斯くも圓滑なるものか。

廿八日 夕べより野々宮君泊りて今朝もまだ歸らず。家にては餅つきの祝ひにする粉をこしらへんなど勝手に母君の手いそがし、我れも岡野やより持こむに先立て金港堂より金うけ取來たらんとて十時といふに家を出ぬ、野々宮君もさらば諸共にとて眞砂町まで伴ふ、伊東夏子ぬしにも借たる金あり、何時とかぎりの定めもなければと投やりにては如何とて通り路なれば駿河臺に立寄りて其いひ譯をなす、彼方にも語ることいと多しといふ、我れよりもいふことあれど又こそとて別る、此處より車にて本兩替町の書籍會社にゆく、直に藤陰に會ひて曉月夜三十八枚の原稿料十一圓四十錢をう

けとる、十六斗の時成し、九十五の銀行に處用ありて此前を通りしに、洋服出立の若き男立派なる車に乗りて引こませしを見し時、天晴れ美ごとや彼れは大方若手の小説家などにて著作ものゝことに付き此家に入出入する人なるべし、三寸の筆に本来の數寄を盡して人に尊まれ身にきらをかざり上もなき職業かなと思ひし思かさよ、我れも辻車なれど美しくしき毛皮の前掛に車夫が背縫ひの片かなもじ我が性かあらぬか知らぬ人のしることならねば、まして古ものなれど紺布の上下着、手に持つ頭巾の僅かに紺屋を口説きて覺束なしと断られし染めを頼み、しんしの張りの出來がたければ家に只今火のしの力かりあぶらすとも、頭巾なしにて此寒天に見すばらしければと母君の趣向の苦しがりとは人も知らじ、我れも昔しは思はざりし、此あさましき文學者家に歸りし時は餅も共に來たりぬ、酒も來たりぬ、醬油も一樽來たりぬ、拂ひは出來たり、和風家の内に吹くこそさてもはかなき、いざとて午後より師君へ歳暮に越く、中村君より我れへの歳暮に帶上げのちりめんを送られしとて取次がる、師に頼まれて小出君に歳暮もの持ゆく、歸路かねての心組に曉月夜の原稿料十圓のつもり成しをおもふに越えたれば、彼の稻葉のほなみ風にもまれて枯々なるも哀なるに、昔しは我れも陸びし人の

見れよりは何ごとも頼まねど流石に仇の間には非らず、理を押せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の言は、姉ともいふべきを、いでや嘉ひは諸共にとて柳町の裏やに貧苦の體を見舞ひて金子少し歳暮にやる、昔しは三千石の姫と呼ばれて白き肌綾羅を断たざりし人の髪は唯かれの、薄の様にいつ取あげけん油氣もあらず、袖無し羽織見すばらしげに着て、流石に我れを恥ぢればにやうつむき勝に、さても見苦しき住居にて茶を參らせんも中々に無禮なればとて打詫るぞこゝに涙の種なり、疊は六疊斗にて切れもきれたり唯わらごみの様なるに、障子は一處として紙の續きたる處もなく、見し昔しの形見と残るものは卵の毛におく露ほどもなし、夜具蒲團もなかるべし、手道具もなかるべし、淺ましき形の火桶に土瓶かけて小鍋だての面かけ何處にかある、あるじは是れより仕事に出る處とて筒袖の法被肌寒げにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居るもはかなし、正朔君の我が土産を喜こびて紅葉の様なる手に持しまゝ、少時も放たず、御佛前に御覽に入給へと母君に言はれて佛だんめきたる處に備ふ、何事も時世にて又めぐり來る春もあらんを正朔君だにかくてあらば夢力を落し給ふな、かよはき御身に胸をいたためて病氣などを起し給は、夫こそ取かへ

しのあることならねばとて慰むるに、聞き給へ此子の成長くならば陸軍の技師に成りて銀行よりいくらも金を持ち来りて父も母も安樂にすぐせんと常々威張りて申すこと、流石に頼もし氣に笑みて語る、又こそとて此家を出れば夕風袂に吹きて大路すでに聞く成ぬ。

廿九卅の兩日必死と著作に従事す、曉がたしばしまどろむのみにて一意に三十一日までに間に合せんとするほどいと苦し、三十日には上野の伯父君歳暮にとて参られぬ、一日筆をとること叶はずして暮しき、其夜十一時まで燈下でありしが國子しばしば我れを諫めて名譽もほまれも命ありてにこそ斯くまでに腦をつかひ心を勞して煩ひ給は、何とかすべき、見る目もいと苦しきに何卒これは断りてもはや今宵は休み給へとくり返しさいさむ、實に夫も道理なりとて筆をさしおけば、心共につかれて俄に睡くさへ成ぬ。

卅一日 早朝三宅君に断りのはがきを出す、一日家の中を掃除などして日没前に何ごともなし終りたり、いざとて國子と共に買物がてら下町の景氣見に行く、本郷通りより明神坂を下り多町にもものを買ひて小川町の景氣を眺め、三崎町に半井君の店先を

眺めぬ、年わかき女の美しく髪などもかざりて下女にては有るまじき振舞は大方大人の妻君なるべしと國子のかたる、大阪の例の富豪家の娘大人に執心ふかしく聞きしが持參金にて嫁入せしにあらすや、扱もいかに働きある人としてこれほどの店無手にて成るべきならねば出金の穴何方にかあるべきは定なり、世は斯かる物とうめきて歸路富坂下に國子ものをひらふ、いとどのかななる大晦日にて母君家を持ちし以來この暮はど樂に心を持ちしことなしとていたく喜ぶる、九時といふに表をとざして寝たり。

廿六年の一月一日 はいとのどかなる日かげにあらはれて、門松のみどり千歳といはひて例の雑煮もたべ終りぬ、昔は元三のほど年頭客に勝手元の暇なく羽根つく間もあらずと恨みしが、引かはりて更に來る人もなし、母君近傍に年禮廻りをなし給へば、彼方よりも老母、内室など答禮はすべて女なりけり、芦澤芳太郎早朝より來る、陸軍にて賜はりし料理を持參す、一日遊びて三時ごろ營中にかへりぬ、今日年始状のといきしは野尻理作、穴澤小三郎、山下信忠の人々なり、これより出せしは十五軒斗成き。

二日 もいと長閑し、三枝、藤林、山下、安達など親類めきたる年頭客あり、兄君

も來らる、久保木の姉君を呼びて此夜歌留多の催しいとにぎやかなり、姉君は三十七
兄君廿八、我は廿二、國子廿いづれも子供にてすむまじき年輩なるを、打寄れば斯く
までおさなきかとして母君炬燵に寄り居て見給ふさま何事の憂きもあるまじく樂しげな
るが勿體なくうれし、ことにまぎれてかき残しぬ稻葉の正朔君も年禮とて今日遊びに
來たりしなり。

三日 田中みの子君年頭に來る。

四日 大島みどり子君來る。

八日 にはじめて年頭に出る、猿樂町藤本君、西小川町大島君、下二番町にて田邊
君、三宅君、歸路師の君に參る、車夫が廻り順のかゝる都合成しなり、田中君にも參
るべき心組成しを三宅君のもとにて逢ひて、今日は留守なるにおなじくは又の日とい
ふ、三宅君と共にしばし語る、文學界の小説是非出し給はれ、初號は廿日に發行のは
づなれどこれに間に合はずば二號にてもよし、是非にといふ、少しかたりて別れたり
去歲のこの日は半井ぬしを平河町に訪ひて逢はず、小田君のもとに行、かくれ家に行
こゝろあわたしかりしを思ひ出るに、何ごととはなしに胸いとくるほし、昨是今非

の世、今日はあしたの何なるべきか、思へば喜憂は無差別なり。

十三日 昨夜宮塚ぬし來訪、上海に趣きしは五年の前なり、昔しながらの物がたり
に懐舊のおもひたえがたし、羽根つきて共に遊びし春は君が十七の頃なりし、さても
變りにける身哉、かゝれとてしもおもはざりしを、涙たゞこぼれにこぼれて戀しきは
そのいにしへなりけり。

十四日 小石川稽古はじめなり、風流の俗事少し斗の點取に暮して、日没後かへ
る。

十五日 上野の清次母と共に來る、菊池の武治母と共に來る、田部井の清三父と共
に來る、榊原家の少嬢乳母と共に來る、これは中島師のもとに仕へたる女の今は榊原
家にあるなり。

十六日 早朝秀太郎敷入に來たりて我家にも寄る、西村君來訪、ひる飯を馳走す。

十七日 龍子ぬしのもとより文學界に出す小説うながし來るいとものうし。

十八日 芝兄君に文を出す、議會傍聽券のことにつきてなり。

下院議會は昨十七日河野廣中君發議により政府の反省を求むる爲自ら五日間の休會

と決しぬ、それは豫算案の政府に容れられざりしに依れり、廿三日の開會こそ天下分めなれ、議會解散せらるべきか、内閣大臣總辭職に致らんか、この所いと六ツかし、こゝろ三日間市中警戒、夥敷よし。

廿日 兄君に廿三日の傍聽券を送る、西村君を依頼なして飯村丈三郎君より貰ひたるなり。此夜までに小説雪の日したゝめ終る。

廿一日 小石川稽古なり、午前より行く、小説雪の日今日は郵便に托して三宅君に送る、師君は錦輝館に何某君の初會ありて趣き給ふ、我れは人々に手ならひなどをしへて、日没ごろ歸る。

廿二日 藤本君を猿樂町に訪ふ、都の花のかりたるをかへし更に又其あとをかり來る、今後の著作につきてしばし物がたる、此日野々宮君、吉田君來訪、野々宮君は一度岩手に歸りて又今日來たられしなり、着京直になりとて行李など携へたり、結婚の事などにやとかたぶかれぬ、みちのくよりなりとて雉子の〇を一羽送らる、此日西北の風いとほげしきに此人を歸りし後淺草より出火あり、西鳥越とか聞くに三枝君は如何など一同心をなやます。

廿三日 晴天。母君小林君に金かりに行給ふ、菊池君の老母來訪、新年はじめてなれば有合せにて酒を出す、母君一寸立かへりて直に三枝に火事見舞にと趣く、か成の大火にて百何十戸とか焼たれど三枝にはこともなかりし、この火事に又鳥越座も鳥有に成りぬ、此夜新聞號外かしましく賣來る、我が改進黨新聞も號外を發しぬ、議會は停會に成ぬるなり。

廿三日より向ふ十五日間二月の六日までなり。

廿五日 雪ふる、いさゝかづゝはしばし降りしがつもるほどなるは今日ぞ初雪成ける、中村禮子ぬしのもとに數よみの催しある日なれど此頃は歌にいたく心も入らず人々とものがたりなどするがいと物うければ物にかこつけて断りしが、此雪にて他の人々も來會しけんか如何になど流石に思ひやらる、三寸斗はつもりけるなり、樹々の姿大路のさまいとおもしろし、四時ごろには降やみけり。

廿八日 小石川稽古なり、正午よりゆく、伊東君教會のことにつきて少しものがたりあり、中村君のもとに聞たることゝて怪しき言葉をいひ聞かせられしが其心よくわからず、師君は養子のこと取定まりて今日は其方へとて稽古後直に支度し給ふ、此處

すべて書つゞくべきにあらず。

廿九日 曉より雪ふる、今日はさきの日のにも増りて勢ひよく降りに降る、芦澤來る、今日は九段に大村卿の銅像落成式あるべきながら此雪故延に成しなど語る、安部川もちなどこしらへて打よりてくふほどに、いや降しきる雪つもりにつもりて芦澤歸宅ごろには五寸にも成りぬ、日没少し前にやみぬるなり、夜いたう更けて雨だりのおとの聞ゆるは雪のとくるにやとねやの戸をして見出せば、庭もまがきもたゞしろかねの砂子をしきたるやうにきら／＼敷、見渡しの右京山たゞ／＼もとに浮出たらん様に夜目ともいはずいとしく見ゆるは月に成ぬる成るべし、こゝら思ふことをみながら捨て、有無の境をはなれんと思ふ身に猶しのびがたきは此雪のけしきなり、とさまかうさまに思ひつゞくるほど胸のうち熱して堪がたければやをりて雪をたなごにすくはんとすれば我がかげ落ちてあり／＼と見ゆ、月はわが軒の上のぼりて聞ながらは見えざりしぞかし、空はたゞみがける鏡の様に星斗の雲もとゞめず、何方まで照るらん、そゝろに詠むるもさびし。

降る雪にうもれもやらでみし人の

おもかげうかぶ月ぞかなしき

わがおもひなど降ゆきのつもりけん

つひにとくべき中にもあらぬを

三十日 淺みどりの空に村鳥の囀つりいとどかなり、家々に雪かきすとてわらへなどのほしりさわぐもいとをかしげなり、この隣なる處にわかき娘二人ある家あり、その軒並びにやもめなる男のすめるが常に追従しありきてこの雪などを唯かきにかく、この娘も共に立出てをかし氣にものかたらひうち笑ひなどしつゝかたはらいたきまでに睦つるゝは哀れ歎きの種をまかんとするにや、人ごとながらにいとあさまし。

二月三日 母君上野に年頭として趣き給ふ。

四日 佐藤梅吉へ同じく、この夜姉君誘ひて母君を寄席に伴ふ。

五日 梅吉より母君を誘ひて共に水天宮に參詣を爲す、歸路うなぎの馳走に成りしとて母君よろこび給ふ、此日日照なればあし澤來る。

『戀はあさましきもの成けれ、心をつくし身をつくして成りぬべき中ならばこそあらめ、この戀成るまじき物と我からさだめてさても猶わすれがたく、ぬば玉の夢うつゝ、

おもひわづらふらんよ、もとよりその人の目はな、おとがひさては手あしの何方におもひつきたりともなく、手かき文つゝる類ひ、ものいひ聲づかひ、たてたる心いづくいづくといふべきにも非らず、たゞ其人のこひしきなれば、常に我がおもふにも違ひてひとつくいにいへば戀しき處もあらじかし、ものゝ心なくあさはかなる人は一時の戀に身をあやまつたぐひ、かゝる所にこそおこれ、少しものおもひしりて静まりたるはこの戀にまけじとすまひて、身の中はたゞもえる様にこがるゝも心地はしぬべくわづらふも猶ま事の迷ひには入らでつひに夢の覺めぬるもあり、女などは心のほそきものなればあらそひまけて狂氣がるたぐひもあめり、されどこれは横さまなる戀にて、誠のつま女といはんには是ほどの中ならましかばいかゞは人もうらやみ世のほめものにも成らぬことか、貞女節婦などいへるはかうやうなる心の中にくみみて人のよのつとめをおもてにせし成るべし、親子の中か君と臣の間いづ方にも此心のあらまほしきをものゝ端にはしりては片おもりするものにて、したがひては害に成りぬることもぞある。この頃見る處聞くところあるまじき人にあるまじき行ひなどの交るらんよ猶この類ひにておなじうはまめやかなる道にとまなひまほしきを。』

六日 空はくもれり又雨なるべしと人々いふ、著作のこところのまゝにならず、かしらはたゞいたみに痛みて何事の思慮もみなきえたり、こゝろさすは完全無瑕の一人美人をつくらんの外なく、目をとちて壁にむかひ、耳をふさぎて机に寄り、幽玄の間に理想の美人をもとめんとすれば、天地みなくらく成りてそのうつくしき花の姿もその愛らしきびんがの聲も心のかいみにうつりきたらず、からく見とむれば紫は朱をうばひ白は黒にうつり表には裏あり善には悪ともなひわが筆によそほひて世にとまなふべきあたひなく、しばくうれひしばくうらみかしこをけづりこゝをそぎやゝわが心にみたりとおもへば黒のうせぬる時しろもうせ悪をしりぞけし時に善も又みえず成りぬ、かくまでに我戀わぶる美人はまさしく世の中にあり得べからざるか、もしは我れに宿世の縁なくして凡俗の花紅葉ならでは我心の目にうつらざるか、もしは天地の間に誠の美といふものあらざるか、もしは我が眼に美ならずとみるものまことの美かもしは天地の自然が則ち美か、もしは誠の美といふもの描くべきものならず筆すべきものならず口にも心にもつくしがたきものにて、天地の間にみちくたる空氣の眼にも見えず手にも取りがたくしてしかもこれあればこそ世に生るがごとく、斯く我がい

ふも則ち美か、人の見る目則ち美か、我が悪と見とめて筆にしたるをも又ある人は善と見るか、さらば我が悪とみとむるもの則ち美成るべし、おもひく／＼て心は天地の間を駆けめぐり、身は苦惱の汗しとに成りぬ、思慮につかれてはひる猶夢の如く、覺めたりとも覺えず眠れりとも覺えず、さしも求むる美の本體まさしくありぬべきものもなかるべきものとも定かに見とむるは何時の曉かも、我れは營利の爲に筆をとるかさらば何が故にかくまでにおもひをこらす、得る所は文字の數四百をえて三十錢にあたひせんのみ、家は貧苦せまりにせまりて口に魚肉をくらはず、身に新衣をつけず、老たる母あり妹あり、一日一夜やすらかなる暇なけれど、こゝろのほかに文をうることのなげかはしき、いたづらにかみくだく筆のさやの哀れうしやよの中。

二月七日 晴に成ぬ。一日机に寄くらして日没より摩利支天に參詣し、萩野ぬしのもとに新聞をかりぬ、今日は議會開會の日なり、模様いかになど人々いふめる、歸路切通し坂のあたりけしきいふべくもあらず、何よりも高きは號外賣くる新聞賣子の聲さてはそこ／＼の辻にたちて壯士とかいふ様なる人の今の世のさまを文につくりて鐵石心とかあやしきふしつけてうたふらんよ、郵便局の燈か／＼やきて脚夫の行來織る

よりしげく、電話交換所のいそがはしげなる警察に出入る人の二重廻し深々とるりを立てしは探偵と覺しく、金ばたん角帽子の二人三人づれに立入る寄席は女義太夫なり身なりいでたち斗は何方の姫奥方かと負ゆる人の夫にはあるまじき人に手を取られてをかしげにものかたり行ことばを聞けば、みそこしきげて豆腐屋にはしるそれめきたり、文明開化か百鬼夜行か、筆こゝろにしたがは材料は山ともいふべし、家に歸りつきし時に我新聞も號外來たれり、議會は解散にもあらず内閣總辭職にもあらず、無期停會に成ぬるなり、伊藤首相病後はじめての出席に例のなめらかなる門豊かなる姿よく上下を説き又さとし、此おだやかなるおさまりに成りぬ、此代朝日新聞の小説五十回斗のものよむ、我が桃水師のもありけり、雪達摩とてたんでい小説なりき。十二時斗床に入りなき。

八日 空くもれりいと寒し、炬燵を昨日よりやめになせしかば、一しほに寒し。

九日 起出でみれば空ははれたれど垣根のもと草の葉のうへしろ／＼と雪をいたたきぬ、むべこそ夜の間の寒かりきなどかたる、朝の間しばし小説のこと國子とかたる風少しあれど今日はあたくかなり、いでやつとめて今日斗の間にこの一小説つゝり

終らばやとおもふ、金港堂よりの注文に歌よむ人の優美なるを出し給へといふこそは
いとくるしけれ、さしも其社會にたち交りてあさましくいとほしきことを見聞きなれ
ぬる身には、歌よむ人とさへいへばみだりがはしくねぢけたる人の様におもはれて、
誠のみやびなるをかゝんとせば人しらぬむぐらやに世をせばめたるなどをこそ引出で
來つべけれ、玉だれの奥にうちしめりかひゝそまりたる令嬢などにも歌よむ人なしと
いひがたけれどそれらはすべて我眼にうつり來らずかし、さてもならはしのさり難き
をこれにしれば教へといふものゝゆるかせになしがたきは道理ぞかし、心をあらひ目
をぬぐひて誠の天地を見出んことこそ筆とるものゝ本意なれ、いさゝかの井のうちに
ひそまりてこれより外に世はなしとさとりがほなるを人より見んにいか斗をかしから
め、我もそのたぐひにて我ながらしもをかしきを此眼ひらきがたきは其ならひ性と成
りしぞかし、やみぬべき哉。

敷島のうたのあらず田あれぬれどにござぬかたもあるべきものを

こは歌にはあらずかし。

この日午後埴道忠來る、兄君の代理になり、少時ものがたりす。

十日 晴なり、やうく腹稿だけは成ぬるに今日より筆を下ろさんとす、午前
らなすことありて遊びたり。

十一日 小石川稽古にゆく、あらたに入門の人二人三人あり、渡瀬よね子、坪内何
某、白根何某とか聞けり、この人々に習字をしへなどす、三宅龍子ぬし來る、文學界
の初號郵送申べきながら怠りにけり廿六日の發會までゆるし給へなどいふ、顔并ひは
誰々なりやと問へば、初號は透谷などやうの人にて格別におもしろくも非ず、二號の
豫告を見れば大和田建樹、井上通泰などの諸大家に我れと君との名前のり居たり、君
の雪の日は例の出來よりわろき様におもへど世の評はいかなるか知らずといふ、我も
しか思ひしことなり、されどそは腦の仕業にて我が罪には非らずと笑ふ、龍子ぬし今
日は御徒町の會堂に岩本善次君の父君と會葬するなりといふ、空色瀧ちりの裾もやう
に同じ色あられ小紋の二枚した着きて、帯はるび茶縹珍、羽織は小豆色なゝ子なりけ
り、かき鼠の地に八重櫻二輪ばかり水色の糸に縫ひて、景色斗金絲の入りたる襦袢の
るり見えぬ斗甲斐絹の首まさ深くなしゝは咽になやみ處ありとてなり、髪は何のかざ
りもなく英吉利むすびとかに束かねて、打見には十六七とのみ見ゆめり、はじめより人

とは異なりたる人なりしが三宅ぬしがりとつぎてよりいとしく異様をまねぶか、何としてもつねの人とは覚えられず、此きるものもたゞ引あげに引あげてきしかば腰のあたりたぐまりて唯大きな袋をまとひつけたる様なり、みの子ぬし詞をつくして見ぐるし着かへ給へと切にいふに、我も傍よりそのかせば、うち笑みつゝさらば母様の仰せにしたがはんとて田中ぬしに支度しかへてもらふ、我れと伊東ぬしと左右にありてそを見つゝこゝはかくせし方よしなど詞をそゆれば、あなかしましいひ給ふな、お筆を取りては樋口夏子様お上手なれど、御身みづからのよそほひは我と姉妹の間ぞかし、かにかくとの給ひながら我姿を胸中の鏡にうつして谷田の醜婦はあの景状をかくべし、腰のほとりに浮袋をつけてなど、今繪様まで考へて居給ふべしと笑へば、我も人もたえずして笑ふ、おそく成るべしおそく成るべしさらばさらばとて馳せ出す時に、二つ三つかしら下げしが一同への挨拶なりしが、あとは大風の後の様にて俄に淋しくさへ成りぬ。中村禮子ぬし十六日に歌留多とりをなせば参り給ひてんやといふ、いかゞかむつかしからんと答へれば、君は我家を嫌ひ給ふにこそとてむつかる、かずよみの連中四五人残らず参んとて約束なりにき、一同家に歸りしは四時なり。ま

こと江崎まき子ぬし昨日出産あり女子なりしとて報のありしなり。此夜國子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしていと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗みえしと國子のかたるに、

みるめなきうらみはおきてよる波の

たゞこゝよりぞたちかへらまし

いとおろか成りや、人にいふべきにもあらぬを。九段に行きし頃はるか南の空ほのく赤く闇をこがしてやうく濃くなるは火事成るべし、小川町にくる頃人々さわぎ立ちて此風にてはかならず大火に成るべしといふ、交番處につきて電報を見れば本芝四丁目邊よりなり、あやしきは去歳の天長節に國子と二人九段に遊びて其かへるさこのほとりにて錦町よりの火事に逢ひし、さぞは母君の案じおはすらめいそがんにはとてかけ出す、小川町より萬代橋をへて明神坂に母君の土産にあめをかふ、こは母君の好物の一ツにてしかも何處のよりこゝのを好み給へばなり、歸るさはいよく風吹あれておもてをむくる方もなく、露店などは大方ともし火を吹消されてうちつぶやきつゝ家路にいそぐめり、残れるも買人なければそゞろ寒げにうちしほれてほとく泣き

も出しぬべく見ゆ、家に歸るまで火事はたゞもえにもゆるとみえしが程なくしめりためる。

よもぎふ日記 (二月)

二月十三日 よべよりの寒氣いとはげし、寒暖計は零度以上五度に成ぬ、我がまだしらの寒さなり、手あらひなどはあつき湯をそゞぎ入にたれども猶氷とけず、それにならひてももの皆その如し、仕かけ置し米のたいこほりに氷りて桶より出すこと難く、これにも湯をそゞぎてやうくにとかしぬ、十時に成ては寒暖計廿度にのほりしなり。

十四日 母君小林君に用事ありて行、この日も朝のまは寒暖計七度斗なりし。

十五日 少しゆるびたり、起出て見るに霜も少なくて今日は廿一度なりとて一同よろこぶ、今日の新聞に歐羅巴各洲もまれなる寒氣にて全市みな氷にとざられたるも有よし。

衆議院上奏につきてかしこき詔勅の下りしは十日の日成りき、さるは其内廷の費を減じさせ給ひて六ヶ年の間三十萬圓づゝを年ごとに、軍艦製造費のうちを下させ給はんの御ことのりに誰かは涙をふるひて喜ばざらん、貴族院議員會我中將こゝに其歳費

四分の一をもて献金の微意を表さんとして緊急問題として議場に提出せられぬ、鳥尾中將これに不同意のかどありとて席をけつて退場し、谷將軍怒つて悲痛の詞を吐くなどことおだやかならざりしは十三日の議會なり、説に依りて遂に歳費十分ノ一をもて献金すべきことに議決せられしは昨日なりとぞ、或る草ふかき處に住む人こぶしを握りてなげくこと有りしかか。

このひのこと少しするす。

十四日 衆議院議員宮城浩藏君死去。

十三日 浅草吉野町剛欲婆平澤ひな斬殺せらる。

十日頃 奥州酒田の豪族泉何某等数人相馬樓と呼ぶかし席に宮中御宴をまねびたる

大不敬の所爲あり。

十四日 新聞。

千島艦の處在たしかにされる。

落花枝に返らず破鏡再度てらさず四大破れて五濫空に歸す魂魄天地に消散して冥々

朦々たり、今汝何に依りてか此世に執着を止めんや、一心の迷妄に引かれて永く地獄に墜落し、剉燒春磨のくるしみを受けんや、速に悪念を去て成佛得脱をとげよ、則ち汝を法通妙心院女と名付く、喝。

十七日 早朝地震あり、これより天氣くもる。午後一時頃湯島四丁目より失火直に消たり、西村君來訪、六時ころ歸宅す、雨降出づ、九時過る頃近邊失火の模様あり、雨はしのをつく様なるに立出てみれど何方成しか此夜は分らず。

十八日 雨やみて風吹き出づ、姉君來訪、母君血の道にてけしきすぐれず。

十九日 小石川稽古を休む。

廿日 安達盛貞君病ひあやふしと聞くに國子と共に見舞に行く、誠此度こそは限りと見えたり、人からおもしろからで常はさのみ親しくもせざるものから見るまゝに涙ぐまれて哀れ今しばし生かせまほしとぞ歎かれぬ、かゝるを見るにも老たる親を持つ身はともに悲し、枝静かならんとせば風のやまざる様に、養はんとおもふ親の世を早くなどなさは天地を恨みて甲斐のあるべきならず、さまざまにおもふほどいと胸いたし。この日望月來る、日曜なれば芦澤も來る。

廿二日 晴天。日没近きころ都の花來る、百號にて一度といひむべきよしに聞きたるに組織かはりて更に百壹號を出せしなるべし、表紙は薄紫の紙に桃櫻の畫様も中々によし、我曉月夜これにのせて永洗がさし畫花々しく藤陰ぬしが口上に我が上ことごと敷かゝれたるも面ほてりする業なり。

廿三日 晴天。中島師君發會につきて問合せなし度よしにて榊原家より使者到來すつね姫君が侍女にて常に小石川へも供する人成しが、母君初對面し給ふとて立出るにやゝと驚きてあなた成しかく存せざりしことよといふ、母君は老眼のたどくしければ誰様なりしや忘れぬといふに、これは其昔し安達ぬしがもとに千代子が侍女として仕へたりし女なりといふ、我も常に見しる長とかいふ大工の妹なり、縁は蛛の圍のめぐりくしものなり、さればこそ天網粗なりとて罪せし罪ののがれ難きはや、こゝに話しの口とけて様々のものがたりいと多し、此人歸りて午後姉君來訪、時候あたりや、心地すぐれずといふに茶菓子馳走などをなす、日没後とさしかためてみなみな火桶のもとに寄つどひつゝ物がたりするほどに、門のとほとくとたゞきて音なふ人あり、日暮て訪ふ人ありとも覺えぬを聞きたがへかと耳そばだつれば誠に我が家な

り、誰様やと家のうちより問へば、半井にこそ候へ夜に入て無禮なれどといふに、其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん様に成ておもひかけずたゞ夢とのみあきれにけり、立出て門のと開けて例のもの靜かに立入る姿うれしなどはしはし心地さだまりての後こそ、何事も讒の中にさまよふ様なり、明ぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露はすれたるひまなく夢うつゝ身をはなれぬ人のいと此一日二日空にまたれて訪ひ訪はるべき中にもあらぬをあやしう人づての便りもがな、せめては文にても見まほしきをなど人にいはれぬ物をおもへば幾度かどに出で立つくし、あらぬ郵便にたばかられて心耻かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覺えず問ふべき事も忘れ、面ほてりのみいと堪がたし、君しづかに口を開きてうち絶參らせし疎縁の罪はおのづから見ゆるし給へ、年頭の狀給はりしに其かへしも參らせず去歲より風邪を病みて新年に成りては久しう湯治になど遊びしものから思つゝ斯くはなど詫給ふ、去歲給はりし御歌の御禮ながら胡沙ふく風の製本せしを御覽にもそなへ度、夫故にこそ、書肆の欲ばりて賣かたにはいと早く廻すなるを作者のもとには中々に送りもこさず、漸く我が手に廻りければとて胡沙吹く風上下二巻賜ふ、表紙美麗にして畫様も美事に中

中の大部なり、前編の題字は朝鮮の忠士朴永孝、詩は衣州逸人とか君が知己なるべし我が参らせたるは晴々しく口書の前にありて、林正元が肖像とは並びける。素園主人が文、うしがはしがき、卷末には愛讀者より送られたる詩文章の類多くのせたり、無名氏寄せられたる詩の内に、

嘗期海外舉奇勳 鐵劍芒鞋意氣振

不熾素心歸落莫 一篇偉作表前身

たるそいろに其昔し思はれて、ともし火のかげよりかすかに面を仰げば優然としてうち笑みたる面さし、まこと林正元今こゝに出現したらん様なり、我が小説曉月夜いのほどにか見給ひけん、こまやかに物がたたる、猶折ふしに目と、め給ふらん嬉しさいとかなし、ことにものがたることも多からでさらばとたつを止め参らせんも中々にて送り出るほどかなしともかなし、嬉しともうしともいはんかたぞなき。夢うつゝともえこそ分ねばいはまほしき事も何もたひたすらにもものも覺えず。

胡沙ふく風は朝鮮小説にて百五十回の長編なり、桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽邃とをかき給へり、又みづからも文に勉むる所なく、ひたすら趣向意匠をのみ

尊び給ふと見へたり、なれども林正元の智勇、香蘭の節操、青陽の苦節ともにいさゝかもそこなはれたる所なく、見るまゝに喜ぶべきは喜ばれ、歎くべきには涙こぼれにこぼれぬ。さるは編中の人物活動するにはあらで、我が心の奥にあやつるものあればなるべし、田中みのこぬしは學ふかゝらず識も又高からざる人なれど胡沙ふく風につきて批難し給ふ所あまた有し、そも當れる説にはあらざりけめど、とまれ完美の作にはあらざるべし、いでよしや、此小説うき世の捨ものにて人の爲には半文のあたひあらすともよし、我が爲生粹の友これを置て外に何かはあらん、孤燈かげほそく暗雨まどを打つ夜人しらぬおもひをこまやかに語りては、かかる所なくなげきもし悦もせんはうつせみのよにもとめて得がたき所ぞかし、此夜此書をひもとひて曉の鐘ひとり聞けり、引とめんぞでならなくにあかつきの別れかなしくものをこそおもへ、晝はしばし別れんにこそ。

萩の舎の發會は廿六日なり、ものうき事かさなればえ行かじともおもへりしを猶世の中にたちまじる身なりとおもひかへしてゆく、人は午後よりなれど例もかく午前より手傳ふ成けり、小石川に師のもとをとひて諸共に車つらねて行く、しばしあり

て田中ぬしも参られたり、うるさきものがたりに耳もふさがまほしきをかろうじて聞き過せば、やがて人なき處に我を呼するてみの子ぬしいとしめやかに師の上をかたる、例のことながらいと心ぐるし、夏子ぬし参られてよりのさまく其のお子ぬしより我にたのみの詞など、あれを聞くもこれを聞くも憂さ堪がたし、榊原、小笠原、水野、中牟田などの令姫たち花をかざりて今日を晴と出たちたるいと罪なしかし、上をよそふて花見哉と故人のさとりをかしかれど、獨うるはしきはうるはしきものなり、三宅ぬし参らる、星野天知子よりの書状文學界一號と共に送らる、筆墨料送られたるに返事書て給はれとははれてかく、我がことをつむじまがりの女史と言ひしとか雄次郎君たはむれにまことかと龍子ぬしに問ひ給ひしかば、いつもいてふがへしののらざることなければ其處分たすとて笑ひしとかや。

散會は六時成し、天知子よりの文はいとねんごろにて力まかせしかと我上ことくしげに察したるいとをかし、文學界にも若松、花圃、一葉の諸名媛とか書かれたる、實よりは名のすぐれたる世の中、誠の名姫の爲いと口をし、この夜早く臥したり。

廿七日 三枝君に文を出す、そは返金約に違ひしを詫びたるなり。ひる頃より雪よ

り出づ、萬感こゝに生じて散亂の心ことに静めがたし、我が雪の日をめづるはめづるにはあらでかなしむなりけり。かの火桶をはさみてものがたりのどかに手づから調理し賜はりしこの昔し、戀も悟もかの雪の日なればぞかし。

廿一日 この日も少し雪ふる、脳の痛みたえがたくして一日うち臥したり、芝より兄君の使ひとして道忠來る、久保木依頼の單物出來あがりしかば持参したるなり。野々宮君より書狀來る。

三月一日 晴天。腦のなやみ猶さりやらぬに日たくるまで朝いしたり、起出て後胡沙吹風後編少しよむ。

福島少佐遠征のあと判然せずといふ變報あり誠か否かいとあやふし。

昨夜澁谷ぬしを夢む。

京都山崎君より書狀あり。

二日 圖書館に書物見に行、産婆生にて稻垣しげと呼ぶ婦人にあふ、我隣家なる加藤なみ子が友なるよし、奇談あり、御伽婢子十冊斗よみて歸る。此夜久保木姉君來たる、ひし餅到來し、北海道關場えつ子君より文あり。

三日 晴天。久保木姉君金子かりに来る、山田武甫君の葬儀は一昨日成けり。此夜國子と共に十軒店に雑市を見る。

四日 小石川稽古を休む、午後より雨ふる、大工の長来る。

五日 晴天あたけし、鶯の初音聞えそめしもをかし。所どころの梅咲ぬらんかし。うもれ木の身にも流石に春のたよりはにくからぬかななどうちつぶやかれぬ、小説ひとつ松今日より筆とり初めんとす、大工のせがれ頼みごとありて来る、野々宮君に返事かく、芦澤芳太郎来る。

六日 早朝、地震す、風ふき出づいと寒し。奥田老人来る、同人を送りがてら本郷通りを散歩少して原稿紙かひ来る、野々宮菊子ぬしより又はがき来る、我が返事と行ちがひたるなるべし、久保木あそびに来る。小説著作に夜をふかして二時過る頃床に入りたり。

七日 晴天。七時に起出づ。河野大臣辭表を呈したるよし、内閣大臣某々の人々留任をしきりに進むるも断然の決心動かしがたきかも、自から官邸を引拂ひて今川小路の自宅に移轉されしとか、伊東書記官の權勢、伊藤總理の艶聞いとをかし、國會議員

狩野俣一郎君病歿の報あり、久保木姉君來り、大工のせがれ来る。蟬表のしんを持來りしなり。

午後新聞號外来る、河野文相さき、井上樞密これに替りしなり。猶山縣司法大臣辭表を呈したるやの風説もあり、英公使河瀬君後任たるべしなどありけり。

おもふ人の難をすくひ、又我が厄をのがれて、靈鷲の山月よるふかき所ふみしだく草葉の露にかへふたつ落ちてたづさへし文の名残りか斗うれしかりけん、いか斗かなしかりけん、されどつひの世を其人にかはりていさぎよき終りは本望成けんかし、はかなきにもひゆるしてしら露の

哀れ玉よと君みましかば

胡さ吹く風のうち香蘭をよめる、

うら山し霜に雪にも色かへで

おのれみどりの庭の姫松

林正元はわが日のものとの人と聞くに、

朝日さすわが敷島の山櫻

あはれか斗咲かせてしがな
八日 晴天、寒し。

九日 母君菊池君にまねかれ給ふ、東園翁五年祭なり。

十一日 夜號外來る、山縣司法大臣依願免官、樞密院議長に任せられ、農商務次官西村捨三君免官、文部次官久保田讓君おなじく、知事牧野伸顯君文部次官に任せられ、司法大臣は伊藤首相これをかねらるなりけり。

十二日 晴天。福島小佐浦鹽斯徳を去る五百里の地に無事着されたるよし電報ありといふ、いとめで度ことなりかし。日曜なれば芦澤芳太郎並に藤林芳藏來る、午後まで兩人とも遊ぶ、今宵國子と共に藥師の縁日そゝるありきす、夜に入りて失火あり、何方成けん。

我が家は細道一つ隔て上通りの商人どもの勝手とむかひ合居たり、されば口さなきものどもが常にいひかわすまなごといもいとよく聞ゆるに、今日しもとあることの序に華主先のものがりすとてふと言ひたることに國子耳といひれば、かの大人があたりのことにぞ似たる、主めきたる人二人三人あればいづれが夫なるや分らねど、

色しろくたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や何や知らずおもさしなどさしても美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言いひつるに、左なまがくしく商人なしかりそとて其まゝの價ひに買とりてくれたるはわかりし人成し、家は三崎町のはづれにて店がまへ立派なる葉茶屋なりといひ居たるよし、かの大人に違ひはあらしなど國子かたるに、忘れぬものを又さらにおもひ出ていと堪がたし。

くれ竹のよも君しらじふく風の
そよぐにつけてさわぐ心は
とある夕べかねの音を聞て、
まぢぬべきものともしらぬ中空に

など夕ぐれのかねの淋しき
十三日 晴天。早朝小石川より郵便あり、小笠原家に今日數よみの催しせんとするを是非に參らせ給へかしと成けり、障ることいもいと多かるに斷りのはがき出す、午後稻葉の小君參らる、哀なるもの語多かり、日没後山下直一君來る、早稻田文學四冊

持參、若澤に爲替のこと頼む、久保木新たく庵を持參す。

十四日 早朝灸治をなす、久保木姉君參らる。

十五日 曇る。灸治をなす、昨日より家のうちに金といふもの一錢もなし、母君これを苦しみて、姉君のもとより二十錢かり來る。

ありし玉章をくり返してみて、

くり返してみるに心はなぐさまで

涙おちそふ水ぐきのあと

この頃のこと少し、

一 酒田不敬事件無罪に成る。

一 平澤ひなの遺族に遺産うけ取るべきほどの近親なければ、二萬圓余の財産其菩提院に死者追福の爲として納めらる。

一 西郷従道君入閣、海軍大臣と成る、これを品川君知られざりしこと。

一 改進黨新聞上告事件 則 代言試験問題洩漏のこと、官吏侮辱罪を其理由なしとてなりしか棄却されたり。

むさしあぶみとはぬもうしとなげきても

中々つらき命成けり

老たる親の上をおもへばふかうの罪さがたけれど、

中々にしなぬいのちのくるしきは

うき人こふる心成けり

されど人の憂きにてあらですべて我心がらなれば、

つらからぬ人をば置てかたいとの

くるしやこゝろわれとみだるゝ

入る目のかたをながむればかの大人のあたりそことしのばれて、

うら山し夕ぐれひびくかねの音の

いたらぬ方もあらじとおもへば

十五日 午後廣瀬七重郎出京 訴訟事なり、此日小梅村吉田かとり子ぬしより文來る、哀なること多しこそこの梅見を思出ての歌あり、

くるとあくと思ひ出さぬ折ぞなき

ともに梅見しこそ其日を

おもふどち梅見くらしして植半の

おかけの空気がつかしぞおもふ

此ころとおもひしものをいと早も

はや一とせのめぐりきにけり

などいと多かり、これがかへし必らず出さんとおもふ、この人のうへをおもへば、女の身のはかなきこといとゞしられて、男もちたる後も心安からじ、はや五十にもちかき人の三人四人子などもあるを猶うたひめなどの花々しきかたに男の心うつろひぬれば身は巢守りにて音をのみなき暮らすらんよ、三界に家なしといにしへこそいひけれ、今のよとてもかゝる人の上時々ぞ聞ゆるかし。

十六日 早朝廣瀬七重郎歸縣、吉田ぬしのもとへ返し出す、うきふしもかなしきふ

しももらし給ふにつけて少しはみ心なくさむべきに折々は聞えおどろかし給へとて、

いざゝらばとも音になかん友千鳥

聲だにかよへうらの真砂路

かきやるまゝにいと哀なり。

廣瀬よりの便りに聞けば野尻ぬし妻むかえ給へりとなん、國子の心をおもひやるに我もかのの悲しさ堪がたし、さゝやかなる紙に小さく書きて見するをみれば「いにしへにためしも有とあきらめて夢のうきよをうらみしもせじ」

いと哀なるまゝに、

身にちかかためしも有るをくれ竹の

うきよとはしもうらむなよ君

又國子かく、

我が心しるべき君のなかりせば

うきよを捨つるすみ染の袖

我うち笑ひて、

心から衣のうらの玉も有るを

すみ染とまで何おもふらん

夜ふくるまで國子ねむりもやらぬに、

いでや君などは寐ぬぞぬば玉の

よは夢ぞかしよは夢ぞかし

ながむればこひしき人の戀しきに

くもらばくもれ秋のよの月

よもぎふにつ記

(二十六年三月)

十七日 田中ぬしのもとに文を出す、十九日の發會に不參の断りなり、やがて返事來る、此七日より三田ぬしのもとに講義聞きに參り給ふよし、さまざま語ることも多しと云ふは師の君のことにつきてなめり、あなうるさの世の中や。

十八日 より机を北まどのもとにうつす、風いとすさまし。

十九日 晴。例の如し。

廿日 北航端艇墨田川に發程す、帝國大學、高等中學、高等商業、商船學校、三菱社、郵船會社、學習院、其他の諸學校數十校残らず送る、下谷廣徳寺邊、淺草並木通あたりより人々絶えず、吾妻橋上などは往來ふつに絶えたるよし、さまざま聞けること多けれどさのみはとてかゝす。

廿一日 午後文學界の平田といふ人訪ひ來たれり、國子の取次に出たるを呼びて、とし寄りかと問へば否まだいと若き人なりといふ、やましけれど逢ふ、高等中學の生徒なるよし、平田喜一とて日本橋伊勢町の繪の具商の息子なりとか、年は二十一とい

ふ、何用ありて來給ひしともをいろにいひがたければ物がたり少しするに、詞かず多からず、うちしめりて心ふかけなれど、さりとて人からの愛敬ありなつかしき様したり、我が小説雪の日文學界の二號にのすべき等成りしが寄稿のいと多かりしかば三號の方に廻したり、さ思し給へなどいふは、彼の編輯など受持つ人ならんと思ひ寄りぬ花の頃までに何か新著あらまほしと乞ふに、もしつゝること出来なばとこたふ、花圃ぬしは二號に何か出し給ひしやと問へば、出し給へり、筆のすさびとて和歌のことにつきて陳へ給ふ處ありき、君のもとにはいまだ奉らざりしやといふに、さつし一號を拜見したるのみといへば、さらば直に送り参らせん、花圃君は此ごろしきりに女學雜誌に筆ふるひ給ふなり、多くはほんやくものなれど物かく筆の前かたよりはいたくかはり給ひし様なりなどいふ、少し口ほどけて今の世文士のこと文學の有さまなどかたる、幸田露伴をいたくしたひで對どころ、風流佛などの身にしむよしと語てほとく涙もさしぐむ斗り、幽玄微妙のさかいを願ふもの、如し、西行、兼好、蕉翁などの異人同心なるをいひ、つれづれ草のさるふしく、山家集のあれこれの歌、かたり出るまゝに我も同じ心に詞かず多く成りて、はじめ逢にけん人とも思はず、君も露伴は

好み給ふなるべし、君が埋木をこそ見参らせしより大方はをし斗りてなんといふに、我もうち笑ひて、男の御方々が見給はんに我がやうなるものゝかきたるなどさこそかたはらいたしとも御覽すらめ、誠に露伴子が本心はしらす、見る目は我が心なれば其かたはしを見とめておのが心に引當てつゝめでまどふや何やしらす、今の世の作家のうち幸田ぬしこそいと嬉しき人なれ、其人は見知り給ふやと問へば、否露伴には逢ひしこともあらず、其弟の成友と呼ぶが我が高等中學の生徒にて、これは相しれる中なりといふ、高等中學と言へば某々の大學に入ぬべきかけ橋なり、しかるべき人々さぞ多からんを、睦み給ふ中にはいかなるかおはします御もの語をかしからん、うら山しさよとほゝ笑みて問へば、否友と呼ばんは一人も非らず、學業才能などは教ゆるにしたがひて習ひとるものなれば口をしからぬほどなるも多かり、大方は同じいがたの内を作り出したるものゝ形の如く、おのづからの氣がいなどは求むるとも見出しがたし、我れ早くより父をうしなひてうき世の涙をくみ初し身の、もの笑みがちに心淺けき貴公子輩の友となりがたきはさるかたに推し給へかして打うめくに、さは御父君おはしまさぬ御身なりな、我もおなじく父におくれ兄におくれて浮世のちまたに迷ふ

身ぞかし、中學には今年にて幾年にかとへば三年なり、されども一年は數學におく
れを取りしかば、今年といふ斗なり、講師もおもしろからず學友もうれしからず。
なべてうき世のはかなきをかんにて日夜の友をつれづれの草紙に求むれば、いよく
學校などの厭はしく、知りつゝ人よりはおくるゝぞかし、この程まではかしの寄宿
舎に起ふししたれど、又家に呼かへされて風塵に立まじりつゝもだえくるしむことた
えがたき身なり、君も父君おはしますと聞けば同じく浮世にほだされ給ひてつな
る處多かるべしと、やうく人も我も涙わかるに成りぬ、文學界一號に岩本君なるべし
禿木とかいへる名にて兼好の一章を書きたる我れも國子もそゝる胸をさゝれて、こと
の筋にも文章にもいたく感じ合へりしを、今又この人のかく語り來て、まだうら若き
人ともなく悲哀の情をよくも汲知りたる哀れにも悲しく、いでや其うき世をのがれな
んことよもとより其もとにかへるのにて、邪正は一如善惡は不二とかや、されば十
萬億の道も去此不遠ぞかし、墨染の衣にかしらそり丸めしのみが脱俗ならば、もたゆ
る法なく苦しむには及ばざらまし、苦惱は悟道のしをりにして煩悩則ち菩提にこそ、
仰せ給ふ兼行法師とて凡夫の時は凡夫成し、今高等中學を退き給ふとも悟道これに

依りて了し給ふにも非ざるべし、猶よく戦ひ給てこそと少し生ざかしげにいへば、し
か星野君もの給ひて我が退學の志を止め給ふなり、誠にかの兼好も四十二の曉まで
は心清く此世をはなれかねしと見えたりとて打やすみつゝもの歎かしき體、涙胸のう
ちにたゝえて心のもだえ如何ならんかし、もの語今のよの女學の上に復りて、さしも
二人三人女文學者と呼ぶ人あれど大方は西洋の口眞似なるぞ口をしき、我文學界は女
流文學者の日本思想をもて長せしめんとするを雨夜の星といと稀なりかし、はじめよ
り文學にと名のりあげて志さす人のまこと文學に花さかするぞすくなき、思ふにもあ
まり、しのぶにもたえずして、文に成り章に成り、しかしてこそ世をも人をも動かす
なれ、明治女學校などに文學思想をやしなひ初めしと見ゆれど、筆とりて物いふ人な
どの出來んは近々の事には非ざるべしとて、天知子のこと、透谷子のこと、岩本君の
事さへさまじくにかたる、宇宙を宿とする古藤菴のこと、殘月、雲峯のさまじく、いん
文の成行、和歌の姿、今の世の歌人どもの人からにつきてももの語あり、一とせ松の
門みさ子が門に遊びて驚きたること、中々につきがたし、都の花には其後御作ありし
やと問はるゝに、百一號といへるにをかしからぬものせたるよしかたる、いかで我

家をも訪ひ給はずや、星野君のもとにも是非参り給へといふ、男に交はらじとはかねてよりの定めなるに、さりとてしかもいひがたき物ゆゑ、學淺くすること少なくて人にまみえんはいたづらに身の愚かさを顯はすのみにて何の甲斐もなくこそあらめとて打笑ひ居れば、いかでかざる事あらん是非とはせ給へ、我れは又これより折々参り寄らんにゆるし給へかしてやう／＼日のくれなんとする頃たつ、菊地の奥方など此間に來給ひて、いとろうがわしきほどの物がたりなれどかたみに盡さぬ事多し、丈たかやかなる人の中學の制服つけたる、さしも身のまはりのうるはしともなきは誠いひけん様に貴公子の友にはあらで、うき世いか斗うら淋かるべき、又こそとて別れぬ。

廿二日 早朝文あり、歸るさに都の花をもとめて燈下にひもときたるよし、香山家の姫の心を哀れとみしとか、結末の文をいたくたゞえ給へり、道に志ざすこといと深くして風塵におそはれつゝくるしみもだゆるよしを、かへす／＼歎き、露伴がお妙様ほどの人に逢はばなぶり殺されんも知れぬほどのおくしたる身なれど、すねて優しく二つ三つ姉なる人のしたはしく思ひし折から、こそ秋もれ木に君あるを知り、今又文學界の縁にてま見ゆるを得るはおのづから行く方ありやと覺ゆるなどなつかしく

書きたり、いでやかたみに親なき身ぞかし、同じ心に哀れと覺して共に至道に盡くすをゆるし給へなど、さまざまあり、名を見れば禿木とぞしたゞめける、さてはかの吉田兼好を草したる人なりな、哀れ知らざりしことよとて國子にも見する、年もいとわか／＼おさなじみたる人のいかにしてかくまでに悲戀の心をさぐり知りけん、歌人の居ながらにして名所をしるにひとしく、踏みすして情の奥ふかくたどり給ふにや、さはいへどかゝる人こそ危ふき物なれ、月花にそゞ涙のあまりは玉露と成りて文章ににははせ、しほりと成りて悟りの道にしるべせんはいとよしかし、涙に迷ひて涙の人に成なんいと淺ましや、こは人の上のみならず我が上にもよくせずば來たりぬべき事なり、目に見えぬかたきは無常のみならず、すべて形なきこそものはいみじけれとおもふ、文學界二號手もとにありけるをとて諸共に送られぬ、信も深き人なりかし。

廿四日 小石川の師君に文を出す、明日の會に不參の斷り也、椛町裁判所より廣瀬七重郎呼出狀來る、直に郵便にて山梨に送る、期日は四月廿日なりけり。

廿五日 晴天ぬぐひたる様なり。我が誕生日なればとて赤のめしなどたく、姉君を招く、芦澤來る、何ごともしなし。

廿六日 晴、早朝札幌關場君より國子のもとに文あり。今朝台門指月鈔をよむ、今夕本郷の通りを逍遙す、今夜十二時ふしどに入る。

廿七日 晴天。一日著作に従事す。

廿八日 晴れ。西村のおつねどの来る、これを送りがてら小石川の傳通院大黒天に參詣す、今日は甲子なればなり。此夜神田佐久間町より失火風はげしければ焼けぬべき模様なり。

廿九日 起出てみるに春雨少しうちそゞぎて軒の梅がかいと高し。母君火事見舞に參り給ふ、藤堂邸より失火、二長町の方へ延焼、市村座も焼失したりといふ、母君歸宅の後雨いや降にふる。今日のよみ賣新聞川越大火義捐金の部に日本橋いせ町繪の具問屋平田喜十郎とあるはかの禿木君のことなめり、此頃の流行なれど猶慈悲こそ嬉しさものなれ、此日午後伊東夏子ぬし來訪、英和學校にてビヤノに合せてうたふべき彼の國のうた是れのに詞を譯さんとするに、五七に斗ならひたる方八六の調へのいと六つかしく又意味をもよく取がたければ、あはれよき智慧かし給へとてなり、諸共にしばし案じてさは斯くなさんとて、をかしくもと、

たのしきくにあり 老せぬたみ

とこしへのはるに かれせぬはな

日はつねに照りて うきやみもなし

とみれば隔つる 死出のながれ

其 二

ときはの野へは かわのあなた

ヨルダンもカナをぞ へだてたりし

モッセのごとたちて 御くにをみば

いさみてこゆべし さかまくなみ

すべてほんやくの難きは我れと彼れとならはしのことなりたる故なめり、猶原文を残りなくかみ碎きて更に我が詞にていひ出さんにはしかず、かゝる短時間にておもふこと得よくも盡しがたきを其うちに又參らせ給はずや、もろ共にこれが研究せまはしきをなどかたる、雑談いろく、夕飯を出す、日没少し前に歸宅しけり。此夜十二

時過るまで工夫に更したり。

此頃のこと少し

山梨縣知事中山君非職になる。

田沼健君同知事に轉任。

きりすと教徒子ころしの件重禁錮三年づつと申渡さる。

卅日 晴天、早朝國子と少し物がたりす、我家貧困日ましにせまりて今は何方より

金かり出すべき道もなし、母君は只せまりにせまりて我が著作の速かならんことぞの

給ひ、いでやいかに力を盡すとも世に買人なき時はいかはせん、こゝよりもかしこ

よりも只もとめにもとむるを兎角引しるひて世に出さぬこそあやしけれ、誰もはじめ

より名文名作のあるべきならねば、よしいさゝか心に入らぬふし有ともとはしのばね

ばならずかし、たとへ十年の後に高名の道ありともそれまでの衣食なくてやは過す、

かゝる詫しき目見んよりはよし十圓取りの小官吏にまれ、かた襷はなさぬ小商人にま

れ身のよすが定まれば憂き事はしらし、などの給ひなすこといと多し、不孝の子にな

らじとは日夜におもへど、猶かゝるみ心にも入らずしてかくわづらはしげにの給ふこ

と當の様なり、あなもたいなのことや。

大學總長加藤弘之君免せられ、濱尾新君任官、

春雨は軒の玉水くりかへし

ふりにしかたを又しのべとや

あなくるしつらくもあらぬ人ゆるに

あらまほしさのかすそはりつゝ、

中／＼に戀とはいはじかりごもの

みだれ心はわれからにして

萩の葉のそよともいはですぐるかな

わすれやしけん空にへぬれば

今日よりよみ賣新聞とりはじむ。

四月一日 上野君清次君同道にて參らる、日没少し前歸宅。此夜本郷通りに遊びて

文學界三號發兌に成しをしる。

二日 芦澤來る。終日雨なり、夜ふけてより車軸をながす様にふる。此日國子吉田

君に行、悲話縷々。

三日 空晴れに晴れていと心地よし、母君安達に趣き給ふ、久保木來訪、此夜伊勢屋がもとにはしる。

忘れにけり、甲州廣瀬のもとに裁判事件の書類を三月三十一日さし出す。

五日 早朝夏子ぬしより文あり、曉月夜のことにつて評あり、此夜荻野君のもとをとふ、松浦道子が艶聞を聞く、此夜少しく雨ふる。秀太郎青山より歸る。

六日 夜よりかけて雪少しふる。早朝廣瀬より落手の返事來る、雨晴れすいと寒し。星野君よりはがき來る、文學界三號に出したる小説好評なるよし、五號か六號に執筆あり度しとたのみなりける。

桃も咲きぬ彼岸もそこ、ほころびぬ、上野も澄田も此次の日曜までは持つまじなど聞くこそいとくちをしけれ、此事なし終りて後花見のあそびせんなどまめやかに思ひ定めたる事あるをや、折しも俄かに空寒く人はそ、ろ詫あへるを、あはれ七日がほどかくてもあらなんと願ふもあやし。

何となく祝にむかふ手ならひよ

おもふことのみまづかゝれつゝ

しらじかし花に木づたふ鶯の

しの音に鳴てもものおもふとも

しられぬもよしやあし間のうもれ水

ながれてあはん中ならなくに

うら山し夕ぐれひくかねの音の

いたらぬかたもあらじとおもへば

春にあふかき根のさくら中々に

花めかしきがやましかりけり

春雨のふりにし中よわか草の

またもえ出てものをこそおもへ

春雨はふりにふれどもかれ柳

いかにはずすべきもゆるかたなし

いたづらにもゆる斗をわか草の

つみはやされんものとしもなく
 こぞの春は花のもとに至戀の人となり、
 ことしの春は恋の音に至戀の人をなぐさむ、
 春やあらぬわが身ひとつは花鳥の

あらぬ色音にまたなかれつゝ

もゝのさかりに人の名をおもひて、

もゝの花さきてうつろふ池水の

ふかくも君をしのお頃哉

よもぎふ日記 (四月)

四月七日 晴天。午後狂風吹おこり、大雨しきりに來りていと物すごし、一時にてやむ。

八日 晴天。山下直一君來る、數時間あそびて歸る、此日母君菊地うちが寺參りし給ふ。

九日 晴天。日曜なれば芹澤來る。三枝君來訪、かりたる金のことにつきてなり、さはれことぐしき催促なども無くして歸る、久保木姉君來る、長十郎の風邪にてなやみ居るよしを語る、夕方直母君と共に湯島あたり散歩、此夜一時過るまで燈下にあ

り。
 十日 いたく朝ねしたり、起出でみるに雨、いとあたゝかし、午前のうちに母君久保木及び菊地君に風邪の見舞をなし給ふ。高等中學の今日より稽古はじまりぬと聞くに其序を以て禿木君や訪ひ給ふと心にまちしが、あらずして止にき 今日一日雨に送りたり。

庭のやま吹を折て花がめにさすとて、

山ぶきとみのなき宿と春雨の

ふりはへてしも人のとはぬか

久しう何方にもとはで、

くれ竹の友がきいかに荒れぬらん

ふしの間どほに成れるころかな

花のさかりも今日二日と聞くに、

春雨はたもとにばかりかゝる哉

いざ花にともいひがたきころ

なみ六茶屋の今日より開かれぬと聞くは、

隅田川花に斗とおもひしを

ふでに狂へる人も有けり

十二日 小石川へゆく。

十三日 此夜吉原より失火、揚屋町。

十四日 圖書館。此夜稻葉君吉報を聞く。

十五日 藤本へゆく、半井君の消息を聞き得たり、此夜おこう様参らる、稻葉君の奉職されたるにつきて入用なる衣類などの間に合ひがたきを西村君にかりたしとてその取なし母君にたのまんとてなり、この日國子と共に根津より天王寺迄遊ぶ。

十六日 家の門を直さんとて大工来る、俄に雨に成しかば其事にかゝらずして歸る、午後より晴たり。

十七日 晴れなれど大工来らず、母君午後より上野東照宮参詣、安達君、大工稻垣長太郎草もちを持参す、奥田老人伊勢より歸京なしたるよしにて來訪、歸りを送りて國子と共に三丁目まで行く、大學の前より安部邸をぬけて歸宅、此夜柳原邸より東照宮祭典の御料理を送らる、我が一兩度小石川の稽古をかきにかば病氣にてはあらずやとて常姫君の案じ給ふよしより消息あり、使ひ歸る、此日吉原角ゑびの主人宮澤平吉が葬儀谷中であり、岩崎以來のにぎはひと見し人語りぬ。

我がすむ家のもととは中島何某とて文部省に奉職する人のすめるなり、しばぐぬす人の入りていとけうなる家よとて引移りぬる成しが、此すむ家のとなりに堀川と呼ぶ

測量技師のかねてよりありし、年若き夫妻にていとかすかに世を送り居ると見えしが、これこそはぬす人成けれ、此ごろぞとらへられてひとやに趣きしよし、夫よりやがて此所をうつりて如何なしけん、かき一重隔てけるとなりぬす人ありとは誰しもしるよしなく、多くの人をうたがひよをうらみて氣も狂ほしきまでに見えしかの中島がつまに似し人うきよの中にすくなからじ。

十八日 快晴 家のふしんにかゝる、山下次郎君熊ヶ谷より参られたるよしにて來訪、午飯を出す、我うらなる人の子ども四ツ斗なるが三人そろひて行衛しれす成たりとて人々もとめさはぐ、田町のはづれに遊び居たりとてやゝしばらくして見出しにけり、そのほどの親達か苦おもふべし、此夜邦子と互にもみ療治なし合ひて早くふしたり。

十九日 晴天なり。關根只誠翁昨十八日、死去せられたるよし、新聞に見えたり、是非とぶらはまほしきを、香花の料いかにして備ふべき、家は只貧せまりにせまりて、米しろだに得やすからぬを、邦子は我がこのまゝに衣をだに持ゆかば夫ほどのこと成り難きにも非らじ、いかでくとうながす、姉様は物に決断のうとくしてぐすぐ

すとせさせ給ふこそくちをしけれ、何方ともさだめ給へとしきりにせむ、母君はいふまでもなし、我もしかおもふを、きたる衣とても大方はうり盡しぬる今日、この上うしなはんはいと心ぐるし、ともらはまほしきはさる事ながら、明日の米にもことかくなるを人の上にかゝづらふべき身にもあらず、必竟は夏子の活智なくして金を得る道なければぞかし、かく有らばはてもしれぬをなどいこと多くのしり給ふは、我が優柔を邦子とがめてしきりにせむ、

我こそはだるま大師に成にけれ

とぶらはんにもあしなしにして

むかしくもろこしの莊子とかやいひし人はさる人の葬儀のむしろにつどふ人多きをみて、このうせにし人までうとみけるとや、一休和尚がされかうべの繪ものがたりをみてもさる事ぞかしとは時のやむを得ねばなるべし、やがて國子とものがたりて西村に金かりにゆく、母君よりのいひつけといひもてゆく、壹圓かりて來たりぬ。芦澤來る、演習として明日より十日間ならし野に趣くよし、午後より母君は關根君に参り給ふ、今宵入湯。

廿日 晴天。午前母君奥田老人を訪ふ、午後廣瀬七重郎出京、裁判事件につきてなり、本日直に歸縣なすよしなり。此夜母君と共に散歩なす、臥したるは十二時成けん、大雨に成ぬ。

廿一日 雨天。わが心より出たるかたちなればなどか忘れんとして忘るゝにかたき事やあると、ひたすらに念じて忘れんとするほど、唯身にせまりくるがごとおもかげまのあたりにみえて得堪ゆべくも非ず、ふと打みじろげばかの薬の香のさとかをる心地しておもひやるこゝろや常に行かよふとそゝろおそろしきまでおもひしみにたる心なり、かの六條の御息所のあさましきをおもふにげに偽りともいはれざりける、おもひやる心かよはひみてもこん

さてもやしはしなぐさめぬべく

廿二日 晴天。小石川稽古に行く、道すがら半井君を訪ふ、小石川は例のごとくなり、午後田邊君子君來訪、龍子ぬし懐妊せられたるよし、師之君に風聴の爲なり。

廿三日 晴天。芦澤よりならし野着の報來る、此夜龍子ぬしより文學界三號送達、稻葉のお鏡どの參らる。

廿四日 晴ながら風ひや、かにて心地わるし、甲府伊庭隆次君より書狀來る、岩手より野々宮君書狀來る、此夜各返事をしたむ、十一時過るより雷雨天地をかへすが如くものすさまじき事いふべくも非らず、やがて雹降り出づ、雨戸に小石を打つくるが如し、十五分斗にて雹やむ、雹の大きさわたり三分位なるもあり、川の様なる雨水の中にざくざくとたいよひてすくひ取れば一時に一合も握れぬべし、我がまだしらぬ事なりき。

廿五日 早朝は晴れたる様なりしが六時過るより空たゞくらく成に成て、雷雨昨夜にかはらずしばしも戸を明がたし、雹も少し交りしが今日はさまでにも非ず、運びさり運びくる雨のおといものすごし、雷はたゞ頭上に落かゝるかと斗むねにひびきていと恐ろし、文机の上に香たきなどして母君は桑原くわ原とぞの給ふめる、さしこめたる雨戸を一寸斗開きて邦子はしづかにつれく草よむなるべし、やゝ静まりぬ、我れは文机に寄りてとさまかうさまにものおもふほどかしらたゞなやみになやみて、雷雨のおそろしきも何も耳に入らず、魂何方のさとにさそひ行かるらん 一時間斗夢の様成りぬ、ふと覺ぬる時は雨戸もる日かげいとあざやかに成りてさしも空はなごり

なく晴わたりしなり、午後より又少し雨そゞぎしがやがて風に成ぬ、かしらのいと
やましきに胸さへもたせまりにせまりてくるほしければふすまかつぎて打ふしたる
まゝ日くるゝもしらず、八時過るまで寝にけり。

廿六日 晴天。後屋敷村佐久間より書状来る、母君安達に見舞に趣き給ふ、姉君來
訪、夕方より邦と共に散歩なす、田町より丸山にのぼり、阿部邸より本多邸をへて本
郷の通りに勘工場二ヶ所みる、十一時半寝る。

廿七日 晴天。書を禿木君に寄す。

廿八日 夜母君と共に丸山運動。

廿九日 早朝小石川より書状来る、今日の稽古是非参られたしとなり、支度して
行く、伊東君も参らる、來會者三十餘名なりき、片山君、山名君吉田君などのめづら
しき人々會す、芦澤三雪君白井たれとやら入門の人を伴はる、太田竹子君齋藤それが
しの妻に成らる、それも来る、西片町に住居するよし、我が家をも訪はんなどいふ、
今宵は鍋島家に夜會あるよしにて師君趣き給はんとす、我と田中ぬしとは人々におく
れてかへる、此夜母君いな葉氏を訪ふ。

卅日 晴天。芦澤ならしのより歸營せしよしにて来る、久保木來訪、文學界四号來
る、午後五時より根津神社境内につゝじを尋ね、上野の岡に藤を見る、何れもいまだ
十分ならず、但し新緑の木かげはいとうるはし、日没少しすぎ歸宅、稻がき来る、お鏡
どのも参らる、母君同人と共に西村へ趣き給ふ、十一時ごろ歸宅。

五月一日 晴天。今日は淺草觀音の開帳中廻向にて天童供養あるよし、母君に参り
給へなどす、西村の母來たるべきよしひつれば留守にせんもいかいなどの給ひ
しが、午後まで訪ひ來べき様子みえぬに一時ごろより趣き給ふ、久保木來訪、母君は
六時ごろ歸宅し給へり、此夜お鏡どの衣類もらひに来る、邦子がゆかたをやる。

二日 晴天。望月のつま利子持参、菊池の奥方参らる、母君と共に摩利子天もうでに
趣く、家主西本來る、かきを結び直さんことのおくれたるを言ひになり、此月も伊勢
屋がもとはしらねば事たらず、小袖四つ、羽織二つ、一風呂敷につゝみて母君と我
と持ゆかんとす。

長持に春かくれ行ころもがへ

とかや誰やらが句を聞き事あり、其風流には似ざるもをかし、

藏のうちはるかくれ行ころもがへ
ことのしらべや聞ゆべく、

秋しのやと山のみねの朝ぎりに

うすれてのこる有明の月

いといなほあくがれよとやつらからぬ

けしき斗を人のみすらん

木の葉ちるにはの月かげよひくくに

まさりてものをおもふ頃かな

圓 珠 庵

我こそはあしの下をれ一ふしの

ありとも誰れかありとしるべき

もしほやく難波のうらの八重がすみ

一重はあまのしわざ成けり

しのぶぐさ (二十六年四月)

十二日 小石川に師君をとひ、田中君も訪ふ、ものがたり種々、いづれもかしらい
たき事なり、三時頃歸宅、雨降り出づ。

十三日 夜母君更るまでいさめ給ふ事多し、ふ孝の子に成らじとはつねの願ひな
から、折ふし御心にかなひ難きふしの有こそはかなしけれ。

十四日 小説の事につきて藤陰隠士を訪は、やとせしかど、早朝いと憂はしきこと
ありてものいふほどに時の移りぬれば得行かず、圖書館に行く、上野は今日は花ざか
りにて思ひなき人の酔しれたるさまいと興ありげなり、歸路安達君の病ひをとふ、こ
ゝに母君参り合されてひとしく歸る。

十五日 早朝さるかく町に藤陰を訪ふ、都の花明日發行日なるをいまだ製本出来あ
がらず、これより築地に催促に趣かんとする所なりといふ、十分斗ものがたる、さが
の屋の狂氣せしよし世にいふは偽りなること、伊豫の花園女史のこと並に花園女史よ
り長編の小説出版をたのまれたれど取がたくして断りたり、交々かたる、何か歌の入

たる小説出来給は、得させ給へなどいふ、歸路半井君の消息を聞きたり、打つゝきやむとしもなくなやみ渡り給ひしが、此ほどよりふとうちも、出来たる塵物の俄に甚だしく成て、本郷の親類がり趣き給ひしまゝ立歸ること能はず、かしこにて療治中なりといふ、聞くまゝに胸つとふさがる、去歲の此頃は、いみじうなやみ給ひて我日ごとにとひ参らせぬる頃とおりに引かへ、文をだに参らせがたき今のいかにせば御あたりとひ寄らるべき、中々に知らずばしらす、聞そめぬることくやしうさへ成りぬ、歸宅の後これを母君に語り、いかで一度のとぶらひをゆるし給へとこふに、更に聞き給ふべきにも非らず、さらばせんし文をだにとせちにいへど、いづれもく聞き入れ給はず、こは我が上をおぼし給ふによりてながら、身にあやまちすべきわれにもあらぬをどうかうはつらうの給はずらん、かしこにもいかにおぼしなやみてよの中うらめしうみだるゝふし多くおはすらんなど思ひやるまゝに、いと堪がたし、詫てこれを邦子にはかるに、思ひやりなきにしもあらぬ人は諸共に涙さへさしぐみて我が爲にかくとはかる、わがはらからのあやしうよの中になりたる宿世にてはかなきことにも思ふなる、人の上にて見んには如何かたはら痛からぬ、おさなきよりおもふこと

人にことにていさゝかも世の中の道といふことふみ違へしよし、人めにはいかに見んとも、我れは空にます神にこそとて、千よろづのこがねにも、しき渡すにしきにも心をかけずして過し來ぬるものか、はかなう世にも人にもうとまれぬべき人の、さりと知らぬにしもあらで猶なんわすれがたき、邦子もおなじことあるまじきおもひにくるしむ成けり、されどもかたみによのつねのいろめかしき方はおもひかけぬ事にてたゞ隔てなき心のかはるまじきを願ひ、かくなやましき事ある折ふしなど心の限りの誠をあらはしてんのねがひぞかし、月花の折々に心をかはし、文にもまのあたりにもをかしき事いひ交しなどの嬉しきにもあらずかし、おなじうはもろ共に涙を、がまほしきを、我とおなじき人しなれば大空のみにわがおもふなるべし、我がかくおもふ心を人はしらす只大方の戀と見てなまおこめかしうもて遊びがほに思ふらんもしらす、そは夫ぞかし、笑はれなんもよし、そしられなんもよし、我が戀の神はさるいさゝかなるまさなごにか、つらひて圓滿をかくことを惜しみ給へばなり、もとより戀に圓滿なし、圓滿のなきならねども人二人に分ちてはまどかなるべき道理なければ、その人といふ文字は只捨てにすてつ、天地にみちたる戀てふものゝ其かたはしを顯は

し初たるはその人をおもふに猶我が恩ある人をおもふに似てそのもとの忘れがたければかくもおもひなやむ成りとは、折ふし定かにさだめたる我が哲理ながら、さし當りては猶よのつねの戀めかしく逢みまほしさなどの時々にしのみがたきぞかし、あはれく書きつゝくるとも得やはおもふことのへ盡くすべきかは、只よにをかしくあやしくのどかにやはらかに悲しくおもしろきものは戀とこそ言はめ。

まぢし花も青葉に成ぬるときくに、

人の上もかくこそ有けれ大かたの

まつははかなきものとしらなん

みちのくなる友の花の頃久しくおと

せざりければことさらにうらみ聞えんもなめしけれど、

春がすみ立隔てゝもみゆる哉

いはての山の花や咲けん

まふ蝶の袖のうかれ給ふはことほりながら、都の花をいかにとだにの給はぬも情なくこそ、

都のはるはいかにとだにの給はせぬもことほりながら、角田飛鳥の花の爲いとくちをしようこそ。

道もせに咲く花のなかばはつちに敷きて、雪の中ゆくなどはかゝるをいふにや、青葉に成ぬる梢、わかやかにもえ出たる小草など景色をかきわたりにうしかふ家のひろやかなるなどもみゆ、田町よりの坂をのぼれば、かの馬琴が八犬傳に丸塚山とかきつる濱路が最期の場所めの前にかふ心地して、遠からぬ傳道院の森、小石川の町々只こゝもとにみゆるもをかし、おもふことなからましかばいか斗をかしからんと思ふも我が心からのつれなきぞかし、道ゆく人も我が面て守るらん様に覺えて、只相しれる人に逢はじと斗いそぐ、かの家には思ひかけぬ事と只あきれにあきるゝものから、人々うれしげにもてなざるゝこといとうれし、かの人も昨日今日はやゝこゝちよき方にてなど起きかへりつゝかたる、いとこなる人の薬すゝむるとて枕邊にありしが、さしも久しく音せざり給ひしな、御かはりとも侍らざりしや、つねに御噂なん申暮して一昨日もさなり御うへ申出し候ひしことゝ言へば、いと多かる薬を一口のみておう

わさはつねに申ことに侍りとして、何となくほゝるむ、枕邊の机にいと大きな花がめに
 桜山吹色々に折ませてとほき野山をあさりがたき心ゆかしにかくはといふ、誰れも
 花のさしかた心得るものもなく、うらなる園の花を有にまかせて折もて来てかく亂雑
 なるを笑はせ給へとていとこなる人の耻かしげにいふもをかし、さまざまの人の句な
 ど様のもの唐紙の長やかなるに書きて其わたりの壁どもみえぬほどに下げたり、かの
 人はほゝるみつゝ紙を取だせぬ、硯みづからをしりて、いとなめしけれど御舊詠
 にまれ何にまれ一二首得させ給へ、使ひにてねがはんの心成しが、すなほに書かせ給
 ふまじきを知れば心におもひてとゞめつ、今日おもひよらず訪はせ給ひしは我が願
 ひのとゞきしにこそは、いかで書かせ給ひてと、毛せん出させ、猶紙さらせなとす、
 晴れがましや家に歸りてこそ、かゝる御紙どもならでつねの半紙などならばとわぶれ
 ど聞かへくも非ず、見参らするまゝに心もすがくしく成ぬべくなん、人だすけにこ
 そなどいと多くいひつゝけ給ふ、いとこなる人もせちにこひて、病める人の願ひに侍
 ればいかで一二首をといふ、今はしも甲斐なくて、二首斗かく、いとわろき成り、こ
 れは反古に給はりて更にあらためてもて参らん、ゆるし給へといへば、さらばこなた

より紙を持たせて参らすべし、御引かへの時にはかならず返上なすべきを、それまで
 は得ことと笑ひて取り給ひつ、あとにて笑はせ給はんといへば、こはけしからず、た
 れにも見することには侍らず、朝夕にながめて身のたのしみ……………

ろんどの女すり。

さる老紳士汽車より下り、停車場を出んとする時、一少美人あはたしく来り、我
 が父上様よくぞ來給ひしとて其くびに抱きつきて口すゝりなしぬ、老紳士は何思ひけ
 ん、静かにそびらに手を廻していただきしめしに、かの女はしばく紳士の面を見て、
 こは何とせんあまりにいとよく似給ひしから、ふと我が父にまがひ参らせたり、ゆる
 し給へとて振はらはんとす、紳士はこれをしばしもゆるめず、否な我は汝の父なり、
 おさなき時迷子になし、今も猶尋ぬる我子は汝よ、警官の來らんまでは放さじとて抱
 きたり、誠はこの女のすりなること見とめければ成りとか、何時の間にもすりけんかの
 紳士二三品……………

蓬生日記 (二十六年五月)

一 束

母君が浅草の開帳に参り給ひしは一日成りき、中廻向にて天童供養などのいとにぎはうしき日なればにや、さしもの廣場にきりをたつべきひまもなきまで人々居りて、本堂ちかくは老人などの近よるべきにもあらず、しゐて参らんとすれば、警官などのおごそかに守りたるが、あやふし怪我もぞするなど制すめり、折角にまうでたるものから、わに口とるにならさで歸り來給へるよし、奥山の興行ものなどいとかしげなるが多かりしかど、そが中に鹿兒島戦争の生人形みて歸りしとの給へるもをかし、すべていまだ見ぬにぎはうしきと語り給ひぬ。

一 小林好愛君本郷區の區會議員に成けるよし。

一 ある夜邦子の物がたりけるは、日々おもふことの同じからずして、一日の中一時の間にもさまざまのおもひ湧き出でくるがいと佗しければ、いかで此心たゞさばやとて常に居る窓の障子に其時々はりをさしてしとしけるに、一間斗のほどは時の

間に穴斗に成りぬ、更にさしはじめたるに處もはや残り少なになれり、しりつゝたださんとするにすらかくの如し、何事もおもひたどらず無意に此日を送らばいかにあやまちも多かるべきにか、いとあやふき事といひけり。

一 文字こそ人の心をあらはすものなれ、同じ師のもとにおなじき手本をならひたるが中にさてかれこれひとしきは少なかりけり、花圃女史などにはひやかに愛敬ありてしかも老筆めきたる、みる人かたには師にもまさりてなどいふめるは、おのづから家の筋を引きたるにて他人の及ぶべきにあらずといへど、猶よくみるにそれさのみにもあらず、猶心よりこそと譽ゆれ、あながち歌にもあらず、洒落にもあらず、角ある手に干蔭をいとよくならひ取りたりとは誰れもみるべけれど、その中に一ふし才氣のあふれぬるこそかの人の本性みえて、愚直質朴などかけてもおもふべきにはあらず、伊東の夏女も手はいとよく習ひ取たりと見ゆれど、猶やはくしきかたに寄りて、すなほにうるはしうのみこそあれ、鳥尾の廣子がいとよく花圃女に似たりと見ゆれど、にほひやかなる處ぞかれはまさりたる、天野の瀧子が手をばさるかたに人たゞゆるよし、江崎のまさ子などのいと達者に書きたる大かたうるはしき手

の書きならはざるよりは、ふみなどのおもていとよし。香川の政子が手をはやく島田三郎が妻成しころさる人みて、なよびやかに花々しとは見ゆれどたてたる節なしやといひしが、人もしか操なきものに成りて、今はさる商家のおもひものに成ぬるよし。

五月三日 曉かたより大雨車軸をながすが如し、起出る頃にはや、小雨に成ぬれど今日は晴ぬべき様にもみえず。母君は例の血の道にて臥し給へり。今朝天知子より状来る、文學界五号に少し長きものにてよく、廿日前までに得させ給へとてなり、都の花の方もいまだ作り終らぬをいかでかとして、來月ならばと返事出す、今日母君いせ屋がもとに又参り給ふ。芦澤来る。

四日 晴れ。髪を洗ふ。何事なし。夕かけて西村君がもとに金かへしに行く、歸りてみるにお鏡どの居られたり、これより西村に金かりに行かんとしてなり。

五日 晴天、風つよし。芦澤来る、ならし野演習の慰勞休暇なるよし、姉君来る、稻葉君禮に参らる、姉君芦澤兩人にて柏もち買ふ、一同にて喰ふ。

六日 いと寒し、薄霜の降たるよし。人々いふ。此日來客いと多し、久保木夫妻、

菊地の老人、奥田の老人及び西村の親子来る、小宮山庄司突然來たる、おぶんの姿をかくしたる由にて、もし我が家にもやと半ばうたがひ半ば訴へんとてなり、母君と一間にしばし語りてかへる、哀れ狂せん斗まどひぬる姿はかなしともはかなし、其昔は八字髭にいげん備はりて誰がめにみるとも一かどの人と見えしを、かの姦婦ゆるにこそ家をもうしなひ親をもわすれ、其身はうき世の日かげものに成て今はた口をのりする爲にとるべき業なく車を曳き居るよし、お耻かしき事ながらとて語るを聞けば、着たるものとても其ふるびたるあわせの外に一枚もあらざるよし、淺ましき肉戀のはてながら、今日この頃のかれが心よ思ひやるまゝにいと哀なり、ものがたり猶せまほし氣なりしかど人々居あつまりぬる中にて久しうは聞くべきにもあらず、又こよとて母君かへし給ふ、人々も日没少しまへに歸りにき。まことや今日は前田家の園遊會なりけり、皇族大臣をはじめ貴族院議員外國公使など數の人來會するもの千人と聞えぬ。

七日 晴天。秀太郎来る。今日も又來客多し、山下直一及芦澤来る、芦澤は同僚をつれ来る、三人にひるめし出す、一同日没少し前まで遊ぶ、此夜母君と共に右京山に烟火見る、九段の祭にてこゝよりよく見ゆればなり。

八日 晴天。小宮山にふみを出す、返事直に來たる、いまだ文のありかしれざるよし。

九日

十日 晴れ。夜に入てより、荻野君を訪ふ、信濃怪事。

十一日 晴れ。今朝より國會新聞取る、諸縣霜害のおびたしくして、桑、茶などは更なり、もろくの苗のかれたる多きよし、群馬、埼玉の縣などには蠶をかふべきすべなくして、山川などにすてぬるも多かり、茶はすべて黒色にかはりて、中には幹まで枯れぬるもありとぞいふなる。

十二日 夜に入てより小宮山來る、淺ましき物がたり多し、夜明がたに歸宅す。

十三日 山梨に文を出す、小宮山の事につきて也。

十四日 ことなし。

十五日 母君誕生日に付芝の兄君及び久保木の姉君をも呼ぶ、ころろうき人々なれども同じばらからと聞ゆるものを道を道にたてうとしく成なんも母君の爲いと情なううらめしかるべき事とてかくは呼べる也、兄君より土産もらふ、姉君及び秀太

郎も來る、折よく上野の伯父君參られしかばこれにも酒を出しなどす、日没少し前まで遊びて歸らる、兄君もおなじく。

十六日 雨。

十七日 晴れ。西村君來訪。

十八日 雨。

十九日 晴れ。母君花川戸の小宮山がもとを訪ふ、午前八時より出て午後四時ごろ歸宅、種々になだめさとして正道に歸せしめんとすれど徳にしたがふべくも見えずとて母君いたくなげき給ふ、人の上ながらいと佗し。此夜新聞号外來る、福島縣吾妻山大破裂と聞えし。今日より四疊半の座敷にうつる。

戀は尊とくあさましく無さんなるものなり、つれづれの法師が發心のもととも文覺上人が悟道のしをりも是れに導かれて聞き渡るこそ尊けれ、花の散る所月のかくる、ところいづことしてか戀なからむ、あさましき肉戀を唯一の命として臭骸しばしも相いだかさればわが戀またく終りぬとなげき、うき世の望み絶えはてぬと佗ぶらむよ、されど夫はまだよし、その唯一の命とする戀の本尊を悪魔と知り外道としり夜叉とし

り、これが爲に我が命正に終らむとするを空に知りつゝも猶いさぎよく立はなれかねて、親をもわすれ子をもわすればかなき思ひを胸にだきつゝ、終にはいかさまにならむとすらむ、戀は心にありて人にあらず、抱かんとすれば月もいたくべし花もいたくべし、厭ふとならば何か又するに難きものやある、かゝみに物のうつるはもの來たりて後うつるか、鏡あればこそ先うつるか、もとのかたちを極めん末おのづから明かなるべし、されども無窮の月花は彼の靈山のいたゞきにあり、分けのぼる道はよしかはるとも終には我も人もひとしかるべし、色に迷ふ人は迷へ、情に狂ふ人は狂へ、現世にて一步天にちかづくとおのづからの天機にいざなはるゝ也、是非一道善惡不二。

廿日 晴れ。朝鮮防殺事件故なく落着したるよし其筋に電報達したるよし、或はいふ十七日の終局談判を十九日まで延期せしなりとも。

山梨縣に十五萬圓雨ふる。

吾妻山破裂調査として技師派遣、吾妻山は盤梯山の北五六里の處なりといふ。東京に狂水病おこらんとす。

廿一日 雨降る。日曜なれば青澤來る、姉君も來訪されしが少時にて歸宅、西村君

來る、きのふ母君金かりに參られしに折ふし來客中にてもの言はず歸られしかばいぶかりて來たりしなり、壹圓かりる、直に菊池君に持參、かへすべき筈のものありしかばなり、此夜小宮山庄司來る、おふん歸京の路用として金一圓五十錢爲替にさし出したれど猶何の返事もなし、此上は俸嘉一郎を迎として山梨に送らんといふ、嘉一郎は漸くかぞへの十三歳にて十歳何ヶ月の小兒なり、是れをしも唯一人手ばなし三十里の行程ことに知る人もあらぬ處へやりなんとする小宮山の心はすべてこれ惡魔の處爲なり、満身の血も彼の毒婦の上に斗そゞぎて母をも子をもかへりみるに處なき也、過る夜の物がたりの時は一家三人共に袂をしぼりて哀れ此人をすくはや、ともかくもして眞の道にいざなひ、眞の人にせばやと力を盡したるものから、やうく言の葉のものと末を取り今日までの來歴を問ひ定めなどするまゝに、淺ましき肉戀のはてのみにもあらず、人となりの正しからざることもほのく知らるゝに、今はこれまでなり、天は罪なき人を罪し給はず、毒を以て毒を制するとかや、古來いひ傳ふる事なり、及に血ぬらむもそれまでよ、あたら命うしなはむも定業よ、何かは我等があやまちなるべき、我等は我等のつとめを盡したり、成りぬべき人ならば正に道に歸すべし、言の用

ひられざるは天のかくせしめ給ふなるべし、止なんかなと思辨して、我は一語をも出さず、歸宅せしは十時過る頃成けり。これより腦痛はなはだしく終夜くるしみて胸間もゆるが如く、人世の浮沈人情の非薄倅こもく感じ來りて、くるほしき事いふべくも非らず。

廿二日 曇。九時ごろまでふしどにあり、母君もおなじく血の道にてやまし、今日一日は何事もなく暮したり。夕方より雨ふる。

廿三日 も雨也。母君血の道なほよろしからず、今日より日課をさだむ、此夜小宮山より郵書來る、いよく甲府に出立の心なるよし、今は又何をかいはん。十一時過る頃新聞号外來る、郡司大尉の一行暴風雨にあひ行方しれすとあり、又一報に大尉の行方はしれたり、委細はあとよりとありけり。

廿四日 雨。母君猶よからず、山梨縣廣瀬よりもろこしの粉郵送、これをもちに製して一同くふ、かしこにては日々の食のかてとして食するよし、我等いかにしても食し難し。此夕へ号外來る、北航端艇の中三番艇の行衛しれざりしもの青森縣上北郡字砂ヶ森にたゞよひつきけるが、其乗組員一人もみえざるよし。

廿五日 晴れ。早朝西村君參らる、一同にて茶をのみなどす、雜誌種々、はやうより我家と縁をくまんことを願ひてさまぐかこらける事もあり、我邦子を得まほしきよしは母もいひみづからもうちつけに此二月斗前にいひ出でけるを、思ふ事ことなりて斷はりぬるより、いかにおもひ取たるにか打たえてかつふつに音せず成ぬ。此人一人を厭ひぬるならばこそあらめ、天地の間乾坤のうち形の夫はもうけじとさだめけるをや、何故にうらむらむ、あな心みじかや、相しり初てより今歲十三年、うらなく交りぬる中にあやしき波風をたぐせなむこと、かつはかの人みづからの心からながらいとやましく、これよりはありしにかはらず行かひしけるがやうく心なほり氣げんあらたまりけん、此一兩度うちつけであしちかく通ひくる様に成ぬ、うきよにかたきを持たんことのかくるしきにかゝるさゝやかなる事なりともいとうれし、西村君のものがたりの中に桃水うしが小説をほめられたる見るめなき人かなとをもへどもにくからずかし。

今日の新聞廣告に同樂叢談とかや小説雜誌發行の廣告あり、正直正太夫、柳塙亭寅彦、果園主人などの顔なり、ありし武藏野におもかげ似たりとみるにも哀れむらざる

の一もといかにやとおもひやらる。

邦子今日より手内職をやめになす、日暮てより道太郎兄君の使ひに来る。

此夜はやくふしたれどおもふことありてねむり難かり。

雨ははれたり、軒ばのわか葉みどりすいしく、

人はまつによしなし閑窓の中、

たい苗うりの聲ひなびくるをきって、

更によみつづく唐詩選、

廿六日 雨。いと早く起出ぬ。漂流端艇乗組人行衛しければよし、電文簡單にて事實しれたし。今日も何事もなく一日をおくる。夜ははやくねたり。

廿七日 起出でみるに又雨也、しばしにて晴れにけれど夕立などの様に時々降りくる。かみさへおどろくしくなり渡る。午後廣瀬七重郎控訴事件期日経過したるかどを以て棄却の判決下る、直に郵送したり。

同樂叢談批評出たり、二号には桃水、友彦などの作も出るよし、すべてありし武さし野にかはらず、岡田凌波、三品りん溪もあり、故郷人の會合をよそに聞くが如く今

昔のおもひたえがたし。今日は甲子也、夕刻より邦子と共に小石川大黒天参りなす。

北航端艇三番艇乗組人行衛しければよし、今日の報に寄れば死骸いまだ分らずとあり、何れが是なるべきにや。

朝鮮東學黨ますく勢力を加へけるよし、露國人の加はり居るやに風説すれば、同國政府の恐こう少なからぬよしに聞く。

童うたといふものゝことぞともなきものながら世につれてこそうたひ出らめ、いにしへのひぢりの微服して市街に遊び給ひしもこれが爲也、今のよの童どもよ、聞くに得たえぬ歌ども花やかにうたひて二人三人よたりいつたり大路をねり行くさまも何の兆なるらむ、すでによの中くされたりや將にこれより亂れんとするや、朝にたち給ふ人のこゝろせさせ給ふべき事成かし。

稀有の日本人稲田眞之助あらはる。

故郷は忘じ難しはた忘すべからざるもの也、されど故郷なつかしとしてひたすらに心引かれてのみあらば都會に出で、志ざす大事業のなるべきものは、逢はでやみにし其人の上はたとふるに戀の故郷ぞかし、これをかけはしにして月を尋ね、花を尋ね、

かすみを哀れみ、霧をうれひ、人世を知り、天地をしり、古來今に渡りて宇宙の美をもとめんとす、何ものゝさまたげぞ夢にもうつゝにも立はなるゝによしなく、彼のさゝやかなる天地より見ばほとんど芥子の實のこぼれたらむ様なる一現象に満身をつくして、人しれず泣きみ笑ひみ、心月に成らんとする時花にならんとする時又立かへりてはなごりををしむらんよ、などひたすらに忘れん事は、故さと我が故さと也、軒ばあれぬとも人の心あらたまりぬとも昔しをしのぶに難かるべきかは、只一あしごと志ざす方へ進まんこそよけれ、一あしはすゝまんことをねがひ一あしは歸らん事を おもふ我心も何ものぞ、憂ひ來たりては彼の人をおもひ、力よはくしては彼の人をおもふ、よし今は更に人ともいはじ、清らけき眼ともいはじ匂ひやかなる口ともいはじ、何と得しれぬ一物の唯其人の名のりするものゝひしくと身にせまりくるこそ悲しけれ、ふる郷ごとと忘るまじきはかへすゝ知りつゝ、さりながら其故郷のわすれなむ事をなく鹿の起ふし願はるゝかし、あやし我ころは二つあるか、かたへより見れば淺ましくもせしくかへりてはおろかにいやしくさへおぼゆるを、今一方にてはよし此身あればこそかゝる物思ひもするなれ淵にも入らなん海にもづまなん、

すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きもおもはじなど様にさへ思はるゝよ、あはれ迷ひはいつの日にか晴れん、まことの美をばいつの日にか見む。

廿七日 雨。

廿八日 号外にて報を得たり、北航艇隊鼎浦丸又々難破、八の戸鮫浦字大久喜に漂着、のりくみ人一人もみえざるよし、恐らくは三番艇と其終りを同じうせしものならむとあり、かなしむべき哉。

廿九日 曇天。窮甚し、金子かりに伊東夏子君を訪ふ、ころよく八圓かされたり午後まで物がたる、宗教のこと哲理のこと中々につき難し、言ふ事々に反對ながら諸共に心胸かくす處なきぞ樂しき、邦子此日吉田君を訪ふ、野々宮君の事、喜多川君の事、奇談紛々、醜聞並び聞ゆ、此ごろ傳ふる處みるところ清くいさぎよき事ども少なくして、かくあさましき事多かるはよの中をしなべてにされるによるか、されどもかたへをみれば伊東夏子ぬし、平田禿木君などとしまた若く世故になれざる人の心よ、神をしたひ神を敬まひ、道義の光を起さんとする人々も見ゆるを、あながちによの中にこれりとも定のがたし、思ふに一葉生じて一葉落つるは天地の理なり、正に大いに大

宗教おこり、大教理おこなはれんとする兆としてかくはかくまでみだれ行にや、十九世紀の孔夫子及び釋尊いづこにか睡れる、天下は來らむとするものを先むかふるなるべし、詩歌文學の漸々下り坂に見ゆめるはこも又大詩人、大歌人のねむりをさますものにあらずや、楽しいかなや、事をなすべき人の舞臺は今めの前にせまりぬるぞかし。此夜凶報又到来、郡司大尉さめ浦に於自殺をなすと、又一報には變死なり、現場に判檢事出張すとあり。

されど我國會新聞の報に寄れば、大尉は自さつせしに非ず、過失にて負傷したる也、きす又少しと報ず。

卅日 雨。大尉の事をおもふに早朝心なやまし、我が新聞の報する處に寄れば破るん船體燒却の際右眼をやけどなしたる也といふ。

卅一日 めづらしく空晴れたり。郡司大尉變死一條の誠に針少棒大の偽りにて、小負傷をなしたるのみ、五日を経ば全治すべしと聞く。

姉君より兄君うけとるべき筈の金子遣はさる、夜に通運にてさし出したり。芦澤來る、金子壹圓あづかる、もとよりのと合せて二圓九十錢也。

今日も空さわぎて一二度急雨來る、夕刻より又晴れ。山梨縣伊庭准次よりはがき來る、雜誌購求を依頼して也。

六月一日 晴れ。中島いく子君一年祭のむしもの到来、明日は祭典なればとて招かる、おこうさま參らる、古ゆかたを呈す、久保木姉君來訪、平田禿木君より書あり、文學界の事につきて也、此夜入浴おそく寝たり。此日土方邸行幸。

二日 曇天。午後より中島君に行く、雨に成ぬ、會する人二人にて誠に内輪なる會合成も、夜に入てより歸宅。伊東君よりよみ賣新聞かり來たりしまゝ十二時ごろまでこれをよむ。

此日土方邸行啓。

三日 めづらしく晴れたり。北航遠征記を見る、そう難てん末の委しきを見るにも一讀三歎などかゝるをいふにや、大尉が心中おもひやるだにいたまし。

四日 晴れ。小石川稽古におもむく、午後より番町に三宅君を訪ふ、一月以來はじめて訪ひしなり、ひたすら家事に身を委ねて世上の事文事の事何にも耳に入らずとて極めて冷やかに成給へり、少時にて歸宅。

五日 雨。山梨縣廣瀬來りて一泊。

六日 晴れ。稻葉小君來訪、菊池隱居來訪、兵隊來る、一日ごたくに終りたり。

七日 晴れ。いなば君來訪、西村君來る、藤田東湖、龜田鵬齋の書人よりたのまれ
て賣却せんとするを中島先生などの中にしかるべきかひ手あらずやとて也。

片々

南洋諸島の中それがし島の王弟サミ氏來朝、こゝかしこにてもてなす、やかましき
ものは辯護士會長選舉のさわぎ、角石事件、花房君マーエツト氏侮辱事件、市ノ川鐵
山事件、いさましきものは福島中佐遠征終りて近々に歸朝さるゝと聞く。

あはれなるものは、

郡司大尉の一行、それも軍艦警備に曳かれて五日には箱館に入りぬるよし。

隣りづから騒がしきは、

朝鮮東學黨、しづまりては又もえあがるよ。

八日 晴れ。寺島宮中顧問官薨去の報あり、夕刻より江戸川あたり散歩、田中君に
手本持參、此夜号外來る、吾妻山第三回の破裂に調査技師三浦宗三郎同 雇西山總吉

死去とあり、いたふしき哉。

九日 曇天。

十日 雨也。

三浦宗三郎、西山總吉兩氏とも内室懷妊中なるよしかさねていたまし。

此ごろの大とりもの、

河内國七人斬兇手は二人にて金剛山にたて籠りつゝ、警察十津川管下の警察官を盡
くしてもとむること二十日、とらゆること能はずして終に自殺す。

片々

郡司大尉の一行ボート行を中止して汽船にのりゆくよし。

何故にまつらむとも覺えず、又まらぬべきあてのあるにもあらず、聞て嬉しきた
よりか聞かずしてかへりて幸ふくなるか、何方にもくおもひたどられず、門をはし
る郵便脚夫の哀れ我家に寄れかし、かの人のたよりなれかし、一人は空しくすぎぬと
も此つくなるこそはとまどに寄りてしばくまつ、はかなく過ぬるもにくくとなり
入ぬるもにくくし、門札しばくながめてあらずとて行過たるいよくにくくし。

わすれぐさつまんとぞおもふすみよしの

まつかひあらむものならなくに

戀はこころにあつく身にはいとふ、

沖津波きしのよる邊とねがはぬを

くだくるものはこころ成けり

もろともにしなばしなんといのるかな

あらむかぎりは戀しきものを

久かたのあめにまじりて我おらむ

みえぬかたちは人もいとほじ

さるもの日々とうとひとごとにいへば、

しげりあふまどのわかたけ日にそへて

うとしやなにのこと葉なるらむ

雨ふる日其人の著書をみる、

かきくらしふるは涙かさみだれの

空もはれせずものをこそおもへ
 見るもうし見ざるもつらし、
 くりかへしみるに心はなぐさまで
 かなしきものをみづくきのあと
 十一日 晴れ。午後より芦澤来る、少し雨ふる、今日は入梅なり。
 片々
 ひうちなだ事件やおさるる。
 十二日 雨。寺島宗則君葬式と聞く、道路くるしかるべし、寺は海あん寺なりとか
 聞けり、今日めづらしく老翁の聲絶えず聞ゆ、郭公にあらそふらんもをかし、早朝
 星野君よりはがき来る、文學界にのすべき著作をうながして也、断りのはがき出す。
 十三日
 十四日 大石公使歸朝、新橋停車場出迎人の喝采萬雷くづるゝ如し。
 十五日 雨。芝兄君来る。
 十六日 雨。

十七日 曇。

十八日 俠客駿河の次郎長死亡、本日葬儀、會するもの千餘、上武甲の三洲より博徒の頭たちたるもの會する五百名と聞えたり。

十九日 晴れ。日没後國子とまりし天參りなす。

廿日 晴天。

廿一日 曇。山梨より芳太郎衣類着。

著作まだならずして此月も一錢入金のめあてなし。

廿二日 晴れ。今日は國子誕生日なれども祝ひのばして廿五日になさんと云ふ、此夜母君と共に近傍散歩、小石川に中島師君機嫌をきく、風邪也とて打ふし居られけるが物がたること多かり、みの子ぬしの品行日ましにみだれゆく杯覺ゆるはなどものがたらる、夏子ぬしの敬神の念いやますはよけれど、たいかたまりにかたまりてあのまゝならんには終に如何ならむとすらんなどかたらる、夏子ぬしの事はおきてみの子ぬしのさるすきがましきは如何にぞや、いとうたてくも有哉、内々のことはとまれよそよりみんには御門下の名のけづらるべきにあらず、我不學のよくしることならねど今

のよの文墨にたづさわる人にして女子のしかるべき人ふつになしとぞいふめる、いかで御門下出身の人にして少し世にも聞え、よし學はとまれ、道德たかゝらむ人をこそ出さまほしけれ、田中ぬしの不徳は今日にはじまりしにもあらざめれどいかでをしへさとし給ひて誠の道にみちびかせ給はらずやなど語るに、師はたい打なげきて、いなあたわじ、もとよりみの子の事はいふべきにもあらず、こは秘密のことなれど鳥尾廣子ぬしの少し此頃歌の口ほどけたるより世にあらはれん事をせちに願ふなることも又虚飾にて、誠のみにちこゝろさす人には非らず、夏子ぬしなどこそと思へどこれはた富家の處女いたづらに時世にも遊ばれてたてたる心なしかしなど、たい門下の人をあしざまにのみ給ふめる、師は親なりおもふ事おはさばなどかの給ふにかたかるべき、おもてにはうつくしく時にしたがひたる事をのみ仰せて、さてかく右とひたり左と右おなじ友のたれかれの間には批判を加へてさみし給ふぞわりなき、我が事なども斯くこそ給ふめれ、いざや何事もよしむかしはか様のことをいといたくにくみて友のうちにもさる人あらばまじらはじなどさへに思ひたりき、今はおもへば人は我をけがすものならず、かゝる人ありてかゝる事をいふ成けり、しらすしてまどはされなんは

わろし、知りての後に何事のあやふき事はあると定めて、たゞ大方の物がたりしてかへる、師君財政のいと困難なるよし物がたられし也、我がよもさる事は侍らじ、口に山海のちん味を味はひ、身には綾羅をかざり給ふとも、たゞいさゝかなる身一つなるをといひしに、否な我が上には何ほどの事かあらむ、兄の必死と困難の折に落入て此春よりこれをすくはんが爲にいくばくの苦勞をかなしにけん、されどもいさゝかのしるしも見えず、いまだに何事のもとゝも立たすなどもがたらる、何ぞや事を兄君に歸して自家不徳の費に供し給ふらむ、さくまゝに心地わろしとおもふも猶一を知りて十に及ばざる心からなめり。

廿三日 晴れ也。芦澤明日よりかまくら地方行軍なるを、用なく休日なればとて来る。今日も何事なしに終る。日没少し前母君と共に右京山に花を尋ぬ。今宵より蚊帳つり初けり、はやく寐たり。

廿四日 晴れ。

さかりなるものは、

福島中佐歓迎沙汰、三浦西山が遺族扶助の義捐、いづれもくしかるべき事にてい

と嬉しきものから、何事も名のみ尊とぶ頃にて。

あはれなるもの、

郡司大尉一行のゑとろふにつきたりと聞くにむねしづまる心地しながら、此後の事如何なさんとすらむ、先に移りたる人々の食にともしくて死したるもありとか聞くを其たくわへなども多からずして出立ちにし人々よあはれこゝにも眼をはなつ人あれかし、北海道は紳士の遊び處にあらず、此人々ぞまこと身をすて、邦に盡さんとする人ぞかし。

廿五日 晴れ、午後夕立来る。行水後國子と共に天王寺に中島老君寺参りす、夫より根岸に下りて御行の松一覽、そのわたりの田、早苗いまを盛にとるなる、日暮るゝもしらず見るもをかし、國子の蓮の葉と芋の葉と取違へたるもをかしかりき、歸路坂本の通りに出で五條天神の祭りみて池のはたより歸る、時しも夕ぐれにて歌ひめども行かふみるもをかし、馬見場にて福島中佐が歓迎場もうくるとてかッりたきつゝ、工事いそぐもにぎはし、家ちかくなるほど又々雨こぼれ來ぬ、されどやがて晴れにけり、一人燈下に更るまで書見をなす。

廿六日 晴れ。

廿七日 晴れ。金策におもむく………
此よ小柳町失火、山下兄弟来る。

廿八日 山下次郎来る。

廿九日 晴れ、薄曇也。福島中佐歸京に付歡迎もやうしのおびたいしからむをおもひ、母君にも見せ參らせ度もる共に正午より上野に行、此ほどの事かきつゝくべきに非ず、三時頃歸宅。上野伯父上及び清次君来る、上野行かへりなるよし、我れは直に一昨日たのみたる金の成否いかを聞きにゆく、出来がたし………

伊東君より歸りくる、日没後なりし。此夜一同熟議實業につかん事に決す、かねてよりおもはざりし事にもあらず、いはゞ思ふ處なれども母君などのたゞ歎きになげさて汝が志よわく立てたる心なきからかく成行ぬる事とせめ給ふ、家財をうりたりとて實業につきたりとてこれに依りて我が心のうつろひぬるものならねど、老たる人などはたゞものゝ表のみを見てやがてよしあしを定め給ふゆゑ、世渡りのむづかしさはこれをとるもかれを取るもおなじかるべし、これより行路難いかにぞや、されども我

らはらからはうきよのほめそしりをかへり見るものならず、唯おのれのよしとみて進む處にすゝまんのみ、霜はしらくづれば又立なほさんのみ。

卅日 早朝母君かち町に金とりに行く。

芳太郎のあづかり金二圓四拾錢になる。

みづづは鹽氣を厭ふと見えたり、海邊ちかき處などはさら也、深川たて川通りなどに至ればいかなる濕地とてもみづづを得る事なし。



につ記 (二十六年七月)

人つねの産なければ常のこころなし、手をふところにして月花にあくがれぬとも
 鹽憎なくして天壽を終らるべきものならず、かつや文學は糊口の爲になすべき物なら
 ず、おもひの馳するまゝこころの趣くまゝにこそ筆は取らめ、いでや是れより糊口的
 文學の道をかへてうきよを十露盤の玉の汗に商ひといふ事はじめばや、もとより櫻か
 ざしてあそびたる大宮人のまとのなどは昨日のはるの夢とわすれて、志賀の都のふり
 にしことを言はず、さ々なみならぬ波鏡小鏡厘か毛なる利はもとめんとす、さればと
 て三井三びしが豪奢も願はず、さして浮よにすねものゝ名を取らんとにも非らず、母
 子草のはゝと子と三人の口をぬらせば事なし、ひまあらば月もみんな花もみんな、興來ら
 ば歌もよまん文もつくらむ、小説もあらはさん、唯讀者の好みにしたがひて此度は心
 中ものを作り給はれ、歌よむ人の優美なるがよし、涙に過たるは人よるこばず、織巧
 なるは今はやらず、幽玄なるは世にわからず、歴史のあるものがよし、政治の肩書あ
 るがよし、探てい小説すこぶるよし、此中にてなど、欲氣なき本屋の作者にせまるよ

し身にまだ覺え少なければどうるさゝはこれにとゞめをさすべし、さる範圍の外にの
 がれてせめては文學の上だけでも義務少なき身とならばやとてなむ、されども生れ出
 て二十年あまり向ふ三軒兩どりのつき合ひにならば、湯屋に小桶の御あいさつも
 大方はしらす顔してすましける身の、お暑うお寒う、負けひけのかけ引、問屋のか
 ひ出し、かい手の氣うけ、おもへばむつかしき物也けり、ましてやもとでは絲しんの
 いと細くなるからなんとなくしはしるの葉のこまつた事也、されどうき世はたなのだ
 るま様、ねるもおさるも我が手にはあらず、造化の伯父様どうなとし給へとて、
 とにかくにこえるをみまし空せみのよわたる橋や夢のうきはし

七月一日 晴れ。母君かぢ町より金十五圓受とりきたる、芦澤かまくらより歸京な
 したりとて來たりしかば商業はじむべきものがたりして山梨より金五拾圓かりくる、
 様頼む、速座に手紙をかく、小づかひ二十錢渡す、残り二圓二十錢也、此よ小石川よ
 り神田邊散步。

二日 晴れ。早朝芦澤來る、母君山下君のもとに本をかへし、次郎君就職の結果
 を聞き來る、華族銀行の試けんに及第なして百人ばかりの中より七人役につく様に成

りけるよし、母君歸り後次郎君も来る、門にてかへる、我が近邊に華族銀行員のあるを訪はんとてなめり、午後野々宮君より書状来る、當月末には歸京なすよし、此度はもはや辭職の決心と見えたり、其わけ／＼ひそかに聞わたるこそをかしけれ、芳太郎日没ちかく歸らむとする折から思ひ寄らす我が門とふ人あり、母のしば／＼見て猪三郎ならずやといふ、打笑みつ／＼と入る、芳太郎が腹がはりの兄にて十年斗前我が家にかゝり居し人也、他郷にありて故郷人に逢ひぬるばかり嬉しきものなしか聞けるを、まして是れははらから也、うれしさいか斗かとおもふに、事のおもひがけぬに胸をやうたれけんとかくの詞もなく顔のみ赤らめ居るもをかし、直に芳太郎歸營、猪三郎は東京に商業の目的を立て、移住せんが爲也といふ、此夜ふくるまで物がたりす。

三日 晴れ。母君同道にて猪三郎家さがしに行く、淺草田原町、七軒町二ヶ處に氣に入しがあるよし、夕がたより又ゆく、差配人不在にてままとまらず、又明日行んといふ、暑は昨日九十六度、今日は九十五度なり、日中のあつさはいふべきにもあらず、此夜お鐵どの參らる、十一時頃まで話す、芳太郎に小づかひ又三十錢渡したり。

四日 薄曇。猪三郎早朝より淺草に行く、母君小林君に金子の相談に參り給ふ、あ

きなひを始めんといふにいさゝか也ともとでなくては叶はず、せめては五拾兩ほどかり來んとてなり、されどもほとよりの借もあり只にてはとて家に藏したる書畫類十幅斗をあづけんとす、父君愛し給ひしものながらこれをうらんとなさば二十金の直打もあらず、何か外に添ゆるものあらばな母君も妹もいふ、何かこれがあたいにとて乞ふには非らず、我れに信用あらば白紙一枚百金にもあがなはるべし、なくば一毛も六づかしかるべし、遺愛の甘棠さるなかれとさへいふを時のやみがたければこそ手ばなさんともいふなれ、みるめがらにては不孝の人にもならん、先づはおのづからに任せ給ひて我がころのまゝを取つぎて始終の物がたりせさへ給いて、其上にかり出すことの出来がたければ夫までぞかして、母君に其品がきを參らす、正午少し前歸宅かしこにもいとこんざつなる事ありて成否まだ知れがたし、されどもいさゝかの綱が有りといふなり、夫より淺草に猪三郎のもとを母君訪ひ給ふ、田原町に家を持つ事に定めたれば也、此夜國子と共に近邊散歩、歸後夕立来る。

五日 薄曇もりめづらかに涼し、奈良わたりのひでりにて水論しきりに起り、雨乞などの風説聞くさへ哀也。

四五日此方、横濱銀貨相場おびたしき亂高下にて中には店をとちたるも有よし、獨り奇利をたくましくなしたるは正金銀行なりとか聞こえし。小林君より返書來る、金子調達なりがたし。此ごろかしましきもの、教育宗教衝突事件、新聞に雑誌に議論かなへの沸く様也。

にくきものは、

密りよう船のはびこり、伊豆七島などにも出沒するよ。

公使二人の上、

大鳥と大石といかならんとすらん、支那も朝鮮もかゝはる處ちかければ。千島かんもまだ裁判終らざるこそ心もとなけれ、反訴とかやにくき事をぞいふめる、わが判官べんごしらに明らけくさとき人ありてときふせたらむにはいかに嬉しかるべきにや。執達吏こそにくき役なれ、名のみ聞けば其人さへおにくしく情なからむとおもふに、又相しりたる人などのそれに成りてさしにくげなるとさへあるはをかしましや。

戀は、

見ても聞きてもふと思ひ初ぬるはじめいと淺し、

いはでおもふいと淺し、

これよりもおもひかれよりもおもはれぬるいと淺し、

これを大方のよには戀の成就とやいふらん、逢そめてうたがふいと淺し、

わすられてうらむいと淺し、

逢はんことは願はねど相おもはん事を願ふいと淺し、

相おもはんも願はず、言出んも願はず、一人こゝろにこめて一人たのしみいと淺し、

名取川瀬々のうもれ木あらはればと人の爲我がためをしむらんたぐひ、うきに過

たる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものから身は引

はなれてことさまに成行、さてはみさほを守りて百年いたづらぶしのたぐひ、いづれ

か哀れならざるべき、されどもこれらは戀に酔ひ戀に狂ひ、此戀の夢さめざらん中々

此夢の中に死なんとぞ願ふめる、おもへばいと淺き事也、されども浦山しきは此さか

ひ成るべし、まこと入立ぬる戀の奥に何物かあるべき、もしありといはいみぐるしく

にくく、うく、つらく、淺ましく、かなしく、さびしく、恨めしく、取つめていはん

には厭はしきものよりはかあらんとも覺えず、あはれ其厭ふ戀こそ戀の奥成けれ、厭

はじとて捨られなば厭ふにならず、いとふ心のふかきほど戀しさも又ふかゝるべし、
 いまだ戀といふ名の残りぬる戀は淺し、人をも忘れ我をもわすれ、うさも戀しさもわ
 すれぬる後に猶何物ともしれず残りたるこそ此世のほかの此世成らぬ、かゝるするに
 すべてたのしなどいふ詞を見出づべきにもあらず、さればくるしといふ詞もなかるべ
 き筈と人いはんなれど、その戀あればこそ世にたゞよふなれ、捨たりといへど五體う
 ごめき居らむほどは此苦も又はなれざるべし、佛者の佛となへ、美術家の美とな
 ぶる、捨てて／＼すてぬるのちの一物やこれ。

六日 晴れ。芳太郎來る、奥田老人來る、暑氣あたりをやいたくよはりたる様也。

七日 母君田部井のもとに衣類賣却の事たのみ参り給ふ、とても書畫などうりたり
 とてまとまりたる金子の得らるべきにもあらず、持つ人の手に有てこそ尊とびもせめ
 好まざらむ人には反古にもひとしかるべきを、いでやこれも父君のため給ひしもの也
 冥々のさかひにおはしましてをせしませ給ふにや、買人なきこそよけれ、今はうらじ
 さりとて金子の才覺はせざるべからず、大方の衣類うり盡しぬれど猶きぬちりめん
 たぐひ一つ二つはあり、我が中島師のもとに會合などあらむ時の料なれどこれをしも

いふ時にあらず、さる頃まではいかに窮したりとも一つ二つは残してさる時の用意に
 などもいひけれ、萬はみな非也けり、敷島の歌のあらず田あれにける様を見しりける
 より、すべてのよのあさましさはかなさまでもおもひたどられて何か又さらに花々敷む
 しろにつらなりおこめかしくひいらき居ぬべき心地もせず、萬骨をすてゝ市井のちり
 にまじはらむとおもひたちける身に、花紅葉何のうるはしき衣かざるべき、よしこれ
 にて十金也とも十五金也とも得しほどをもてと手とせむ、これをうしなはゞかれに
 つくべきのみとて成けり。

八日 晴れ。母君田部井に様子きゝに参り給ふ。

九日 ふたゝび趣く、十五圓ならば買手ありといふ、二重どん子の丸帯一すぢ、緋
 はかたの片かとはと縹珍縹子の片かとは、ちりめんの袷衣二つ、絲織一つ也、夫にてよし
 とて約束なる、此夕へ西村君來る、事情ものがたりて道具を買ひくれ度よししたのむ爲
 まねきつる也。

十日 晴れ。田部井より金子うけとる、此夜さらに伊せ屋がもとにはしりて、あづ
 け置たるを出しふたゝび賣に出さんとするなどいとあはたし。兄君のもとにはがき

出す。

十一日 明日父君祥月命日なればたい夜として茶めしたき汗たてなどしてまねくといふほどならねど上野君を呼ぶ、午前より五時頃まで遊ぶ、此夜荻野を尋て荻野の妻來る、兄君來る、此度の計畫をも語るに何事の可否もなし、もとより我がおもふにたがいたるはらからが如何様の事なさんともそは關する處ならず、されども見給へ末終になしとげらるゝ物には非らじ、まこと浮よのむづかしきを知り、たてたる心のをるゝ時あらば我も又よそに見んとはいはず、かしらを下げて來る事あらば母をも其身らをもやしなひては取らすべし、夫までの事は勝手たるべしとていとひやゝか也、深くかたる事もなくてふしぬ、暑さはげしく更るまで寝がたし。午後師君のもとに中元禮に行く。

十二日 早起兄妹三人築地に寺參りをなす、歸宅後疲勞ことに甚だし、午後より裁縫をする、芳太郎來る、猪三郎の日歩がしをせんといひ居るよしかたる、ことばに絶たるもの也。

号外來る、十一日午前九時發シカゴ博覽會特派員電文にいはいはく、昨日常會場に大火

あり、混雜甚だしく死者十七人と聞えし、いとみじかくて意を取がたけれど日本人はみな無事とありたるぞ先は嬉しき、母君田部井のもとに行く。

十八といふとし父におくれたるよりなぎさの小船波にたゞよひ初て覺束なきよぞうみ渡ること四とせあまりに成ぬ、いたりたがたき心のはかなさはなべてのよの中道を経がたくして、やうく大方の人にことなりゆくもとより我が才たらずおもふことあさからむをば恥おもへど、こゝろにはかりにも親はらからの言の葉にたがひ我がたてたる筋のみを通さんなどきしろひたる事もなきを、いかにぞや家貧にもものたらず成ゆくまゝに此處にかしこにむづかしき論出來てたゞ我まゝなるよをふるとて、知らで母などをもくるしめ兄のたすけにもならざらんが如いひはやすよ、いでよしや大方の世はとて笑ふて答へざるものから、たれはおきて日夕あひかしく母のあな佗し今五年さきにうせなば父君おはしますほどにうせなばかゝる愛きよも見ざらましを我一人残りといまひたるこそかへすく口をしけれ、否我が詞を用ひず、世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指すめる、邦も夏もおだやかにすなほに我がやらむといふ處、虎之助がやらむといふ處にだにしたがはひ、何條ことかはあらむ、いかに心をつくしたりとて手を盡し

たりとて甲斐なき女子の何事をかなし得らるべき、あないや／＼かゝる世を見るも否也とて朝夕にぞの給ふめる、母は子のこゝろを知り給はず、子も又母のこゝろをはかり難ければなめり、おもふ事おもふに違ひ世と時と我にひとしからず、孝ならむとする事はかへりて不孝に成行くげにかゝるこそ浮よ成けれと昨日今日ぞやう／＼おもひしらるゝ。是非のめじるしあらざらむ世にたゞよふ身ぞかし、寄せかくる波は高し。我身はかよはし、折々には巻きさられんとすることかなしけれ、福島中佐が踏分こしうらるの山は高かるべし。西比利亞の野の廣かるべし、冥々の中にひかえたる關のかくつらくかなしきを見ればいづれおなじき旅路也けり、こえ終らむほどは棺をおほふ曉なるから偕こそ善悪の評もさだまれ、今日此ごろの旅寝にしてほむるそしる聞及べき時にはあらず、かねてさだめ也、おもひたらたるまゝにとて。

十三日 晴れ。母君田部井にゆく、午後伊三郎益禮に来る、日没國子と近傍の寺廻りなす、伊三郎十時歸宅。

十四日 晴れ。母君田部井に今日もゆく、うりもの少し直段よく成たり、久保木佐藤益禮に来る。

今日より新聞東京朝日にかへたり、小説は三味道人、桃水痴史也。

久保木より李到來、母君菊地君もとに益禮にゆく、隆一君新益なればそなへもの持ちて。

安政年間子もり歌、

但し其ころの諸侯旗下などの中にのみとなへられけるものにや猶かんがうべし。ぼうちやん明神様へ行くときにや、栗毛のお馬にくら置いてむらさき手綱をお手にそへ、わかと草履とりおやりもち、はい／＼と参ります、かへりのおみやは何である、

でん／＼大に笙の笛、起上り小法師に犬はり子。

わらへ歌、

ほ／＼たる来い、山みてこい、あんどの光りをちよいとみて来い。

子もり歌、

ねん／＼／＼ころりこおころりよ、ねんねのお守りはどこへいた、山こえて川こえて

里へいた、おさとのおみやは何である、でんくたいこに笹のふる。

塵の中 (二十六年七月)

十五日 より家さがしに出づ、朝日のかげまだ見え初ぬほどより和泉町、二長町、浅草にかけても鳥越より柳原藏前あたりまで行く、此度のおもひたちはもとより店つきの立派なるも願はず場處のすぐれたるものをぞまず、料ひくとして人目にたつまじきあたりをとのさだめなれば、つとめて小家がちにむさくせし處をのみ尋ぬ。はやうより世に落はふれてたよりなくさやかなる處にのみすみけるものから、猶門格子はかならずあり庭には木立あり家には床あるものとならひけるを、天井といはばくろくすゝけて仰ぐも憂く、柱ゆがみゆかひく、軒は軒についき勝手もとは勝手元にならびぬ、さるが上に大方は疊もなくふすまもなく唯家といふ名斗をかす成けり、はじめのほどはあまりの事にあきれて戸のそとより見けるばかり入りて尋ぬべき心地もせざりしが、かくて行々たりともはてもなしとまれ訪はんとて其隣の家につきてとふ親切にこれかれ語りて聞かするもあり、にくく敷差配に行きて問ひ給へといふもあり、差配と聞えし男の四十斗にてかしらはげたるが帳場格子やうなるものをひかへて

そろばんはじき居るうしろに中元の禮にやもらひけんさゝやかなる砂糖袋さては素麵
などやうのものをひしとならべていと鷹風にもいふもにくし。三くら橋と和泉ばし
とのあはひなる小路に四疊半二疊二間なる家あり、店は三疊ばかりも板の間に成りて
此處には疊もあり建具もつきけり、長屋なれどもさまできたなからず敷金三圓家賃壹
圓八十錢といふ、それもよし是れもよし唯庭のいさゝかもなくしてうらは直にうら道
の長屋の屋根につゞきて木立など夢にも見らるべきに非らず、うらみは是れと覺ゆる
ものから、猶母君に見せ參らせてよしとならばよしにせむといふ、くに子のしきりに
つかれて道ゆきなやむも哀なれば、今日はこれまでよとて歸る、まだ午前成し、家に
かへりて猶さまぐくに相談なす、幾そ度おもへども下町に住まむ事はうれしからず、
午後より更に山の手を尋ねばやといふ、庭のほしければなり。

駒込、巢鴨、小石川邊はいづれも土地が静かによき處なれど、何がしくれがしの
別荘など多く、我が様なるいやしき商ひしたりとて買ふ人あるまじと覺ゆ、さては詮
なし、牛込ならば神樂坂あたりこそと覺ゆれど、知る人ちかゝらむも佗しくかれこれ
さだまらずしてかへる、飯田ばしより御茶の水通りを來れば、今日は川開きとて此わ

たりに小舟うかべて客を引くよ、おかには馬車きしらせていそがするもあり、かちな
るも美事によそほひ立て、其さまほこらしげなり、かへり見れば邦子のつかれにつか
れけるあしを引きてしと汗に成てしたがひ來るあはれ此人もふびん也、いといとけ
なきに父兄におくれて浮よめかしき遊びをもしろす、萬はかなくて送るほどにやうや
う浮よめのかはりものに成りて、春の花ののどかなるをのみ見てうれしとおもはぬほど
に成ぬる、さてやこれよりの境界のあさましきをおもへば此人の爲も母の爲もかなし
さは胸にみちてすゝむべき身もおぼえず、さりとして退ぞきて行かたもなし、心ほそし
とはかゝる時をこそ。

十六日 晴れ。母君西村に行く、道具の事につきて也、芳太郎並に山下直一來る、
午後より山下次郎が頼み事にて梅吉を青柳町に訪ひ給ふ、今日は一日こんざつに終る。

十七日 晴れ。家を下谷邊に尋ぬ、國子のしきりにつかれて行ことをいなめば母君
と二人にて也、坂本通りにも二軒斗見たれど氣に入けるもなし、行々て龍泉寺町と呼
ぶ處に間口二間奥行六間斗なる家あり、左隣りは酒屋なりければ其處に行きて諸事を
聞く、雑作はなけれど店は六疊にて五疊と三疊の座敷あり、向きも南と北にして都合

わるからす見ゆ、三圓の敷金にて月壹圓五十錢といふにいさゝかなれども庭もあり、其家にはあらねどうらに木立どものいと多かるもよし、さらば國子にかりて三人ともによしとならばこゝに定めんとて其酒屋にたのみてかへる、邦子も違存なしといふより夕かけて又ゆく、少し行ちがひありて餘人の手に落ちん景色なればさまぐに盡力す。

十八日 晴れ。龍泉寺町のこと近邊なれば萬猪三郎にまかせたるに午後まで返事なし、さらばとて又母君と二人行く、道に行違ひて留守に行きけり、されども萬好都合におさまりたりと聞きしかばこれより轉宅のもうけをなす。

十九日 晴れ。早朝藤陰隠士をさるがく町に訪ひ二時あまりものがたりす、夫より伊東君を訪ふ、いづれも轉宅の事かたりになり、藤陰のもとには小説の事につきはなし多かり、此夕かけて道具を西村に持參、これをうりてあきなひのもと手になさんとて也、同じ道なれば師君をも訪ふ、病氣にて打ふし居給へり、もの語りしばらくおくらどの參られしかば夫にゆづりて直にかへる、家の片づけは久保木手傳ひて大方出来たり、今宵は何かむねさわぎて睡りがたし、さるは新生涯をむかへて舊生涯をすてん

ことこのよこたわりて也。

廿日 薄曇り。家は十時といふに引拂ひぬ、此ほどのことすべて書つゞくべきにあらず。

此家は下谷よりよし原がよひの只一筋道にて、夕がたよりといろく車の音飛ちがふ燈火の光りたとへんに詞なし、行く車は午前一時まで絶えず、かへる車は三時よりひきはじめぬ、もの深き本郷の静かなる宿より移りてこゝにはじめて寝ぬる夜の心地まだ生れ出で、覺えなかりき、家は長屋だてなれば壁一重には人力ひくおとこども住むめり、商ひをはじめての後はいかならむ、其ものども、お客なれば氣げんにさからはじとつとむるにこそ、くるわ近く人氣あしき處と人々語りきかせたるが男氣なき家のいかにあなづられてくやしき事ども多からむ、何事もわれ一人はよし、母は老ひたり邦子ははまだ世間をしらず、そがおもひわづらふ景色を見るも哀也、さてあきなひはいかにして始むべきなど千々にこゝろのくだけぬ、蚊のいと多き處にて蚊蚊といふ大きなが夕暮よりうなり出るおそろしきまで也、この蚊なくならんほどは綿入する時ぞとさる人のいひしが、冬までかくてあらんこと怪し。

井戸はよき水なれども深し、何事もなればかく心ほそくのみあるべきならず、知る人も出来あきなひに得意もふゆべし、そは憂しとても程なき事也、唯かく落はふれ行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終らばつひのよに斯の君に面を合はする時もなく忘られて忘られはて、我が戀は行雲のうはの空に消ゆべし、昨日まですみける家はかの人のおしをとめたる事もあり、まれにはまれには何事ぞの序に家居のさまなりとも思ひ出で、我といふものありけりとだにしのばれば生けるよの甲斐ならましを行ゑもしれずかげを消してかくあやしき塵の中にまじはりぬる後よし何事のよすがありておもひ出られぬとも、夫は哀れふびんなどの情にはあらで、終に此よを清く送り難くにごりにごりぬる淺まし身の身とおもひ落され、更にかへりみらるべきにあらずかくおもひにおもへばむねつとふさがりていとねぶりがたく、曉のくるはやう聞えぬ、此宵は大雷にて稻づま恐ろしく光る。

廿一日 夕べより降ける雨なごりなく晴れていとしのぎよし、はがきしたゝめてこれかれ十軒ほど出す、今宵は少し寝られたり。

二十二日 晴れ。今日は土曜日也、小石川の稽古日いかならむとおもひやらる、母

君中橋の伊せ利を訪ふ、あきなひの事につきて也、送籍のことたのみに久保木へ手紙出す、昨日今日は家内の掃除つくろひなどにてひまなし。

廿三日 晴れ。朝より伊せ利きたる、店に棚つりなどして午前をすぐ、午後かへるさながら問屋にかけ合ひくれんといふ、誰にまれ諸共にとあるに、さらば我を伴ひ給へとて共にゆく、門跡前に中村屋忠七とよべるが伊せ利の昔し馴染なるよしにて此處へ周旋す、五圓斗の品ととのへくれといふ、手つけとして一圓渡す、明日荷はもち込むべき約束、伊せ利は明後日朝かざりつけに來たらむといふ、諸事し終へてかへる此五圓の金も今は手もとになし、かねて伊三郎の夫ほどはかならず調へんといひけるをあてになしけるなれば、母君直に三間町に趣く、おもふまゝならぬこそ浮よ成けりな、伊三郎が妻昨夜より急病にて旅の空といひ持てる金も多からざる上、さる人にあづけたる金の返らざるなどにて右左むくよしもなき處へ故さとに殘したる妻も俄のわづらひにて留守の騒ぎ大方ならざるよし、秋露のはきたてにかゝりける最中男手なくして侘合へるもさこそと思へば、此地の人の病ひ少しひま見えは一度ふる郷にかへりて又なす方もあらむなど、かしこにもいと難義の折からなりといふ、扱はせんなし、

この上は西村の方をといふ、今日上野君來訪されたり。

廿四日 早朝うす曇り。母君小石川に行く、正午らかくまで歸り給はず、問屋より今日荷の來べき約なればいか様にせんと案じわづらふ、十二時母君歸宅、西村にてとゝのひ難しといひけるよし、かねて道具を引受けるゝ約にて送り置ける其料二十金、がほど早々といひけるを來月までといひ延びに成しなれど、かゝるいそぎの折から他に道もなし、五圓にてもよし、今直にをと母君の給ひけれど、三十日ちかくにはありいかにしてと断りしかば、さらば何ほどなりとも出来るほどをとゝのへくれよ、かゝる次第なればと事のわけをうち明してたのみたまひけれど、いかにしても出來がたしと断りける上、お常などの失禮なる詞いひけるよしの給ふ、かへるさに久保木にも頼みけれどもかしこにても出來ず、いかにせむとの給ふ、さてはせんなし、先づ問屋の方に断りいひ置んとて直に家を出づ、田中より車にてはしらす、今荷ごしらへの最中成しかば事つくろいて一日二日の猶豫をいひ入る、こゝはわけもなくすみけり、これより直に伊せ利にも断りいひやる、日没少し前母君三間町を訪ふ、伊三郎すでに歸宅の後也、此夜かれがもとへ金子たのみの文を出す、國子と共に吉原にあそぶ、一々記

すことかたし、此日母君三枝を訪ふ。

廿五日 晴れ。母君中之町の伊せ久におちよどのを訪ふ、仕事の世話をしたのみになり、心よく引うけくれたるよしにてゆかた一枚持参、これを手みせにこれよりは絶えせず世話をなさんといひけるよし、國子直に仕たてにかゝる、此夕へ國子と共に三間町に病人の安否をとひ、歸路花川戸町、待乳山下、山谷ぼりより日本づゝみをかへる、いぬるまで國子と共に家の善後策を案ず。

落ぶれてそでに涙のかゝるとき人の心の奥ぞしらるゝとはげにいひける言葉哉、たらぬことなき其むかしは人はたれもたれも情ふかきもの世はいつとてかはりなきものとのみ思ひてけるよ、人世之行路難は人情反ぶくの間にあるこそいみじけれ、父兄よにおはしましける昔しの人も、こゝにかく落はふれぬる今日の人も、見るめに何れかはりも覚えざれど、心さまのいろゝをみれば浮世さながらうつろひぬる様にこそおぼゆれ、さればこそ人に義人君子とよばるゝは少なく、貞女孝子のまれなるぞ道理なる、人は唯其時々感情につかはれて一生をすごすもの成けりな、あはれはかなのよや、さりとては又哀れのよや、かの劍之助が我家に對して其むかし誠をはこびけるも

昨日今日のつれなき風情も、共に其ころのうつしる成けり、今にもあれ我が國子をゆるさんといは、手のうらを返さぬほどにそのあしらひの替りぬべきは必定也、をかしやうきよのさまんゝなるこゝには又かゝる戀もありけり、其かみは我家たかく彼家いやしく欲より入て我はらからを得んといひ願ひけめ、やう／＼移りかはりてはかしたことみて我れ貧なるから恩をきせてをしいたゞかせんとや斗りつらむ。夫にもしたがふべき景色の見えぬをいとつらにくゝ口をししくおもひて、扱はこたびの事を時機におもひのまゝにくるしめんとたくらみけるにや、こは我がおもひやりの深きにて、あるひはさる事もあらざるべしとはおもへども、彼れほどの家に五圓十圓の金なき筈はあらず、よし家にあらずとて友もあり知人もあり、男の身のなさんとならば成らぬべきかは、殊に母君のかしら下ぐる斗にの給ひけるをや、とさまかうさまにおもへどかれは正しく我れに仇せんとなるべし、よし仇せんとならばあくまでせよ、樋口の家二人残りける娘のあはれ骨なしかはらはたなしか、道の前には羊にも成るべし、仇ときゝてうしろを見すべき我にもあらず、虚無のうきよに好死處あれば事たれり、何ぞや釧之助風情が前にかしらを下ぐるべきかは、上に母君おはしますにこそ何事もやすら

かにと願ひもすれ、此一度のふみを出して其返事のも様に寄りてはとおもふ處ありけり。

廿六日 雨。早朝西村に手がみを出す、字句つとめてうや／＼しくひたすらにたのみてやる、母君中之町へ仕立ものゝ事につきて参り給ふ、午後出来あがりたるをもて又ゆく、我れも母も今日は例の血の道にてふしたり、母君日没少し前三間町に見舞にく、あしき方成しよし、今日は終日ひやゝかにしてわた入羽をりきる人も見うけたり。

あはれいかにことしの秋はみにしまむ

すみもならはぬやどの夕か是

いづれぞやうきにえたへで入そむる

み山のおくの塵の中とは

御隠居様など呼ばれけるは昨日也、こゝに移りぬる後はたれ一人むかしを知る人もあらず、あやしき町風の詞にこそいはれんといひしに隣の妻の御隠居様とやはりいふ、處から伊せの濱をぎもとの名をよばれんとしもおもはざりしを。

廿七日 晴れなれどもすゞし、すゞしいはんよりは冷やかなる方也。廿四日の寒

暖計正午時九三四度とありしに、其夜より下りに下りて廿五日は七十度より八十度夜に入ては六十度にな成ぬ、昨日も今日も七十度代成り。午後區役處より呼出し來る、戸籍の事につきて也、母君地主に印もらひに行く、西村來る、金子たのみやりたるほどととのひ難しとて三圓持參。

又もえ上りたるは、

相馬家の事件いかにおさまらんとすらむ。

大石辭して大鳥君の兼任されけるより、朝鮮人その勢ひつよく成けるやにきく。

天台道士杉浦君朝日の紙上に日支の關係を論ず、さりよと覺ゆる事多し。

廿八日 晴れ。寒暖計八十度なり。午前區役處に趣く、戸籍の上少し違ひたる處ありて本郷の區役處に照會するなど今日中にはまだととのひ難し、此夜お若たのみにより伊三郎へ文を出す。

廿九日 晴れ。お千代どの及び五十二殿參らる、正午まではなして羽織一枚たのみ行く、酒井の娘二人我がもとへ下稽古たのみせしなどいふ、今日もさしたる事なし、夜に入てより伊三郎より手紙來る。

廿四日に出したる手紙の返事也、たのみつかはしたる金たしかに送るべきよしひ越す、母君今日望月へ例月のもの取にゆく、一錢も出來がたくして歸る。

三十日 晴れ。何事もなし、夕刻吉田、野々宮兩君來る、野々宮君は廿七日歸京されたるよし、例の婚儀の約ととのひて其支度の爲なるよしはかねて吉田君より聞居し事なれど、さも知らざるべし野々宮君のものいひたげに見ゆるもをかし、されど吉田君にはいかりてにやこゝにてはいひも出さず、これより諸共に燈籠見にゆく、其道にてしかくもの語るをかしきことも多かり、歸りしは十時頃なるべし、岩手みやげには名産豆銀糖とかや味はよからねどめづらしき物也、松島みやげの寫眞三葉、同じく穴なし竹の印材を送られたり。

三十一日 早朝雨ふる、量少なりしかば今日はひねもすむして暑し、邦子職業の事につきて種々わづらひ多し、吉田野々宮のふたりに斗りて又せんすも有べしとて此夜二人池のはたの吉田君が訪ふ、歸りは九時成し、甲府伊庭より轉宅見舞狀來る伊せ久よりおいくどの來たりよし。

八月一日 晴れ。芦澤今朝ならし日より歸京せしよしにて訪ひ來る、中之町の燈籠

今宵より又人形に改まるよしにて門すぐる車又おびたし、母君散歩ながら見に行、我れは七書をよむ。

此午前伊勢久がもとにたのまれの仕事母君持参、いたくほめられけるよし。

二日 晴れ。終日事なし、日暮てより望月の妻來る、二十五錢持参、廣瀬より爲替來る、此夜家内相談ありけり。

三日 曇り。早朝家を出づ、根津片町にはうづき屋を尋ね、上野をぬけて郵便局に爲替うけとる、金七圓也、それより門跡前に廻りて問屋に持込の事をたのむ、歸宅後直に伊せ利がもとへはがき出す、母君は廣瀬より來たりし由二圓をもちて伊三郎が留守宅にゆく、おわかには渡さんとて也。朝より今日は芳太郎來たりけり、午後より雨折々にふる、日くれてより國子と共に燈籠見にゆく、人形に變りける景況を見んとてなり、歸路雨になる。

人形は安本龜八及び門弟などの作なるべし、

東京名處成けり。

毎夜廓に心中ものなど三味線に合せてよみうりする女あり、歳は三十の上いくつ成

るべきにや、水淺黄にうろこ形のゆかたきて帯は黒じゆすの丸帯をしめ、吉原かぶりに手ぬぐひかぶりて、柄長の提燈を襟にさしたるさま小意氣にしやんとして其むかしは何成けん然なかせし未なるべきか、まだ捨がたき葉櫻の色を捨て、のあきなひと見れば、大悟のひじりの心地もすれど、あるひは買かぶりの我れ主義にて仇な小歌の聲自まんこれに心をといめよとにや、すけんぞめきの格子先、一寸一服袖引たばこ、あがれあがるの問答に心うかる、たはれをはしらす、粹が身をくふおもふどし二かいせかれてしのびあし、離にからむつたのもん、松の太夫とさゝやきの哀れ命を引四つのかねに限り、ゑんをう瓦上おく霜の明日をもまたじとおもひつめし身には、いかに身にしみて心ほそかるべき、ほそく澄たる聲はりあげて糸の音色もしめやかに大路小路とながしゆくうしろ姿、これが哀か、かれが哀か。

一昨日の夜我が門通る車の數をかぞへしに十分間に七十五輛成けり、これをもてをしはかれは一時間には五百輛も通るべし、吉原かくてしるべし、さりながら多くは女づねなどの素見客のみにて茶屋かし座敷の實入りは少なきよしに聞く、伊せ久などにてすら客の一人もなき夜ありとかいひし、さなるべし、今宵九時まで見ありきける

うち、かんばんを提げたる茶屋送りの客は一人も見うけざりき、されど角急びのみは大景氣に見えけり、此夜江戸町に迷子を助く、四つ斗の男子にて何事も分からざりしには困りき、後にしれたるが父母及び他に男女二人三人あり、こゝはさほど雑踏の處にもあらざりしを迷子になしける親のいかにうかつに見ありき居けるにかをかし、さて我が子を尋ねあてぬれどさして我れ等によるこびを逃べんともあらず、やがて又向ひの横町に伴ひ行きける、をかしき人もありけるものなり。

四日 晴れ。終日まちけれども問屋も来らず、伊せ利も来たらず、いかに行違ひしにかと一同まち佗ぶ、夕刻より問屋の様子き、くに行く、違約のかどをいたく佗びて明日は早朝に持ち行くべしといふ、さらばとてこれより神田にゆく、雉子町の北川君がもとを訪はんとて也、途中にみやげもの買ひて三味せんぼり車にてゆく、邦子が友の中にて一の人と見えけり、少し軽忽にて重りかなる處は少なけれど馴れ安げに奥そこなさぞ却りては心深かるべきにや、詞つきも取なしも洒々落々せし人も、あきなひの事につきて種々たのむ、歸路はくらく成けり。

五日 晴れ。早朝根津のほうづき屋を訪ふはなしあり、下谷區役處に廻りて菓子小

賣の鑑札をうけんとす、いまだ戸籍の事さだまらざればとてやめになす、今日も午後まで問屋来らず、伊せ利の手つだひにとて一時ごろに來たりければ中村屋に約束の爲ゆく、直に送るべしといふ、二時まで来て来たらず、三時にもまだ也、四時も過けり、五時ちかく成りて來る、日没までにかざりつけ濟たり、二間の間口に五圓の荷を入れけるなれば其淋しさおもふべし、幸ひに田部井よりがらす箱を買ひおきしかばそれにて少しものにぎやかしに成ぬ、伊せ利には一こん出す、十時ちかくまで飲みて話しけり。

六日 晴れ。店を開く、向ひの家にて直に買ひに來る、中々にをかしき物也、母君は例の奥田に利金拂ひ田部井に箱をあがなはんとて家を出づ、師君より書狀來る、一兩日中に伊香保へ湯治に趣き給ふよし、その留守にて我れ主と成りて數よみ催しくれよとの頼み也、断りの文を出す。

文につけて思ひ出たり、伊庭のもとに一昨日はがき出したり。

夕刻より着類三つよつもちて本郷の伊せ屋がもとにゆく、四圓五十錢かり來る、菊地君のもとに紙類少し仕入る、二圓ちかく成けり、今宵はじめて荷をせをふ、中々に

重きものなり、家に歸りしは十時ちかく成りき、持參の紙類明日の朝店に出すべき様
今宵のうちに下ごしらへをなす、十一時床に入る。

七日 晴れ。早朝花川戸の間屋に絲はりをとめけり、しやぼんの割合中村屋より
は廉に覺えしかば一本もとめて来る、駒形の蠟燭屋にろうそくをかひ、看板の事など
たのむ、歸宅後多事、西村より書状来る、依頼なし置し金子ちかくに出来べきもや
うをいひこす、本日區役處より入籍の件に付呼出し来る。
今日は昨日にくらべて商ひ少し多し。

八日 晴れ。早朝髪をゆひて八時頃より區役處にゆく、母君の年齢芝區より間ちが
ひ来たりて今更に改たむること面倒なれば天保九年生れとなす、菓子小賣願ひの奥印
をこひて東京府廳分署に行く、淺草南元町とて厩はしのまだ先き也けり、印紙料三十
錢、半年分税金五十錢を納めて事とのふ、歸路中村屋に蚊遣香の有無を問ひ、用た
しすこしなす、他店のもやうをも知らんとて紙類少しづゝもとめ来る、今日のあつさ
は又おびた敷、田剛道などは全く往來絶えたり、家に歸りしは正午、これよりしば
しひる寝す、夕方より母君中の町に參らる、仕事持參、此夜習字。

此頃の事少し、

- 一 塙國皇太子來朝、
- 一 榎本子爵夫人たつ子死去、寺は駒込吉祥寺、葬儀五日。
- 一 伊藤總理の息式部官勇吉君函館にて大負傷、塙國皇太子奉迎の爲趣きけるが乗船の
折ボートに落ける也とか、性命も六づかしかるべしと聞く。
- 一 知人笹岡君判事の退職を命せらる。
- 一 朝日の小説一昨日よりなみ六になる、出しものは深見重三なり、例によつて例の如
し。

九日 晴れ。早朝、二人あきなひあり、物馴れぬほどのをかしさは五厘の客に一錢
のものをうり、一錢の客に八厘のものを出すなど、後にてしらぶればあきれたる事を
のみなすぞかし、此まゝにてをしゆかば中々に利を見ることの出来得べきにもあらね
ど其うちには又其うちの利口生すべしなど語り合ふ、伊せ久のお千代どの買ものに来
らる、二十錢斗商ひあり、午後上野君來訪、夕飯をいだす、日くれてより西村来る、

金十圓持參、上野の房藏君徴兵の抽せんにのがれけるよし。

十日 晴天。早朝母君と共に森下にて菓子箱を買ふ、歸路は君三間町を訪ひ給ふ、伊三郎がつま昨朝逃亡と聞く、驚愕直に山梨へ書狀出す、北川君のもとへは明朝菓子買出しにゆくべきよしはがき出す。

七つといふとしより草雙紙といふものを好みて手まりやり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは英雄豪傑の傳、任俠義人の行爲などのそゝる身にしむ様に覺えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき、かくて九つ斗の時よりは我身の一生の世の常にて終らむことなげかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出てしがなとぞあけくれに願ひける。されども其ころの目には世の中などいふもの見ゆべくもあらず、只雲をふみて天にとゞかむを願ふ様成りき、其頃の人はみな我を見ておとなしき子とほめ、物おぼえよき子といひけり、父は人にはこり給へり、師は弟子中むれを抜けて秘藏にし給へり、おさなき心には中々に身をかへり見るなど能ふべくもあらで天なくみしやすきのみ我事成就なし安きのみと頼みける、下のころにまだ何事を持ち

て世に顯はれんとも思ひさだめざりけれど、只利慾にはしれる浮よの人あさましく厭はしく、これ故にかく狂へるかと見れば金銀はほとんど塵芥の様にぞ覺えし、十二といふとし學校をやめけるが、そは母君の意見にて女子にながく學問をさせなんは行々の爲よろしからず、針仕事にても學ばせ、家事の見ならひなどさせんとて成き、父君はしかるべからず猶今しばしと争ひ給へり、汝が思ふ處は如何にと問ひ給ひしものから、猶生れ得てこゝろ弱き身にていづ方にもく定かなることいひ難く、死ぬ斗悲しかりしかど學校は止になりけり、それより十五まで家事の手傳ひ裁縫の稽古とかく年月を送りぬ、されども猶夜ごとく文机にむかふ事をすてず、父君も又我が爲にとて和歌の集など買ひあてたまひけるが、終に萬障を捨て、更に學につかしめんとし給ひき、其頃遠田澄庵父君と心安く出入しつるまゝに此事かたりて、師は誰をか撰ばんとの給ひけるに、何の歌子とかや娘の師にとしごう相しりたるがあり此人こそとすゝめけるにさらばとて其人をたのまんとす、苗字もしらす宿處をも知らざりしかば、萩野君にたのみて尋ねけるに、そは下田の事なるべし、當時婦女の學者は彼の人を置て外にあるまじとてかしこに周旋されき、然るに下田ぬしは當時華族女學校の學監と

して寸暇なく、内弟子としては取りがたし、學校の方へ參らせ給はゞとの答へなりけれど、我がやうなる貧困なる身が貴紳のむれに入なんも忙しとはたさず、兎角日を送りて或時さらに遠田に其はなしをなしたるに我が歌子と呼ぶは下田の事ならず、中島とて家は小石川なり、和歌は景樹がおもかげをしたひ書は千蔭が流れをくめり、おなじ歌子といふめれど下田は小川のながれにして中島は泉のみなもとなるべし、入學のことは我れ取はからはんに何事の猶豫をかしたもふとてせちにすゝむ、はじめて堂にのぼりしは明治十九年の八月二十日成りき。

七月廿日より三十一日までの家賃六十錢三十一日渡す。

八月三日二十錢芳太郎に渡す、殘金四十錢に成けり。

八月二日望月より二十五錢來る。

神田雉子町三十番地

北川 秀子

本郷區根津片町十一番地

太田 芳之助

小石川 表町六番地

西村 劍之助

淺草三間町二十番地

廣瀬 伊三郎

猿樂町二丁目二番地川合直方

山下 直一

塵中日記 (二十六年八月)

十一日 晴天。朝まだき家を出づ、北川君の許へ着きけるが漸く五時半頃なりけん藤兵衛老人の周旋にて菓子並びに手遊ものなどのかひ出しをなす、まだ生れ出てよりかゝる處の景況を知らざる身にはそゞろ恐ろしきまでものはげし。

正午少し前家に歸る。かざり付くるも遅しとばかり買ひに來たる子供あり、よろづものなれずして間違ひのみ多きもをかし。

十二日 晴れ。母君は小石川、本郷、あのあたりに禮參りに行き給ふ。今日のいそがしさは又無類成らん、さて賣上の金はと問へば二十八九錢成しなるべし。

十三日 晴れ。かひ出しに多町へ行く。今日のうりあげは三十三錢。

十四日 晴れ。また多町にゆく、歸路はくるま。今日のうりあげ三十九錢。

十五日 晴れ。今日も相應に賣れたり。

十六日 雨。家のふしんをなす、商ひを始めざりし頃はさのみにも思はざりし店つきの兎角に都合好からねばこれを直さんとてなり、一日にして事終る。今夜野々宮君

大久保君來訪。

十七日 晴れ。多町にかひ出しに行く。今日埃國皇族新橋に着、市中國旗をかゝぐ

十八日 朝來あれもやうにて風ものすさまじし。

歸宅後更に大音寺前にせんべいをあつらへ、駒形に蠟燭の註文をなし。門跡前にし

ふ團扇をあかなひ來る。

今日下駄をもとむ、後齒の白木にてさらさ形の革鼻緒成りしが、代金二十錢成し。

夕刻より雨になる。風力さらに加はりてほとんど嵐に似たり、戸を明け置く事あた

はざればはやくおろしてふしたり。

十九日 晴れ。風あらし。午前より西村の母君來訪、例の縁邊の事につきてはなし

あり、夕ちかく歸宅されき。

明日は鎮守なる千束神社の大祭なり、今歳は殊ににぎはしく山車なども引出ると

て人々さわぐ、隣りなる酒屋にて、兩日間うり出しをなすとて、かざり樽など積みた

つるさま勇まじきに、思へば我家にても店つきのあまりに淋しからむは時に取りて策

の得たる物にあらじ、さりとてもとでを出して品をふやさん事は出來うべきにもあら

すよし出来たりとてさる當てもなき事に空しく金をつひやすべきにあらず、いでや中村やに行きてかざり箱少しあがなひ來んとて夜に入りてより家を出づ、今宵即座に間に合はざりしかば明日のあさ持參すべき約束にさだめてまつち五十錢ばかりをあがなひぬ、そは金がさ少なくて見場のよければなり。今夜は更るまで大多忙。

二十日 早起。雨もやうなり。多町にかひ出しに行かんも如何などしはしたゆたひけるが兎も角もとてゆく、歸りしは十時頃なりし。夫より門跡前にゆき、かざり箱並にみかき砂の類かひ來る、一日大多忙。商ひは壹圓ばかりありき。日暮れてより雨になる。

廿一日 山車神輿の渡御などいとにぎはし、されども商ひは多からず、然るは子供達の大道商人に引取られてなり。

廿二日 晴れ。

廿三日 はれ。

廿四日 はれ。今日は商ひ例より多し。各縣下暴風雨の報あり。

廿五日 晴。早朝芳山來る、廣瀬の事につきてなり。

今日も一日雨にくらしつ。

此處四五日、身のせわしさをみなならざるが上に、腦のなやみつよくして寐たる日もあり、すべて日記を怠りぬ。

此頃の事

牛込原町中川三吉所有地處土窟のこと。

岐阜、愛知及び各縣下暴風雨洪水の件。

星亨並に相馬家の件。

九月一日 早朝より例の腦病起りてしばしもたつことあたはず、終日ふしたり。午後より雷雨おびたし。

三日 奈良孝太郎君厩橋邊なる質商佐野屋方へ奉公に赴く。

四日 早朝より多町へかひ出しに行く。前雇人吉太郎が八百屋になりたるに逢ふ。

飯田町に芦澤が爲替うけ取る。

この日、狂風砂塵を巻きて、御成道、廣小路あたりは面を向くる方もなし、車にて

かへる。

廣瀬伊三郎歸京、参り居りしかど、脳痛はげしくしばしも起居ることかなはねば其まゝ打ふす。

此の一日二日脳痛烈しく、大方打ふしぎりなりしかば、日記も物せず。

七日 午前五時築地本願寺別院小使部屋より出火、太子堂を殘して悉皆焼失せり。

八日 晴れ。

十五日 廊内俄はじまる、母君切符を人に貰ひて、検査場に勢ぞろひ見にゆく。

十六日 母君菊池君に行く、留守にて風船を仕入る。

十七日 中島師君より手紙来る。

十八日 星野君の郵書鎌倉笹目が谷より来る。

十九日 四五日脳痛烈しく、加ふるに商業忙しくして、何事をも物せず。

二十日 雨降る。彼岸の入りなり。

廿一日 おなじく雨。

此の頃の賣高 多き時は六十銭にあまり、少なしとても四十銭を下る事はまれなり

されど大方は五厘六厘の客なるから、一日に白人の客をせざる事はなし、身の忙しさかくて知るべし。

廿三日 薄曇り。早朝金杉なる菓子のおろしやに行く、こは毎朝の例なり。歸宅

直に食事したゝめて、神田に繪紙かひ出しにゆく。

廿四日 雨少し降る。

過去無数の諸佛にも捨てられたるをばいかッせん、現在十方の淨土にも往生すべき

心なし、たとひ罪業おもくとも、引接し給へみだ佛。

尋ねべき君ならませば告げてまし

入りぬる山の名をば夫れとも

けんもんしやの兩面の水干に袖むらごに雀の居たるをぞ縫ひたりける、紫裾濃の袴をぞ着たる。